

ボランティアに関する授業科目又は
ボランティアを取り入れた授業科目一覧

【 I .大学】

○ 北海道大学

授業科目名	応用経済学特殊講義Ⅱ「国際経済協力・ボランティア概論」		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際協力	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部3・4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計139名(男子学生93名 女子学生46名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	本講義では、わが国の開発途上国に対する国際協力について理解を深めることを目標とする。青年海外協力隊の派遣を含む国際協力機構(JICA)の事業内容、円借款を担当する国際協力銀行(JBIC)などの政府事業、および国際協力NGO等の活動の取り組みを概観し、その現状と課題などについて、多くの関係職員、ボランティアの体験談を踏まえながら考察を深める。またJICAの国内機関のひとつであるJICA札幌が、国際協力実施機関として、国内で実施している事業について紹介し、国際協力における「市民参加」および国際協力にかかわる多くのアクターの取り組みと連携の可能性についてもあわせて考察し、理解を深めることを目標とする。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義オリエンテーション、日本のODAとJICAの事業概要 2. JICAの技術協力事業 ~ インドネシアでの協力事例 3. JICAの技術協力事業 ~ ベトナムでの協力事例 4. 専門家派遣、安全管理と中南米への協力事例 5. JICAボランティア事業 ~ 青年海外協力隊 6. JICA市民参加協力事業 ~ ネパールでの協力事例 7. JICA草の根技術協力事業 連携事例(支援型) 8. JICA札幌の国内機関としての事業(青年研修、開発教育支援など) 9. NGOによる国際協力(海外を中心とする取り組み) 10. NGOによる国際協力(国内を中心とする取り組み) 11. 企業の国際協力への取り組み 12. 円借款事業と国際機関との連携について 13. 地球環境問題に対する国際協力 14. 人間の安全保障について 		
教科書	なし		
授業の工夫点	1講義毎にゲストを招き多種多様な講義を展開している。		
授業の評価方法	出欠(40%)、レポート(30%)、試験または個別プロジェクト(30%)として採点します。2/3以上の出席がない場合は評価の対象としません。		
授業のサポート体制	TAを雇い、授業の補助に充てている。		
学外の関係機関・団体との連携	JICA札幌に講義を依頼している。そこから、別の団体のゲストを招いて講演してもらっている。		
今後の授業の継続	未定		

○ 岩手大学

授業科目名	持続可能なコミュニティづくり実践学		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人文地理学、自然災害科学、環境技術、環境材料	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計57名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	地域の活性化は、日本中どこでも大きな課題になっている。しかし、そこには王道はない。それぞれの地域が抱える課題を的確につかみ、対処法を独自の手法で編み出す中に、活路が開けてくる。持続可能な地域“開発”を実践的に学んでみよう。岩手の中からこの課題を問うてみる。新しい岩手を発見できるはずだ。遠野、葛巻、岩泉、滝沢の首長が直接諸君に語りかける。この機会を活かしてほしい。		
授業内容	中央に依存するのではなく、独自の首長が直接諸君して、中央を巻き込んでいく。わが岩手県には地域おこしの多くの事例がある。そこに学ぶことが何よりも肝心なことだ。そこには、持続可能なコミュニティづくりという共通項が見えてくるはずだ。同時に広い視野からこの取り組みを位置づけることも重要である。どの地域にも克服すべき多くの課題がある。マイナスであった課題を、プラスに転じることができたとき、地域おこしは具体化し持続可能な姿を見ることができるようになる。今回招聘するいずれの講師(遠野、葛巻、岩泉、滝沢の首長)も、この「戦い」の最前線に立っている。現地に学ぶ豊かさを体現されている。授業の中でその豊かさを得ることができるか否か、受講者が問われてくる。公務員を志望する諸君にとって、直接自治体の首長と話せる絶好の機会を作ることも十分可能である。身近に首長と話せる機会は、大学生活で唯一の時間になるかもしれない。このチャンスを活かしてほしい。		
教科書			
授業の工夫点	岩手県の自治体の首長(遠野、葛巻、岩泉、滝沢)を招聘し、授業は展開する。しかし、一方的な講義にとどまることなく、受講者も交えたディベートに展開することもある。		
授業の評価方法	出欠(40%)、レポート(30%)、試験または個別プロジェクト(30%)として採点します。2/3以上の出席がない場合は評価の対象としません。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	都市の自然再生プランニング		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	林学、森林工学、環境農学、植物生理・分子学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部2年次	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計21名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	都市生態系を市民の共有財産にするためには、行政はもとより市民、事業者、その他すべての人々が自己の力と能力に応じて協働し、都市の自然再生を進めていかなければならないことを調査や活動参加を通して学ぶ。		
授業内容	第1回 ESD、授業ガイダンス 第2回 複合化する大気環境問題への対応 第3回 河川環境とその再生 第4回 都市域の植生構造を解き明かす 第5回 地域の雑木林再生と環境樹木学事始め 第6回 野鳥のすめる街づくり 第7回 まちを知り、まちづくりに取り組もう 第8回 共生を支える水のネットワーク 第9回 都市「盛岡」の形成と環境負荷の低減 第10回 「行動する市民」を育む環境教育 第11回 環境コミュニティづくり 第12、13、14、15回 実習（見学、調査、活動参加など）		
教科書	橋本良二・比屋根哲編著、都市の自然再生プランニング、地域環境再生研究会		
授業の工夫点	地域でおこなわれているさまざまな環境再生活動を紹介している。		
授業の評価方法	レスポンスカード(40点) ・指示どおりの内容が書かれている(20～30点) ・一歩深めた視点・見解、独創的な考えがうかがえる(加算10～20点)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	特別支援教育	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	教育学部2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計74名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティアに関する基本的問題やボランティア活動の実情について学び、ボランティア養成や活動の組織化の課題について学習する。		
授業内容	ボランティアに関する様々論や実際のボランティアの心得などを講義やビデオ視聴等を通して概説する。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート 70%、出席状況 30%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 東北大学

授業科目名	成人教育論特論Ⅱ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	成人教育論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	教育学研究科(総合教育科学専攻1・2年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計7名（男子学生3名 女子学生4名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	これからの成人教育には、市民の社会参画を広げる手法としての発展が求められている。一人ひとりが市民的力量を獲得する環境づくりは、今日の自治体政策における再重要課題の一つである。この課題に先駆的に取り組む実践に学びながら、これからの知識社会における成人教育保障の到達段階と課題を確認する。		
授業内容	全体を三部構成で計画している。 ①成人教育をめぐる基本的認識、とくにNPOと社会教育行政の今日的関係をめぐる構造を講義で説明する。 ②成人の学習や、教養の再編をめぐる注目される文献を、検討する。 ③それぞれの関心に基づき、仙台市内の市民活動の取材・報告をしてもらう。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	出欠(40%)、レポート(30%)、試験または個別プロジェクト(30%)として採点します。 2/3以上の出席がない場合は評価の対象としません。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	非営利組織論特論a		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学研究科	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計6名（男子学生3名 女子学生3名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	まちづくりや環境、福祉医療、教育等、様々な分野で活動を展開し、新たな社会の担い手として台頭してきた非営利組織(NPO)について、その存在意義や経済的規模、国際的な位置づけ、各分野の活動の現状と課題、関連制度、行政や企業との協働等、多様な視点から理解を深めることを目的としている。		
授業内容	教科書に基づき、毎回のテーマに沿って、導入的な講義、受講生による報告および全体での討論を行なう。取り上げる主なテーマは次の通り。 (1)非営利組織とは：定義、歴史、規模、国際比較 (2)非営利組織の存在理由と社会的役割：経済学的、経営学的、政治学的アプローチ (3)非営利組織の多様な活動：福祉医療、環境、教育、まちづくり、国際協力等 (4)非営利組織に関する制度：特定非営利活動促進法、公益法人改革、寄付税制 (5)行政や企業等との関係：競争と協働、社会的企業		
教科書	雨森孝悦(2007)『テキストブックNPO－非営利組織の制度・活動・マネジメント』東洋経済新報社、その他冊かの候補から、受講生と協議の上選定する。		
授業の工夫点	受講生が実際に活動しているNPOについての事例発表も積極的に取り入れ、理論だけではなく、生の現場の様子も伝えるようにした。		
授業の評価方法	出席(20%)、報告(30%)、討論への貢献度(20%)、レポート(30%)を基準に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	国際ボランティアネットワーク(イブの会)によるゲスト講義および情報・書籍提供や意見交換。		
今後の授業の継続	今後も継続(ただし、隔年開講科目)		

授業科目名	非営利組織論特論b		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学研究科	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計6名（男子学生3名 女子学生3名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	非営利組織がミッションを実現するための、マネジメントの理論と実践について学ぶことを目的としている。非営利組織の使命、リーダーシップ、人的資源管理、ガバナンス、評価等の基礎理論、研究動向や事例について理解を深める。		
授業内容	教科書に基づき、毎回のテーマに沿って、導入的な講義、受講生による報告および全体での討論を行なう。取り上げる主なテーマは次の通り。 (1)非営利組織の使命 (2)非営利組織のリーダーシップ (3)非営利組織の人的資源管理 (4)非営利組織のガバナンス (5)非営利組織のマーケティング (6)非営利組織の資金源開拓 (7)非営利組織の評価、アカウンタビリティと信頼		
教科書	オスター、シャロン・M著・河口弘雄監訳(2005)『NPOの戦略マネジメント—理論とケース—』ミネルヴァ書房、その他何冊かの候補から、受講生と協議のうえ選定する。		
授業の工夫点	受講生が実際に活動しているNPOについての事例発表も積極的に取り入れ、理論だけではなく、生の現場の様子も伝えるようにした。		
授業の評価方法	出席(20%)、報告(30%)、討論への貢献度(20%)、レポート(30%)を基準に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続(ただし、隔年開講科目)		

授業科目名	非営利組織論演習I(a)		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学研究科	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計1名（男子学生1名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	教科書や主要論文の報告や討論を通して、非営利組織の基礎理論および研究動向を理解する。そのために、広義の非営利組織に関する受講者の関心テーマについて、各自が先行研究を探し、レビューを行い、その成果と課題について理解する。また、修士論文執筆に必要な基礎知識を実践的に習得する。さらに、理論と実践との融合を図るため、非営利組織への視察やインタビュー等も実施する。		
授業内容	・教科書・主要論文に関する報告および討論 ・各自の関心テーマの先行研究に関する報告および討論 ・研究テーマの発掘、情報収集、文献検索、倫理 ・プロジェクト(視察やインタビューを通じ、現状と課題の把握および解決策の提案)		
教科書	Anheier, Helmut K. (2005) Nonprofit Organizations: Theory, Management, Policy, Routledge、塚本一郎・古川俊一・雨宮孝子『NPOと新しい社会デザイン』同文館出版などより、受講生と協議のうえ選定する。		
授業の工夫点	地域イノベーション研究センター主催のプロジェクト型教育研究の一環で実施している「NPO人材マネジメント・プロジェクト」との連携。		
授業の評価方法	出席(20%)、報告(30%)、討論への貢献度(20%)、レポート(30%)を基準に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	非営利組織論演習Ⅱ(b)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学研究科	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計2名(男子学生1名 女子学生1名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	教科書や主要論文の報告や討論を通して、非営利組織の基礎理論および研究動向を理解する。そのために、広義の非営利組織に関する受講者の関心テーマについて、各自が先行研究を探し、レビューを行い、その成果と課題について理解する。また、修士論文執筆に必要な基礎知識を実践的に習得する。さらに、理論と実践との融合を図るため、非営利組織への視察やインタビュー等も実施する。		
授業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書・主要論文に関する報告および討論 ・各自の関心テーマの先行研究に関する報告および討論 ・研究テーマの発掘、情報収集、文献検索、倫理 ・プロジェクト(視察やインタビューを通じ、現状と課題の把握および解決策の提案) 		
教科書	Anheier, Helmut K. (2005) Nonprofit Organizations: Theory, Management, Policy, Routledge, またはNonprofit and Voluntary Sector Research Quarterly, Nonprofit Management and Leadership, Voluntas等の論文、その他日本語の教科書・ジャーナルも含め、受講生と協議の上選定する。		
授業の工夫点	地域イノベーション研究センター主催のプロジェクト型教育研究の一環で実施している「NPO人材マネジメント・プロジェクト」との連携。		
授業の評価方法	出席(20%)、報告(30%)、討論への貢献度(20%)、レポート(30%)を基準に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	非営利組織論演習Ⅱa		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学研究科	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計1名(男子学生1名 女子学生1名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	広義の非営利組織および関連分野に関する修士論文を作成するために、助言と指導を行うとともに、受講生による報告と討論を実施してすることを目的とする。		
授業内容	<p>(1) 各自の修士論文の進捗状況に沿った報告およびそれに対する全体での討論および助言。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論文テーマの絞り込み ・論文執筆計画 ・先行研究の収集、レビューおよび課題の抽出 ・研究目的の明確化および研究方法の選択 ・論文の構成、執筆、改訂 ・研究成果の発信(学会報告)等 <p>(2) 個別指導と全体での報告会を受講生の進度に沿って適宜実施する。</p> <p>(3) 開講日時は、受講者の進度等にあわせて、相談の上決定する。</p>		
教科書	なし		
授業の工夫点	受講生が実際に活動しているNPOIについての事例発表も積極的に取り入れ、理論だけではなく、生の現場の様子も伝えるようにした。		
授業の評価方法	出席(20%)、報告(30%)、討論への貢献度(20%)、修士論文(30%)を基準に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	非営利組織論演習Ⅱb		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学研究科	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計1名（男子学生1名 女子学生1名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	広義の非営利組織および関連分野に関する修士論文を作成するために、助言と指導を行うとともに、受講生による報告と討論を実施してすることを目的とする。		
授業内容	<p>(1) 各自の修士論文の進捗状況に沿った報告およびそれに対する全体での討論および助言。</p> <ul style="list-style-type: none"> 論文テーマの絞込み 論文執筆計画 先行研究の収集、レビューおよび課題の抽出 研究目的の明確化および研究手法の選択 論文の構成、執筆、改訂 研究成果の発信（学会報告）等 <p>(2) 個別指導と全体での報告会を受講生の進度に沿って適宜実施する。</p> <p>(3) 開講日時は、受講者の進度等にあわせて、相談の上決定する。</p>		
教科書	なし		
授業の工夫点	受講生が実際に活動しているNPOについての事例発表も積極的に取り入れ、理論だけではなく、生の現場の様子も伝えるようにした。		
授業の評価方法	出席(20%)、報告(30%)、討論への貢献度(20%)、修士論文(30%)を基準に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域政策特別演習Aa		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学研究科	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計12名（男子学生6名 女子学生6名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	本特別演習の目的は、地域政策の諸問題について、ベンチャー企業論、経営政策、マーケティング、地域計画、研究開発管理、環境経済学、地域企業論、非営利組織論、企業倫理などの多様な視点を融合しながら、現実の事象を分析・考察する能力を涵養することである。そのために、受講生による研究報告会を定期的に開催し、報告と全体での討論を行う。		
授業内容	研究報告会：受講生による研究報告および報告に対する全体での討論		
教科書	なし		
授業の工夫点	地域イノベーション研究センター主催のプロジェクト型教育研究の一環で実施している「NPO人材マネジメント・プロジェクト」との連携		
授業の評価方法	出席・レポート(50%)、研究報告(30%)、討論への参加(20%)を基準に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	地域政策特別演習Ab		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学研究科	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計7名（男子学生5名 女子学生2名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	本特別演習の目的は、地域政策の諸問題について、ベンチャー企業論、経営政策、マーケティング、地域計画、研究開発管理、環境経済学、地域企業論、非営利組織論、企業倫理などの多様な視点を融合しながら、現実の事象を分析・考察する能力を涵養することである。そのために、受講生による研究報告会を定期的に開催し、報告と全体での討論を行う。		
授業内容	研究報告会：受講生による研究報告および報告に対する全体での討論		
教科書	なし		
授業の工夫点	地域イノベーション研究センター主催のプロジェクト型教育研究の一環で実施している「NPO人材マネジメント・プロジェクト」との連携		
授業の評価方法	出席・レポート(50%)、研究報告(30%)、討論への参加(20%)を基準に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	地域政策特別演習Ba		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学研究科	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計4名(男子学生2名 女子学生2名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	本特別演習の目的は、地域政策の諸問題について、ベンチャー企業論、経営政策、マーケティング、地域計画、研究開発管理、環境経済学、地域企業論、非営利組織論、企業倫理などの多様な視点を融合しながら、現実の事象を分析・考察する能力を涵養することである。そのために、受講生による研究報告会を定期的に開催し、報告と全体での討論を行う。		
授業内容	研究報告会: 受講生による研究報告および報告に対する全体での討論		
教科書	なし		
授業の工夫点	地域イノベーション研究センター主催のプロジェクト型教育研究の一環で実施している「NPO人材マネジメント・プロジェクト」との連携		
授業の評価方法	出席・レポート(50%)、研究報告(30%)、討論への参加(20%)を基準に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	地域政策特別演習Bb		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学研究科	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計4名(男子学生4名 女子学生0名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	本特別演習の目的は、地域政策の諸問題について、ベンチャー企業論、経営政策、マーケティング、地域計画、研究開発管理、環境経済学、地域企業論、非営利組織論、企業倫理などの多様な視点を融合しながら、現実の事象を分析・考察する能力を涵養することである。そのために、受講生による研究報告会を定期的に開催し、報告と全体での討論を行う。		
授業内容	研究報告会: 受講生による研究報告および報告に対する全体での討論		
教科書	なし		
授業の工夫点	地域イノベーション研究センター主催のプロジェクト型教育研究の一環で実施している「NPO人材マネジメント・プロジェクト」との連携		
授業の評価方法	出席・レポート(50%)、研究報告(30%)、討論への参加(20%)を基準に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	Japanese Business and Economy A		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期(オムニバス形式)
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部3・4年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計31名(男子学生20名 女子学生11名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	This class aims at providing basic knowledge and idea on Japanese business and economy. This class will be conducted in English.		
授業内容	主に留学生を対象とした英語によるオムニバス形式の講義。Social Capital in Japan のテーマで、ソーシャル・キャピタルの概念や意義の説明、日本におけるソーシャル・キャピタルの歴史的推移や現状、NPOやボランティアとの関係、ソーシャル・キャピタルを創出するためのNPOの役割などについて講義		
教科書	なし(英文資料配布)		
授業の工夫点	受講生の出身国におけるソーシャル・キャピタルやボランティアの状況について議論し、日本のソーシャル・キャピタルの状況と比較分析をおこなった。		
授業の評価方法	(1) Class participation (2) Final exam		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	Japanese Business and Economy B		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期（オムニバス形式）
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部3・4年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計3名（男子学生3名 女子学生0名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	This class aims at providing advanced knowledge and idea on Japanese business and economy. This class will be conducted in English.		
授業内容	主に留学生を対象とした英語によるオムニバス形式の講義。The Nonprofit Sector in Japan のテーマで、日本におけるNPOの歴史や存在意義、規模や活動、マネジメントにおける課題や展望等について講義		
教科書	なし（英文資料配布）		
授業の工夫点	受講生の出身国におけるNPOやボランティアの状況について議論し、日本のNPOの状況と比較分析をおこなった。		
授業の評価方法	(1) Class participation (2) Final exam		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	経済書講読A		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部2年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計30名（男子学生26名 女子学生4名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	経営に関する基本的な概念やスキル、事例について理解するとともに、英語の文献を読解し、要点をまとめ、発表する力を身につけることを目的とする。組織行動に関する英文教科書にそって、グループによる発表と議論、解説を行なう。		
授業内容	自己開発、倫理、価値、多様性、動機づけ、意思決定、チーム、コミュニケーション、リーダーシップ、問題解決、組織変革、組織学習、ソーシャル・キャピタル、NPO		
教科書	組織論およびNPOに関する英文テキスト・英語論文		
授業の工夫点	NPO関連のセミナーやイベントへの参加を呼びかけ、実際のNPO活動に触れて組織論との関連を探るように促した。		
授業の評価方法	出席・メモ(20%)、発表(40%)、議論への参加(20%)、レポート(20%)を基準に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続（ただし、隔年開講科目）		

授業科目名	経済書講読B		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部2年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計27名（男子学生23名 女子学生4名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	経営に関する基本的な概念やスキル、事例について理解するとともに、英語の文献を読解し、要点をまとめ、発表する力を身につけることを目的とする。組織行動に関する英文教科書にそって、グループによる発表と議論、解説を行なう。		
授業内容	自己開発、倫理、価値、多様性、動機づけ、意思決定、チーム、コミュニケーション、リーダーシップ、問題解決、組織変革、組織学習、ソーシャル・キャピタル、NPO		
教科書	組織論およびNPOに関する英文テキスト・英語論文		
授業の工夫点	NPO関連のセミナーやイベントへの参加を呼びかけ、実際のNPO活動に触れて組織論との関連を探るように促した。		
授業の評価方法	出席・メモ(20%)、発表(40%)、議論への参加(20%)、レポート(20%)を基準に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	社会的企業の株式会社デュナミスによるゲスト講義およびオータムセミナーに関する情報提供等の連携協力		
今後の授業の継続	今後も継続（ただし、隔年開講科目）		

授業科目名	非営利組織論特殊講義a		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部3・4年	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計6名（男子学生3名 女子学生3名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	まちづくりや環境、福祉医療、教育等、様々な分野で活動を展開し、新たな社会の担い手として台頭してきた非営利組織（NPO）について、その存在意義や経済的規模、国際的な位置づけ、各分野の活動の現状と課題、関連制度、行政や企業との協働等、多様な視点から理解を深めることを目的としている。		
授業内容	教科書に基づき、毎回のテーマに沿って、導入的な講義、受講生による報告および全体での討論を行なう。取り上げる主なテーマは次の通り。 (1) 非営利組織とは：定義、歴史、規模、国際比較 (2) 非営利組織の存在理由と社会的役割：経済学的、経営学的、政治学的アプローチ (3) 非営利組織の多様な活動：福祉医療、環境、教育、まちづくり、国際協力等 (4) 非営利組織に関する制度：特定非営利活動促進法、公益法人改革、寄付税制 (5) 行政や企業等との関係：競争と協働、社会的企業		
教科書	雨森孝悦(2007)『テキストブックNPO－非営利組織の制度・活動・マネジメント』東洋経済新報社、その他何冊かの候補から、受講生と協議の上選定する。		
授業の工夫点	受講生が実際に活動しているNPOについての事例発表も積極的に取り入れ、理論だけではなく、生の現場の様子も伝えるようにした。		
授業の評価方法	出席(20%)、報告(30%)、討論への貢献度(20%)、レポート(30%)を基準に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	国際ボランティアネットワーク(イブの会)の代表によるゲスト講義および情報・書籍提供や意見交換を行った。		
今後の授業の継続	今後も継続(ただし、隔年開講科目)		

授業科目名	非営利組織論特殊講義b		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部3・4年	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計1名（女子学生1名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	非営利組織がミッションを実現するための、マネジメントの理論と実践について学ぶことを目的としている。非営利組織の使命、リーダーシップ、人的資源管理、ガバナンス、評価等の基礎理論、研究動向や事例について理解を深める。		
授業内容	教科書に基づき、毎回のテーマに沿って、導入的な講義、受講生による報告および全体での討論を行なう。取り上げる主なテーマは次の通り。 (1) 非営利組織の使命 (2) 非営利組織のリーダーシップ (3) 非営利組織の人的資源管理 (4) 非営利組織のガバナンス (5) 非営利組織のマーケティング (6) 非営利組織の資金源開拓 (7) 非営利組織の評価、アカウンタビリティと信頼		
教科書	オスター、シャロン・M著・河口弘雄監訳(2005)『NPOの戦略マネジメント－理論とケース－』ミネルヴァ書房、その他何冊かの候補から、受講生と協議の上選定する。		
授業の工夫点	受講生が実際に活動しているNPOについての事例発表も積極的に取り入れ、理論だけではなく、生の現場の様子も伝えるようにした。		
授業の評価方法	出席(20%)、報告(30%)、討論への貢献度(20%)、レポート(30%)を基準に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続(ただし、隔年開講科目)		

授業科目名	非営利組織論演習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	非営利組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部3・4年	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計7名(男子学生6名 女子学生1名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし(NPOでのフィールドワークは15時間程度)
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	専門的なテーマについて少人数で、教員・学生間の双方向のコミュニケーションを通し、学生の積極的な知的探求の力を向上させることを目的とします。		
授業内容	NPOの意義と全体像、NPOの理論と実践についての基礎知識を身につけるとともに、参加者の関心テーマに沿って、実際にNPOでのフィールドワークを行う。		
教科書	山内直人『NPO入門(第2版)』日本経済新聞社、坂本文武『NPOの経営』日本経済新聞社、佐藤郁哉『フィールドワーク一書を持って街へ出よう(増補版)』新曜社その他英語文献などより、受講者と相談の上選定します。		
授業の工夫点	仙台市内のNPOへのフィールドワークを実施。地域イノベーション研究センター主催のプロデューサー塾の企画立案をゼミ学生主体で行い、まちづくり政策フォーラムの方を講師に実施。		
授業の評価方法	報告、議論、フィールドワークに関する検討および報告		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	せんだい・みやぎNPOセンターや仙台市市民活動サポート・センター等を通して、NPO関連の情報提供、セミナー参加、ヒアリング調査、会議室貸出の連携協力。仙台市内のNPOにおけるヒアリング調査協力。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	外国書講読(英)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	財政	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部3・4年	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計4名(男子学生3名 女子学生1名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	現在、それまで公共部門の役目であった福祉などの仕事が、近年の財政危機の影響を受けて、民間部門に委託される例が日本を含めた先進各国で進行している。その有力な受け皿と考えられているのがNPO(=非営利組織)であるが、この授業では、NPOの存在理由と公共部門との関係について主に理論的な側面からいくつかの代表的な英語文献をとり上げる。		
授業内容	文献から、重要な論文または章をピックアップしてできるだけ多く読んでいく。厳密な訳文を考えるのではなく、筆者の言わんとすることを早的確に把握することが要求される。		
教科書	B. Weisbrod "Toward a Theory of the Voluntary Non-Profit Sector in a Three Sector Economy" in Altruism, Morality, and Economic Theory, New York: Russell Sage, 1975.		
授業の工夫点	単なる英文和訳でなく、内容を把握し、かつ自分の意見を述べてもらう心がけた。		
授業の評価方法	平常の成績、小テスト(2~3回を予定)、レポートを総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

○ 秋田大学

授業科目名	ボランティア教育実習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	教育方法学・教師学・教育工学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	教育文化学部発達科学選修	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計0名(男子学生0名 女子学生0名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	放課後の学習相談をはじめとした、児童・生徒に対する学習上の支援活動に参加するなかで、将来の教員としての資質・力量を養う。とりわけ、実践的指導力の向上を目指す。		
授業内容	昨今の教育現場では、理論的知識とともに、学習者と実際に関わり教育病理に対処したり、様々な場面で教育活動を展開するなど、教育現場で生かすことのできる実践的指導力の育成が重視されています。そこで本授業では、実践的に児童・生徒の理解を深め、また教育活動の支援方法を検討するために、子ども達の基礎学力や学習意欲の向上と、教職志望学生の資質・力量の向上という二つの目標のもと、秋田県教育委員会と秋田大学で実施している大学・学校パートナーシップ事業に参加します。 (1) 事前指導:参加するにあたっての諸注意等 (学校ボランティアメンバーリストでお知らせします。) (2)~(14) 学校ボランティア活動		
教科書	随時紹介		
授業の工夫点	フィールドインターンシップ型		
授業の評価方法	出欠(40%)、レポート(30%)、試験または個別プロジェクト(30%)として採点します。 2/3以上の出席がない場合は評価の対象としません。		
授業のサポート体制	教員オフィスアワーで相談等可		
学外の関係機関・団体との連携	秋田県教育委員会と秋田大学で実施している大学・学校パートナーシップ事業に参加する。		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	ボランティア論・実習		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	教育文化学部地域科学課程	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計64名(男子学生16名 女子学生48名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	必修		
授業目的	(1)ボランティア活動について理論的・体系的にとらえる。 (2)現代のボランティア活動の具体的・実際の諸相を把握する。 (3)自ら興味・関心のあるボランティア活動を実践することができる。		
授業内容	<p>* 授業の進め方</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業は、講義と実習の2部構成とする。 2. 講義は、「オリエンテーション」と「まとめ」を含めて10回とする。 3. 実習は、(1)受講生が自らの関心を基に、自ら探してきたところでボランティア実習をすることを原則とする。(2)活動の交渉等は自ら選択した受け入れ先と受講生が個別に行い、実習期間・時間帯・実習内容を決定する。(3)実習総時間は15～20時間とする。 <p>* 授業の進行予定</p> <p>講義1 オリエンテーション 講義2 ボランティア活動の分野 講義3 ボランティア活動の理念 講義4 ボランティア活動と福祉問題の実相 講義5 ボランティア活動の現状と課題 講義6 ボランティア実習の内容の検討 講義7 ボランティア実習の計画の作成 実習 講義8 秋田県ボランティア活動の実相(1) 講義9 秋田県ボランティア活動の実相(2) 講義10 まとめ</p>		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポートと実習記録、授業態度によって総合的に行う。		
授業のサポート体制	教員オフィスアワーで相談等可		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	自然災害ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	火山地質学・岩石学・火山教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	教育文化学部人間環境課程	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計18名(男子学生9名 女子学生9名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	自然災害ボランティアを通じて自然災害のメカニズムに関する理解と災害対応を理解する。		
授業内容	<p>授業の進行は二つのパターンに分けられる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1)自然災害が発生しボランティアとして参加した学生:ボランティア体験について報告を行いそれについて討議する。また、自然災害発生の背景について科学的な理解を得るための講義及び演習を行なう。 2)ボランティア経験のない学生:神戸巡検(11月3日-5日を予定)を行なう。地震災害ではどのようなことが起こるのか、実感を持って理解するため、人と防災未来博物館および震災遺構の見学を行なう。震災体験者にインタビューを行ない、その結果を報告書としてまとめる。また、時間的に余裕のある場合は、福知山線の脱線事故現場、津波防災施設、大阪の湾岸地域、異人館(切滅危惧種の標本観察)の見学も行なう。 		
教科書	なし		
授業の工夫点	フィールドインターンシップ型		
授業の評価方法	レポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名		ボランティア参加(環境物質工学科)	
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	資源学、工学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	工学資源学部(環境物質工学科2・3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計4名(男子学生1名 女子学生3名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>1. 目的・概要 自主的に参加する地域社会の福祉活動、自然保護(環境保全)活動などのボランティア活動について、本学部教育の趣旨に合致して大学教育のレベルに相当する内容が含まれているものを対象とする。民族や宗教、言語、文化の違いを越えて地球的視野に立った福祉活動や環境保全活動を基本とする。</p> <p>2. 達成目標 自ら達成目標を設定して自己評価する。</p>		
授業内容	<p>授業の進行予定と授業の進め方</p> <p>1)ボランティアに参加して、単位取得を希望する者は事前に学科長に申し出ること。(ただし災害援助など急を要する場合はその限りではない)</p> <p>2)参加するボランティア活動の名称・内容・場所・スケジュールなどについて詳しい情報を担当教員に申し出て、指示をうけてから実施すること。また「参加(実施)証明書」を受領すること。</p> <p>3)ボランティア活動においても、常に計画的に目標を設定して実施する。 なお学生自身が、傷害保険などに加入することを要件とする。また生命の危険にさらされるような状況で行うものは本科目の対象外とする。</p>		
教科書	書籍としては、「マスターズ市民白書」、マスターズボランティア白書編集委員会編(社会福祉法人大阪ボランティア協会)など		
授業の工夫点			
授業の評価方法	提出レポートの内容で評価する。単位取得の条件のためには原則として30時間の実働時間の実績を伴うこととする。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		ボランティア参加(機械工学科)	
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	資源学、工学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	工学資源学部(機械工学科2・3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計4名(男子学生1名 女子学生3名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>1. 目的・概要 ボランティア活動による社会参加を通じて、学生が早期に技術者に求められている社会的な責任と要請を自覚し、職業としての位置づけを理解する。</p> <p>2. 達成目標 学生も社会の一員であり、その社会的な責務を自覚する。</p>		
授業内容	<p>授業の進行予定と授業の進め方</p> <p>1.学生が自主的に参加する地域社会における福祉活動・自然保護活動等のボランティア活動について、機械工学科の教育の趣旨に合致し、大学教育のレベルに相当する内容が含まれているときに認定する。</p> <p>2.ボランティアに参加し単位取得を希望する者は、原則として事前に学科長に申し出ることが望ましい。ただし、災害救助等 急を要する場合はその限りではない。</p> <p>3.単位を取得するためには実働時間が40時間以上なければならない。</p>		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	参加後、発表会(報告会)を行い、活動内容と合わせて総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア参加(材料工学科)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	資源学、工学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	工学資源学部(材料工学科2・3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計4名(男子学生1名 女子学生3名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>1. 目的・概要 社会での技術者の役割や職業の位置づけを理解し、また社会参加を奨励し実践することを目的としている。</p> <p>2. 達成目標 (1)自主的に参加するボランティア活動等による社会参加を実践する。 (2)社会での技術者の役割や職業との位置づけを理解し、説明できること。</p>		
授業内容	<p>(1)ボランティア活動について 自主的に参加する地域社会における福祉活動、自然保護活動などで、本学部教育の趣旨に合致し、大学教育のレベルに相当する内容が含まれているものを対象とする。</p> <p>(2)単位の取得について ・参加するボランティア活動の名称、内容、場所、日時等について事前に申し出て、指示を受けること。 ・授業時間数に相当する実働時間(通常30時間から40時間以上)ボランティア活動に従事していること。 以上の要件が、単位取得のためには必要である。</p>		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	参加後、報告書の提出と報告発表会等を行い、その結果により総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア参加(情報工学科)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	資源学、工学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	工学資源学部(情報工学科2・3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計4名(男子学生1名 女子学生3名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>1. 目的・概要 自主的に参加するボランティア活動等による社会参加を通して、社会での技術者の役割・職業の位置づけなどを体験的に理解する。</p> <p>2. 達成目標 1)ボランティア活動への参加を通じて、社会における技術者の役割・職業に位置づけを理解すること。</p>		
授業内容	<p>自主的に参加する地球社会における福祉活動、自然保護活動などのボランティア活動について、本学部教育の趣旨に合致し、大学教育レベルに相当する内容が含まれているものを対象とする。 単位を修得しようとする場合は、参加するボランティア活動の名称、内容、場所、日時等について、事前に申し出て指示を受けることが必要である。また、授業時間数に相当する実働時間(通常、30時間から40時間以上)ボランティア活動に従事していることが、単位取得の条件である。</p>		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	参加後、報告書の提出と報告発表会等を行い、その結果により評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名			
ボランティア参加(地球資源学科)			
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	資源学、工学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	工学資源学部(地球資源学科2・3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計4名(男子学生1名 女子学生3名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>1. 目的・概要 学生が社会での技術者の役割や職業の位置づけを理解する助けとして、また社会参加を奨励する目的で設けられている。</p> <p>2. 達成目標 学生が自主的に参加するボランティア活動等による社会参加を通して、社会での技術者の役割や職業との位置づけを体験的に理解し、説明できること。</p>		
授業内容	<p>自主的に参加する地域社会における福祉活動、自然保護活動などのボランティア活動について、本学部教育の趣旨に合致し、大学教育のレベルに相当する内容が含まれているものを対象とする。</p> <p>単位を取得しようとする場合 参加するボランティア活動の名称、内容、場所、日時等について事前に申し出て、指示を受けること(ただし災害援助など急を要する場合はその限りではない)。 授業時間数に相当する実働時間(通常30時間から40時間以上)ボランティア活動に従事していること。 以上の要件が、単位取得のためには必要である。</p>		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	参加後、報告書の提出と報告発表会等を行い、その結果により総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名			
ボランティア参加(電気電子工学科)			
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	資源学、工学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	工学資源学部(電気電子工学科2・3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計4名(男子学生1名 女子学生3名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>1. 目的・概要 学生が自主的に参加するボランティア活動等を通して、技術者の社会的役割や職業との位置づけを体験的に理解する。</p> <p>2. 達成目標 ・計画に従ってボランティア活動が実施されること。 ・活動がその目的にてらして有用であったことが示せること。 ・新たに得た体験や知見を説明できること。</p>		
授業内容	<p>自主的に参加する地域社会における福祉活動、事前保護活動などのボランティア活動について、本学部教育の趣旨に合致し、大学レベルに相当する内容が含まれているものを対象とする。</p> <p>単位を取得しようとする場合は、参加するボランティア活動の名称・内容・場所・日時等について事前に申し出、指示を受けること。</p>		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	計画書及び報告書に基づき評点する。必要に応じて口頭発表を求めることがある。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア参加(土木環境工学科)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	資源学、工学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	工学資源学部(土木環境工学科2・3年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計4名(男子学生1名 女子学生3名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	1. 目的・概要 自主的に参加するボランティア活動等を通じて、技術者の社会的役割や職業としての位置づけを体験的に理解する。 2. 達成目標 技術者の社会的役割や職業としての位置づけについて、説明できるようにする。		
授業内容	自主的に参加する地域社会における福祉活動、自然保護活動などのボランティア活動について、本学科の趣旨合致し、大学教育レベルに相当する内容が含まれているものを対象とする。単位取得を目的とする場合には、参加するボランティア活動の名称、内容、場所、日時などについて、学科長に事前に申し出、指示を受けること。ただし、災害援助など、急を要する場合には、その限りではない。		
教科書	特になし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	報告書、参加時間数および参加証明などの書類内容等を見て、総合的に判断する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 山形大学

授業科目名	教育臨床体験(教育ボランティア)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	教科教育学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	地域教育文化学部地域教育学科1年次以上	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計11名(男子学生7名 女子学生4名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	60時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	各種教育ボランティアを通して子どもや学校などの理解を図る。学校での授業や特別支援教育における学習支援、行事支援、不登校児童生徒とのふれ合い体験、理科実験教室や工作教室での指導補助などを通して、実践的指導力の基礎を育成する。		
授業内容	教育現場の実際に参加し、指導に当たる先生や子どもと共に活動を行う。各活動に応じて、オリエンテーション時に詳細な日程を示す。		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出欠(40%)、レポート(30%)、試験または個別プロジェクト(30%)として採点します。 2/3以上の出席がない場合は評価の対象としません。		
授業のサポート体制	オフィサー等において随時相談可能		
学外の関係機関・団体との連携	教育現場の実際に参加し、指導に当たる先生や子どもと共に活動を行う。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	教育臨床体験(ふれあい)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	認知、学習	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	地域教育文化学部地域教育学科1年次以上	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	未定	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	60時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	各種教育ボランティアを通して子どもや学校などの理解を図る。教育臨床体験(教育ボランティア)の受講を踏まえて、さらに深い子どもとのふれ合い活動を行い、実践的指導力の基礎を強固なものとする。		
授業内容	「相談教室」(山形市総合学習センター)、「おもしろ実験教室」(山形市理科教育センターとの連携事業)、「スクールサポーター」(山形市教育委員会との連携事業)などが活動の対象になる。各活動ごとに、オリエンテーションを行い、詳細な日程を示す。		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	参加状況、体験内容を記した日誌及び最終レポートを総合して行う。活動への参加 60点 活動の理解 20点 活動の評価 20点 計 100点		
授業のサポート体制	活動に関する連絡及び相談等については、受講生のアドバイザー教員が担当する。		
学外の関係機関・団体との連携	教育現場で行われる子どもとの活動に参加し、指導にあたる先生や子どもと共に活動を行う。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 宇都宮大学

授業科目名	地域居住論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	住居学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	教育学部（2・3・4年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計16名（男子学生7名 女子学生9名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	地域居住を幅広い観点からとらえ、まちづくり、市民参加の手法、都市計画関連法規、街並み景観、NPO・ボランティアなどに関する知識を得ることを目指します。		
授業内容	第1週 オリエンテーション 第2～8週 都市計画、都市づくりの思想、都市の総合計画、街並み景観 など 第9～14週 市民参加のまちづくり、NPOとまちづくり、協働の可能性と課題、まちづくり学習、まちづくりワークショップの企画と進め方など 第15週 期末試験（または個別プロジェクトの発表と提出）		
教科書	推薦参考図書：川上光彦著『都市計画』（森北出版、2008年1月発行） 陣内雄次・他著『コミュニティ・カフェと市民育ち』（朝文社、2007年）		
授業の工夫点	この授業は講義を中心に進めます。時間調整が可能な場合は、まちづくりワークショップの技法についてグループワークで進めます。		
授業の評価方法	出欠（40%）、レポート（30%）、試験または個別プロジェクト（30%）として採点します。 2/3以上の出席がない場合は評価の対象としません。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	実践・宇都宮のまちづくり		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地方行政	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	共通教育（全学部1-4年次対象）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計91名（男子学生49名 女子学生42名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	今、私たちは、人口減少社会や超高齢化社会の到来、地方分権の更なる進展など、時代の大きな変革期に直面しています。これら変革期の課題を克服するために、地方行政として宇都宮市がどのような政策を立案し、施策事業に取り組んでいるのかなど、まちづくりの現状・課題を知ってもらい、今、私たちができること、しなければいけないことについて、大学生のみなさんと一緒に考えたいと思います。同時に、みなさんが将来のまちづくりの担い手となったとき、課題解決のためのヒントを学んでいただきたいと思います。		
授業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回 市長からのメッセージ、まちづくりの総論（地方行政総論）、本講義の進め方等 ・第2回 総合計画の役割、財政状況等 ・第3回 自治基本条例 ・第4回 中心市街地の現状と課題 ・第5回 公共交通の重要性・利用促進、LRTの導入に向けて ・第6回 地域コミュニティの現状と課題、自治会の役割 ・第7回 安全・安心なまちづくり、市の犯罪発生状況等 ・第8回 高齢化社会の現状と課題、今後の展望 ・第9回 市環境政策の取組み、地球温暖化の現状と課題、今後の展望 ・第10回 市のごみの現状と課題 ・第11回 市の観光資源・観光振興の取組み・シティセールス ・第12回 都市計画の役割・概要、景観プランの概要 ・第13回 教育改革について ・第14回 芸術・文化振興の取組み等 ・第15回 期末試験 		
教科書			
授業の工夫点	各テーマ、第一線で活躍する各担当課職員が講義します。		
授業の評価方法	講義中に与えられる課題レポート、期末試験（レポート）を総合的に勘案して評価する。2/3（期末試験を含めて10回）以上出席しないと評価の対象としない。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	宇都宮市役所員による講義		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 群馬大学

授業科目名	地域貢献ボランティア入門A		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	教育社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学共通科目(1-4年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計8名(男子学生8名 女子学生0名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地域貢献活動の理論的・実践的な学習の機会を提供する。地域の現状を把握し、地域のニーズに学生ボランティアとして対応するために求められる知識・技能・心構えを習得する。		
授業内容	第1回事前オリエンテーション 第2回地域貢献の実践に学ぶ(講義) 第3回地域貢献の実例に学ぶ(講義) 第4回地域貢献のための企画力を構築する 第5回地域貢献のための企画力を表現する 第6回地域貢献のための企画を実践する 第7回地域貢献のためのネットワーク力を構築する 第8回地域貢献のためのコミュニケーション力を構築する 第9回地域貢献のためのプレゼンテーション力を構築する 第10回地域課題の探求ワーク 第11回地域課題の解決ワーク 第12回地域課題の展開ワーク 第13回チーム別テーマワークの実習 第14回チーム別テーマワークの発表 第15回ふりかえりと報告会		
教科書	「ボランティア論」(藺田碩哉編著)		
授業の工夫点	毎年9月に実施される「地域貢献活動学生協力者養成講座」の企画・準備と当日参加を前提とする。		
授業の評価方法	講義・演習への参加度(30%)、連携能力(30%)、レポート(40%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域貢献ボランティア入門B		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	教育社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学共通科目(1-4年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	未定	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地域貢献活動の理論的・実践的な学習の機会を提供する。地域の現状を把握し、地域のニーズに学生ボランティアとして対応するために求められる知識・技能・心構えを習得する。		
授業内容	第1回事前オリエンテーション 第2回地域貢献の実践に学ぶ(講義) 第3回地域貢献の実例に学ぶ(講義) 第4回地域貢献のための企画力を構築する 第5回地域貢献のための企画力を表現する 第6回地域貢献のための企画を実践する 第7回地域貢献のためのネットワーク力を構築する 第8回地域貢献のためのコミュニケーション力を構築する 第9回地域貢献のためのプレゼンテーション力を構築する 第10回地域課題の探求ワーク 第11回地域課題の解決ワーク 第12回地域課題の展開ワーク 第13回チーム別テーマワークの実習 第14回チーム別テーマワークの発表 第15回ふりかえりと報告会		
教科書	「ボランティア論」(藺田碩哉編著)		
授業の工夫点	毎年9月に実施される「地域貢献活動学生協力者養成講座」のまとめ・展開への参加を前提とする。		
授業の評価方法	講義・演習への参加度(30%)、連携能力(30%)、レポート(40%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域貢献ボランティア上級A		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	多文化教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	3年次以上	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計3名(男子学生1名 女子学生2名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地域貢献活動の理論的・実践的な学習の機会を提供する。地域の現状を把握し、地域のニーズに学生ボランティアとして対応するために求められる知識・技能・心構えを修得する。		
授業内容	群馬大学「地域貢献活動学生協力者養成講座」の企画・準備を通じて、地域貢献に求められるコーディネート力とコミュニケーション力に特に焦点をあてて指導する。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への取り組み姿勢、レポートの内容等により総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域貢献ボランティア中級A		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	多文化教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	2年次以上	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計2名(男子学生0名 女子学生2名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地域貢献活動の理論的・実践的な学習の機会を提供する。地域の現状を把握し、地域のニーズに学生ボランティアとして対応するために求められる知識・技能・心構えを修得する。		
授業内容	群馬大学「地域貢献活動学生協力者養成講座」の企画・準備を通じて、地域貢献に求められるコーディネート力とコミュニケーション力に特に焦点をあてて指導する。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への取り組み姿勢、レポートの内容等により総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域貢献ボランティア上級B		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	多文化教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	3年次以上	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計1名(男子学生1名 女子学生0名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地域貢献活動の理論的・実践的な学習の機会を提供する。地域の現状を把握し、地域のニーズに学生ボランティアとして対応するために求められる知識・技能・心構えを修得する。		
授業内容	群馬大学「地域貢献活動学生協力者養成講座」の企画・準備を通じて、地域貢献に求められるコーディネート力とコミュニケーション力に特に焦点をあてて指導する。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への取り組み姿勢、レポートの内容等により総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域貢献ボランティア中級B		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	多文化教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	2年次以上	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計0名(男子学生0名 女子学生0名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地域貢献活動の理論的・実践的な学習の機会を提供する。地域の現状を把握し、地域のニーズに学生ボランティアとして対応するために求められる知識・技能・心構えを修得する。		
授業内容	群馬大学「地域貢献活動学生協力者養成講座」の企画・準備を通じて、地域貢献に求められるコーディネート力とコミュニケーション力に特に焦点をあてて指導する。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への取り組み姿勢、レポートの内容等により総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア体験またはサークル活動		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	教育学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計24名(男子学生5名 女子学生19名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	大学外におけるさまざまな体験、実践を通して、将来、教師となるための資質を養成する。子どもとの接し方、子どものための野外活動の企画、立案、運営などについて実践を通して学ぶ。		
授業内容	大学外において、自然体験、ボランティア体験、サークル活動、フレンドシップ教育実践など、学部で用意したいくつもの選択肢からひとつを選択履修する。それぞれの選択肢の概要は、選択肢ごとのガイダンスにおいて説明される。年度当初に授業のガイダンスを行い、そこで提供されたいくつもの選択肢から一つを選択し、30時間以上の体験を行う。体験終了後、レポートを提出する。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への取り組み姿勢、レポートの内容等により総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	博物館学B		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地質学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	3年次以上	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計4名(男子学生2名 女子学生2名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	3時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	博物館概論的内容(分類や機能、組織、資料、展示、教育普及など)について学ぶ。		
授業内容	第1回 イントロダクション・博物館とは 第2回 博物館の種類と機能 第3回 博物館組織と職員 第4回 博物館資料1 第5回 博物館資料2 第6回 博物館展示1 第7回 博物館展示2 第8回 調査研究 第9回 群馬県立自然史博物館見学と現地での講義 第10回 教育普及活動1 第11回 教育普及活動2 第12回 博物館と情報 第13回 これからの博物館 第14回 試験		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への取り組み姿勢、レポートの内容、試験により総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際・地域ボランティア研修		
担当教員（学内又は学外）		授業期間	集中授業
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	医学部保健学科全学年	授業のレベル	その他（レベルは限定しない）
平成20年度履修者数	計0名	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	約2週間
必修・選択の別	選択		
授業目的	世界各国及び日本において、ボランティア活動を体験する。		
授業内容	世界各国及び日本において、地域病院施設など保健医療・福祉でボランティア活動に参加し、学習したものに単位を認定する。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	およそ2週間の体験をレポートにまとめ、参加証明をつけ学生が申請し、教務委員会で認定する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 千葉大学

授業科目名	ボランティア実習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部全学年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計18名（男子学生6名 女子学生12名）	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	60時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア体験を通して、学生の社会的関心と学習意欲を高めると同時に、社会的リソースとしての学生自身の役割の重要性を認識し、課題発見能力、解決能力など主体的に学ぶ力の育成を目的としています。また、社会と接することによって、自分から積極的に発言するコミュニケーション能力を身につけることを目標とします。		
授業内容	<p>協力して下さる千葉県内のNPO団体において10日間程度のボランティア実習を行います。</p> <p>協力団体の活動は様々ですので、自分が参加したいと思う団体を決め、内容や実習期間の調整をした上で、実際に参加するかどうかの決定をします。（団体の情報は、最初のスクーリングで開示します。）</p> <p>事前指導のスクーリングを2～3回行います。</p> <p>日程は4月はじめに総合校舎内の掲示板で通知します。受講希望者はかならず出席してください。</p> <p>受け入れ団体、実習日程が決定すれば、実習日にかならず実習日誌を作成し、団体の担当者に確認印をもらいます。日誌を参考に、担当者から具体的な指導、指示がある場合もあります。</p> <p>実習日程は、できるだけ夏休みや土日を利用してください。最終的なレポート提出は1月末日としますので、それまでに実習を終了させてください。</p> <p>できるだけ予定された実習が終了次第レポートを提出するようにしてください。具体的な提出先等については4月になってから指示します。</p> <p>すべての受講生が実習を終了した時点で事後指導を行います。</p> <p>受講生は必ず事前指導と事後指導に出席してください。</p> <p>提出されたレポートは冊子にして公開する予定ですので、予め了承のうえ受講してください。</p> <p>事前指導と事後指導の日程は4月に発表します。</p>		
教科書	特に指示しませんが、活動内容に応じて自分で必要な資料等を見つけ出してください。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	活動日誌とレポートによって評価します。活動日誌についてはボランティア団体にも評価していただきますので、当然それには、実習参加への積極性などが評価基準として含まれることとなります。活動日誌とレポートの比率は50%ずつにします。レポートの評価では、文章の論理性等の評価の他に、ボランティア活動で得られた成果が何であるのかを明確化しているかどうか、それが説得力をもちうる説明であるかどうかという点も配慮します。事前指導と事後指導に無断欠席したものは単位を認めないことがあります。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	千葉県内のNPO団体		
今後の授業の継続	未定		

○ 横浜国立大学

授業科目名	学外活動・学外学習Ⅰ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	食生活学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	教育人間科学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計11名（男子学生4名 女子学生7名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	14時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	自らの意志でボランティア活動に参加し、社会貢献の意義に気づくとともに、その結果を学内での教育研究活動に生かすことを目的とする。特に、この「学外活動・学外学習Ⅰ」では、地方公共団体や非営利目的諸団体(NPOやNGO)等、社会全般におけるボランティア活動を対象とするものである。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 各自のテーマならびに活動先の探索活動 3. 各自のテーマならびに活動先の探索活動 4. 中間カンファレンス(各自のテーマ発表) 5. 決定したテーマによる活動の実施 6. 決定したテーマによる活動の実施 7. 決定したテーマによる活動の実施 8. 決定したテーマによる活動の実施 9. 決定したテーマによる活動の実施 10. 中間カンファレンス(情報交換) 11. 決定したテーマによる活動の実施 12. 決定したテーマによる活動の実施 13. 活動の総括 14. 総合発表討論会 		
教科書	指定なし		
授業の工夫点	実際にボランティア活動を体験することによって自ら考え出した課題を解決する力を養成できる授業にしている。		
授業の評価方法	授業への出席とボランティア活動団体による活動評価、レポートおよび活動報告会の結果により評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	学外活動・学外学習Ⅱ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	食生活学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	教育人間科学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計32名（男子学生14名 女子学生18名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	14時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	自らの意志でボランティア活動に参加し、社会貢献の意義に気づくとともに、その結果を学内での教育研究活動に生かすことを目的とする。特に、この「学外活動・学外学習Ⅱ」では、小・中・高等 学校をはじめとした教育関係諸機関におけるボランティア活動を対象とするものである。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 各自のテーマならびに活動先の探索活動 3. 各自のテーマならびに活動先の探索活動 4. 中間カンファレンス(各自のテーマ発表) 5. 決定したテーマによる活動の実施 6. 決定したテーマによる活動の実施 7. 中間カンファレンス(ミニ講演等) 8. 決定したテーマによる活動の実施 9. 決定したテーマによる活動の実施 10. 中間カンファレンス(情報交換) 11. 決定したテーマによる活動の実施 12. 決定したテーマによる活動の実施 13. 活動の総括 14. 総合発表討論会 		
教科書	指定なし		
授業の工夫点	実際にボランティア活動を体験することによって自ら考え出した課題を解決する力を養成できる授業にしている。		
授業の評価方法	授業への出席とボランティア活動団体による活動評価、レポートおよび活動報告会の結果により評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	学外活動・学外学習Ⅲ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	食生活学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	教育人間科学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計72名（男子学生26名 女子学生46名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	6時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	自らの意志でボランティア活動に参加し、社会貢献の意義に気づくとともに、その結果を学内での教育研究活動に生かすことを目的とする。特に、この「学外活動・学外学習Ⅲ」では、こども理解と将来の教職における実践的指導力および自己教育力の基礎を身につけることを目指すものである。具体的な内容としては、小学校におけるボランティア活動としてのフレンドシップ活動である。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 子どもを対象とした講座（出し物）の検討と準備の活動 3. 子どもを対象とした講座（出し物）の検討と準備の活動 4. 子どもを対象とした講座（出し物）の検討と準備の活動 5. 子どもを対象とした講座（出し物）の検討と準備の活動 6. 小学校における出前授業（1回目）の実施 7. 活動の総括 8. 子どもを対象とした講座（出し物）の検討と準備の活動 9. 子どもを対象とした講座（出し物）の検討と準備の活動 10. 子どもを対象とした講座（出し物）の検討と準備の活動 11. 子どもを対象とした講座（出し物）の検討と準備の活動 12. 小学校における出前授業（2回目）の実施 13. 活動の総括 		
教科書	指定なし		
授業の工夫点	実際にボランティア活動を体験することによって自ら考え出した課題を解決する力を養成できる授業にしている。		
授業の評価方法	授業への出席と準備段階での活動状況の評価、ならびに、最終報告書に掲載するレポートにより評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 山梨大学

授業科目名	ボランティア理論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	教育人間科学部、医学部、工学部 1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計73名（男子学生不明 女子学生不明）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>ボランティア活動の理解と実践活動への導入</p> <p>《知識と視野》 ボランティアに関する広範な知識と、幅広い分野に行き届く広い視野</p> <p>《能力と技術》 ボランティアを実際に行うに当たっての的確な能力と技術</p> <p>《人間性と倫理性》 人に接することが最大限に求められるボランティアだからこそ問われる人間性と倫理性</p>		
授業内容	<p>授業は基本的に1コマごとのテーマを扱うが、授業の主題は一貫したものである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 現代社会とボランティア 3. ボランティア活動の多様な側面(1) 4. ボランティア活動の多様な側面(2) 5. ボランティア活動の多様な側面(3) 6. ボランティア活動の多様な側面(4) 7. ボランティア活動の多様な側面(5) 8. ボランティア活動の実際(1) 9. ボランティア活動の実際(2) 10. ボランティア活動の実際(3) 11. ボランティア活動の実際(4) 12. ボランティア活動の実際(5) 13. ボランティア活動の実際(6) 14. ボランティア活動の評価 15. 全体のまとめと実際の活動に向けて 		
教科書	指定しない		
授業の工夫点	多様なボランティア活動について、その実例を参考にしながら、ボランティア活動の現代の社会に果たす役割、ボランティア活動に参加する人々が受ける影響について学ぶ。これを踏まえた上で、実際のボランティア活動に参加する心構えと、準備と、ボランティア活動先の実際を学び、活動への参加に備える。講義、ワークショップ形式の授業を織り交ぜながら進める。		
授業の評価方法	<p>No. 評価項目：割合：評価の観点</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 小テスト/レポート課題：40%：授業終了後に提出するレポートの内容 2. 平常点/受講態度：30%：欠席、遅刻をしない 3. 発表/表現等：30%：授業への前向きな態度 		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	市民活動とボランティア組織		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	工学部 1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計61名(男子学生不明 女子学生不明)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>本講義は、現代社会におけるボランティア組織の位置づけ、存在意義などを社会制度との関係から理解することを目的としている。ボランティア活動は、既存の行政システム・市場システムの領域とは異なった市民社会の領域に位置づけられるものだと見える。日本では、特に1995年の阪神淡路大震災以降、その社会的重要性が高まってきている。講義では、日本におけるボランティア活動の歴史の変遷をふまえ、阪神・淡路大震災におけるボランティア活動や市民活動の国際比較研究を行いながら、様々な論点を提示していく。</p> <p>《知識と視野》 市民セクターがどのような社会問題に対して、どのような役割を果たすことができるのか、具体的事例から考え、現代社会に対する深い洞察力をつけることを目指す。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロ 2. ボランティア活動・市民活動とは何か？ 3. 日本におけるボランティア活動の歴史的展開 4. 阪神・淡路大震災とボランティア活動の展開①緊急救援期 5. 阪神・淡路大震災とボランティア活動の展開②復旧・復興期 6. 阪神・淡路大震災とボランティア活動の展開③仮設住宅における支援活動 7. 阪神・淡路大震災とボランティア活動の展開④事業化するボランティア 8. 阪神・淡路大震災とボランティア活動⑤社会のしくみづくり 9. 行政とNPOのパートナーシップ関係 10. コミュニティ・ビジネスの可能性 11. 欧米の市民活動(アメリカの社会的企業①) 12. 欧米の市民活動(アメリカの社会的企業②) 13. 欧米の市民活動(イギリスの社会的企業①) 14. 欧米の市民活動(イギリスの社会的企業②) 15. まとめ 		
教科書	西山志保、改訂版 ボランティア活動の論理、東信堂、ISBN:4887135939		
授業の工夫点	事前に必要とされる知識は特にないが、教科書に目を通し、柔軟な思考を持って講義に臨んでもらいたい。		
授業の評価方法	<p>No: 評価項目: 割合: 評価の観点</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 試験/定期試験: 70%: 講義の理解度、論理的思考 2. 平常点/受講態度: 30%: 出席数が3分の2に満たないものは単位ができません 		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 信州大学

授業科目名	現代社会とボランティア		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計24名(男子学生5名 女子学生19名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア社会の現状と課題を学び、自分と社会のよりよい在り方を探求する。		
授業内容	<p>授業の概要</p> <p>本授業は、グローバルな視野からボランティア活動の理念や現状と課題、さらには実践方法などについて、社会最前線の事例をとおして学ぶことを目標にしたいと考えています。</p> <p>したがって、講義・参画型ワークショップ・映像学習という構成によってすすめていく予定です。授業をきっかけに、ボランティア活動をぜひ体験してみてください。</p> <p><注> 受講学生が多い場合は、参画型ワークショップが不可能になる場合があります。</p>		
教科書	『希望へのカー地球市民社会の「ボランティア学」(興梠 寛 著)』		
授業の工夫点	理論学習・参画型ワークショップ・映像による実践研究により構成		
授業の評価方法	学生による授業評価アンケート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	スペシャルオリンピックスで学ぼうゼミ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	作業療法学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計14名（男子学生7名 女子学生7名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	17～18時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	スペシャルオリンピックスを通じてボランティア活動等を理解する。		
授業内容	授業の概要 この授業は、SOの概要および障害に関する講義を受ける。スペシャルオリンピックス松本地区と塩尻地区で開催しているスポーツ（フロアホッケー、ボウリング、バスケットボール）にアスリートとともに活動する、さらに課題別のグループワークを通して、障害や障害者の理解を深め、レポートにまとめて発表することの3つで構成されている。		
教科書	使用しない		
授業の工夫点	①スペシャルオリンピックスに学生がボランティアとして参加 ②障害関係をテーマに演習とパワーポイントによる発表 ③ボランティア参加後1週間以内にレポート提出		
授業の評価方法	学生による授業評価アンケート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	スペシャルオリンピックス日本・長野 松本地区プログラム		
今後の授業の継続	未定		

○ 新潟大学

授業科目名	ボランティア開発論Ⅰ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人文社会教育科学系（院現社）	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部全年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計25名（男子学生10名 女子学生15名）	授業区分	1～3を実施
単位数	2	ボランティア体験の時間数	授業受講する学生による （最短3時間、最長上限なし）
必修・選択の別	選択		
授業目的	科目の概要：ボランティアの現実と理論を学ぶ。 科目のねらい：ボランティアを自発的に展開出来る人材を育成する。 学習の到達目標：ボランティアに関わる知識及び技能を習得し、かつ企画立案ができるようになる。		
授業内容	第一回目に配布		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	演習活動40、レポート30、実技課題30		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ボランティア関係団体		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア開発論Ⅱ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人文社会教育科学系（院現社）	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部全年次対象	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計25名（男子学生10名 女子学生15名）	授業区分	1～3を実施
単位数	2	ボランティア体験の時間数	授業受講する学生による （最短3時間、最長上限なし）
必修・選択の別	選択		
授業目的	科目の概要：ボランティアの現実と理論を学ぶ。 科目のねらい：ボランティアを自発的に展開出来る人材を育成する。 学習の到達目標：ボランティアに関わる知識及び技能を習得し、かつ企画立案ができるようになる。		
授業内容	第一回目に配布		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	演習活動40、レポート30、実技課題30		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ボランティア関係団体		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	医療ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員（5名）、学外教員（1名）	授業期間	半期
担当教員の専門分野	医（保健学科）	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部全年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計26（共通）（男子学生19名 女子学生7名） 計21（専門）（男子学生1名 女子学生20名）	授業区分	講義
単位数	1	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別			
授業目的	日本では阪神淡路大震災を契機にボランティア活動の機運が高まり、ボランティア人口は増え続けている。国内外におけるさまざまなボランティア活動の実際から、生活支援や医療保健福祉に関連するボランティア活動を学ぶ。また、ボランティア学の基礎知識として、ボランタリズムの考え方やボランティア組織、ボランティアコーディネーター、市民社会におけるボランティアの役割を理解する。		
授業内容	1 ボランティア学の基礎知識 2 ミャンマーへの医療支援活動 3 開発途上国における医療と研究支援活動 4 新潟国際ボランティアセンターの活動の実際① 5 新潟国際ボランティアセンターの活動の実際② 6 新薬開発を支える創薬（患者）ボランティアについて 7 ホスピスとボランティア 8 ボランタリズムの思想		
教科書	講義時にプリントを配布する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席状況とレポートによる。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	新潟発福祉学		
担当教員（学内又は学外）	学内教員（5名）、学外教員（8名）	授業期間	半期
担当教員の専門分野	歯（口腔福祉学科）	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部全年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計122名（男子学生52名 女子学生70名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	変革の只中にある社会福祉を理論と実践の往復運動としてとらえ、児童家庭・女性、障害、高齢者など各領域における地道・多彩な福祉の実践、実務の講義・演習をとおして福祉の今を学ぶ。		
授業内容	第1回 福祉の今 第2回 障害者の理解と支援 第3回 ハンセン病対策に見る保健と福祉の連携 第4回 新潟の知的障害者福祉 第5回 福祉の新時代－社会福祉施設と地域の協働 第6回 時代病理としての児童家庭福祉相談 第7回 障害者スポーツの可能性(1) 第8回 障害者スポーツの可能性(2) 第9回 競技としての障害者スポーツ 第10回 障害者スポーツとドーピングの問題 第11回 新潟県における社会福祉の動向 第12回 リハビリレクリエーションによる被災者支援 第13回 高齢者の味覚と生きがい 第14回 ケアと支えあいのエネルギー 第15回 福祉のこれから（討論と発表）		
教科書	講義・演習資料の他にとくに指定しない。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	提出レポート、演習態度・意欲等により総合的に評価する。		
授業のサポート体制	教員内サポート体制		
学外の関係機関・団体との連携	新潟県		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	災害復興科学		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	災害復興科学センター 地質学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部全年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計252名（男子学生136名 女子学生116名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	新潟県では近年、2004年7月の新潟豪雨災害、10月の新潟県中越地震の災害を受け、被災地では現在もこれらの災害からの復興が進められています。大きな災害からの復興は、理工系の学問に限らず、医学系や社会科学系などの総合的な取り組みが重要となっています。新潟大学では、災害復興科学センターを設置して、さまざまな学問分野において復興を支援する取り組みを行ってきました。本講義では、「災害復興を科学する」というキーワードで、これらの取り組みを紹介していきます。		
授業内容	第1回本講義のねらいと連続災害の概要 第2回生活安全ネットワーク 第3回生活安全ネットワーク 第4回こころのケア 第5回ボランティア 第6回生活基盤 第7回災害法学 第8回危機管理 第9回アーカイブス 第10回農学 第11回地域産業政策 第12回複合防災 第13回地域防災計画 第14回災害通信 第15回災害地理情報 各回の講義テーマや担当者については、第1回の講義の際に説明を行う。		
教科書	特になし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	オムニバス形式であるので、出席を重視する。評価は、講義ごとの小レポートと最終レポートで評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	基礎看護学特論 I		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	医歯学系(医学部保健)看護学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次		授業のレベル	
平成20年度履修者数	計12名（女子学生12名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	保健医療福祉分野における急激な変化に、看護者としてどのように貢献できるか。ここでは、医療機関全体の枠組みの中での組織的管理および看護者の人的管理の両面から教授する。組織論を含む医療機関の管理運営を含め、看護管理者の責務と役割、看護業務の分析と効果的な看護要員の配置さらには医療政策への繋がりを視座にいれたリーダーシップ理論を教授する。		
授業内容	1. 看護者の人的管理 1) 組織とは 2) 人材育成 キャリアということば キャリア開発とキャリア発達の違い キャリア開発発展の変遷(産業界、看護界) 女性のキャリア開発とキャリア発達 看護管理者に求められるもの 3) 目標による管理 目標による管理の理論 目標による管理の4要素 目標による管理の目的 目標による管理の管理効果 目標による管理を成功させるにはどうするか、現状をふりかえてみて効果をもたらしているところ、および停滞しているところを討議する。 2. 職務満足・患者満足 職務満足度が意味すること、なぜ看護者の職務満足度は必要とされているか？ 患者満足がもたらすもの 3. 履修生のプレゼンテーションのテーマ(履修生の背景をみて変更もある) ①資格ある人の活用 ②自分が考えるリーダーシップ ③医療とボランティア		
教科書	プリントを配布する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	プレゼンテーションと提出された課題レポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	社会福祉援助技術現場実習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	医歯学系(歯)福祉援助学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次		授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計30名(女子学生30名)	授業区分	講義、実習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	3年次履修の「早期援助技術演習・社会福祉援助技術現場実習指導」を踏まえ、次により社会福祉援助技術現場実習を実施する。 ・社会福祉援助技術現場実習は「学科指定」、「自己開拓実習」2種類からなる。 ・「学科指定実習」、「自己開拓実習」それぞれ2週間(14日間、100時間)、通算4週間(28日間、200時間)とする。 ・実習施設の種別は障害、高齢、児童、行政・相談所の中から「学科指定」、「自己開拓実習」それぞれ異なる2種の施設とする。 ・実習終了後発表会を開催し、省察を深める。 ・実習実施期間は、原則として4月から10月までとする。		
授業内容	1 社会福祉援助技術現場実習オリエンテーション 2 社会福祉援助技術現場実習振り返り発表会(1) 3 社会福祉援助技術現場実習振り返り発表会(2)		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	1) 評価は実習先施設(大学から依頼に基づく各施設共通の尺度による評価シート、)の評価(60%)、学科教員による実習状況(20%)、「実習ノート(実習計画書、まとめを含む)」(20%)により行う。 2) 原則として欠席は認めない。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	NPO論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人文社会教育科学系(経済) NPO論・まちづくり論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次		授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計70名(男子学生58名 女子学生12名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	近年注目されるようになったNPO(民間非営利組織)について、NPOの定義、GDP上のプレゼンスなど経済的地位、NPOを取り巻く法制度の説明、なぜ資本主義体制下にNPOが存在するのかという考察(市場の失敗、政府の失敗、家計組織論など)、NPOのマネジメント、NPOの抱える課題などについて講義するほか、寄付やボランティアの理論、地域通貨などの周辺領域について考察する。		
授業内容	・イントロダクション:NPOとは何か ・マクロ経済とNPO ・NPOの歴史と広がり ・日本におけるNPO制度 ・NPOの存在理由 ・寄付とボランティア ・企業フィランソロピー ・NPOと税制 ・NPO各論—地域通貨、ソーシャルキャピタルなど ・NPOの課題とマネジメント、NPOの失敗		
教科書	山内直人[2004]『NPO入門 第2版』日本経済新聞社		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポートによる。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	演習 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人文社会教育科学系(経済) NPO論・まちづくり論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次		授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計0名	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	近年注目されるようになったNPO(民間非営利組織)について、NPOの定義、GDP上のプレゼンスなど経済的地位、NPOを取り巻く法制度の説明、なぜ資本主義体制下にNPOが存在するのかという考察(市場の失敗、政府の失敗、家計組織論など)、NPOのマネジメント、NPOの抱える課題などについて共同研究するほか、寄付やボランティアの理論、地域通貨などの周辺領域についても考察する。		
授業内容	履修予定者が決まり次第、連絡する。		
教科書	講義中に適宜指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	発表ないしレポートで評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	社会行動論基礎演習 II		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人文社会教育科学系(人文)地域社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次		授業のレベル	
平成20年度履修者数	計0名	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	社会学の広がりをご概観することにより、受講者が自分のテーマを発見する手がかりを得ることを目的とする。同時に、社会学を勉強する上で必要な最小限の技法(社会学的リテラシー)の修得もめざす。		
授業内容	1.社会 2.行為 3.集団 4.家族 5.都市 6.逸脱 7.コミュニケーション 8.社会心理 9.宗教 10.ジェンダー 11.医療と福祉 12.現代社会		
教科書	奥井智之『社会学』東京大学出版会		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席・発言・レポート発表による(とくに討論への参加を重視する)。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	ミュージアム論		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人文社会教育科学系(人文)日本民族学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次		授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計28名 (男子学生5名 女子学生23名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	新潟市歴史博物館「みなとびあ」を具体的事例に、博物館の現状と課題を知り、博物館の目指すべき姿を考える。		
授業内容	第1回 みなとびあという博物館 第2・3回 みなとびあを観る 第4回 みなとびあをつくる 第5回 常設展示をつくる 第6回 資料を整理・保存する 第7回 資料から歴史を解き明かす 第8回 企画展示をつくる 第9回 歴史を伝える 第10回 体験プログラムを行う 第11回 ボランティアを受け入れる 第12回 みなとびあ地域の活動 第13回 みなとびあの利用者 第14・15回 みなとびあを裏からのぞく		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席とレポートによる。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	社会行動論基礎演習B		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人文社会教育科学系(人文)地域社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次		授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計8名(男子学生3名 女子学生5名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	社会学についての基礎文献の講読、討論を行い、社会的な視点、方法論について知識を獲得する。		
授業内容	1 ガイダンス 2-3 社会学とは何か 4 家族をめぐる社会学 5 地域をめぐる社会学 6 メディアと情報化をめぐる社会学 7 階級・階層をめぐる社会学 8 インナートリップとしての社会学 9 ジェンダーとセクシュアリティ 10 国際社会とエスニシティ 11 社会運動・NPO・ボランティア 12-13 いろいろな社会学 14 社会学の歴史1 西欧世界の社会学史 15 社会学の歴史2 日本の社会学史		
教科書	宇都宮京子編『よくわかる社会学』ミネルヴァ書房		
授業の工夫点			
授業の評価方法	発表と討論での発言および出席レポート(9割) 期末レポート(1割)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	教育実践体験研究Ⅲ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人文社会教育科学系(実践セ) 教育内容(方法)	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次		授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計8名(男子学生3名 女子学生5名)	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>科目の概要:教育人間科学部が新潟市教育委員会との連携協力事業として実施している「学習支援ボランティア」派遣事業に参加し、次の活動を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学校(新潟市立の小・中・養護学校)における教育・学習活動の支援 2. 活動の記録・反省 3. 活動に関する報告・交流会、シンポジウムへの参加 <p>科目のねらい: 1. 学校教育に貢献する。 2. 学校の役割、教師の仕事、子どもについての認識を深める。</p>		
授業内容	<p>4月:4年次生を主要な対象として、第1次募集を実施(説明会を開催する)。 5月:新潟市教育委員会より、「希望調査書」を受け取る。 応募者に対して説明会を開催し、派遣候補の学校を決定する。 学校・学生による協議がまとまり次第、活動に入る。 7月:3、4年次生、養護教諭特別科生、大学院生を対象に加え、第2次募集を実施(説明会を開催する)。 9月:「学習支援ボランティア」中間報告・交流会を開催。活動の交流と意見交換を行う。 10月:第3次募集を実施。学生、大学院生の希望に応じて、募集・派遣を行う(12月まで継続)。 11月:派遣学校への訪問を開始(3月まで継続)。 12月:公開シンポジウム「『学習支援ボランティア』派遣事業の成果と課題」を開催し、今年度の成果、今後の課題等に関する報告・意見交換を行う。 2月:活動に関する最終レポートを提出する。</p>		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「学習支援ボランティア」として、学校支援活動を、6ヶ月間、週1回程度、継続的に実施していること。 2. 上記の活動について、「活動記録・反省カード」(活動回数分)および「最終レポート」を、一定の内容と水準を備えた形で、作成・提出していること。 3. 委員会が主催する「中間報告・交流会」(例年9月に開催)および「最終報告会(シンポジウム)」(例年、12月初旬の土曜日に開催)に出席すること(委員会からの依頼を受けた場合、報告または発言を行うこと)。 		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	教育本質・目標論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人文社会教育科学系(院現社) 教育学・道徳教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	教育学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計169名（男子学生71名 女子学生98名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	科目の概要:教育の本質と、時代の要請した教育の在り方、いわゆる教育の流れを捉えることができるようにする。 科目のねらい:教育活動の本質を理解することができる。		
授業内容	1 教育観の捉え方 2 ケアリング教育 3 教育学的ケアリング 4 学校ボランティア 5 教科の授業 6 二律背反 7 学習活動の構造 8 教育目的、教育目標 9 成績コード 10 教育概念のシステム		
教科書	齋藤勉『授業批評の力を鍛える』明治図書		
授業の工夫点			
授業の評価方法	課題への取組と小レポート(30%)、テスト(70%) 3回以上の欠席は不可		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	教育の社会的・制度的・経営的研究		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人文社会教育科学系(院現社) 教育行政学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次		授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計85名（男子学生27名 女子学生58名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	科目の概要:公教育は社会との関わり抜きには存立しえない。制度のあり方も、そのよって立つ社会に大きく規定され、経営的側面も当然に影響を受けるものである。教育に関する様々な事象、とりわけ近年の教育改革を中心に講ずる。 科目のねらい:自分の受けてきた教育がどのような制度のもとにあるかを理解することから出発し、最終的には、21世紀の教育について自分なりの展望を得ることを目標とする。		
授業内容	制度編:1. 教育制度の基本原則と教育体系 2. 就学前教育制度 3. 初等教育制度 4. 前期中等教育制度 5. 後期中等教育制度 6. 高等教育制度 7. 障害児教育制度 8. 私学制度 9. 社会教育制度 10. 教育行政制度 経営編:11. 生徒指導と学級経営 12. 学校経営組織 社会編:13. 教員と社会 14. 教育とボランティア 15. 学校給食と地域		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	小テスト、レポート、試験による総合評価。なお、講義の展開、受講者の意欲等によって、変更もある。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	社会福祉論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	自然科学系(工)生体医工学、支援工学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	工学部	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計25名(男子学生23名 女子学生2名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>1. 目的 社会福祉における人権と法律を学ぶことによって、人間らしく自分らしく生きていきたいという願いは、国家や社会の枠組みや条件によって左右されたり、強弱がつけられたり、差別されることがあってはならないということに気づくことを目的とする。</p> <p>2. 概要 福祉の視点に立った憲法・公的扶助・子供の福祉と人権・障害者の福祉と人権・高齢者の福祉と人権・女性の福祉と人権そしてコミュニティでな取り組みを学び、国家や社会には、人間この「命・健康・暮らし」を守り、保障する義務があるということに気づく。</p> <p>3. 発展 理科系の学生にとって福祉を原点にとらえた場合、どのように発展できるか学びを深める。 具体的には、ユニバーサルデザインやバリアフリーなど実際にどのように使われているのか、さらには当事者の方にも参加して</p>		
授業内容	<p>1. 自立生活運動 1970年代からノーマライゼーションの意識が高まり、アメリカの西海岸のパークレー大学を中心に自立生活運動の気運が高まった。 アメリカの自立生活運動から日本における障害者運動さらに障害者インターナショナルなどの当事者による世界規模の会議で障害者の施策が整えられていった流れを学ぶ。</p> <p>2. 憲法と社会福祉 5月の憲法記念日に合わせて憲法と社会福祉を学ぶ。数々の判例を取り上げ、(公的扶助や就学問題、ハンセン病訴訟など)社会保障の裁判事例を学ぶ。合わせて学生無年金訴訟の事例を紹介し、年金制度についても学びを深める。 障害福祉から見た日本の福祉の歴史を取り上げる。代表的な福祉の先駆者の紹介、その当時の理念を学ぶ。</p> <p>3. 公的扶助(低所得者の福祉と人権) 福祉援助の種類の制度を公的扶助を事例に進める。ワーキングプアが起こる現状、格差社会の問題点、押して、公的扶助による当事者への支援を学ぶ。</p> <p>4. 障害者の福祉と人権 グランドデザイン案によって障害当事者を取り巻く環境が大きく変わることを取り上げ、支援工学の発展を期待しているのは障害当事者であることを学ぶ。 なお、千葉県で採択された差別禁止法の根拠となる条例の内容について学ぶ。 また、バリアフリーからユニバーサルデザインへという理念を建築・歩道・コンピューター支援機器などの実例を通じて学ぶ。</p> <p>5. 高齢者の福祉と人権 2000年以降の介護保険の導入によって措置から権利へと移ってきたその理念をドイツ介護保険から日本の介護保険に至るまで学ぶ。また、介護保険のメニューとして福祉機器の提案が取り上げられていることから、ユニバーサルデザイン的な福祉機器の実例をビデオを通して学ぶ。</p> <p>6. 女性の福祉と人権(児童) 少子高齢化の現在、女性の人権に焦点を当て、グローバルな視点からその問題点と解決策を学ぶ。</p> <p>7. 地域福祉と災害復興支援 災害弱者と呼ばれてる方への支援、行政やNPO法人などボランティアの役割を学ぶ。</p>		
教科書	毎回、プリントとして随時配布する。		
授業の工夫点	ホームヘルパー2級程度の知識を獲得する。		
授業の評価方法	成績は下記を総合的に評価する。 1)出席状況、2)レポート、小テストの成績、3)定期試験の成績 定期試験は出席日数が3分の2未満の受講者には許可されない。 (4回欠席した学生は聴講取り消すものとする。)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	ボランティア実習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	自然科学系(工)生体医工学、支援工学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	工学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計59名(男子学生52名 女子学生7名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	各種障がい者との交流および介助法などの簡単な実習、福祉施設での実習、運動障がい者用のコンピュータ操作スイッチの設計・製作などを行う。具体的には、次の3つの内容からなる:1)障がい者および介助者との交流と簡単な実習;2)施設見学;3)操作スイッチの設計・製作および評価。2)では、少人数のグループごとに、いくつかの福祉施設で実際にボランティア活動を体験する。3)では、少人数グループでオリジナルの操作スイッチを設計・製作し、その成果を口頭発表する。		
授業内容	<p>●ボランティア入門</p> <p><1週>グループ討議:ボランティアとは何か?</p> <p><2週>「ボランティア活動への誘い」:新潟市福祉協議会ボランティアセンター所長</p> <p>●障がい者および障がい者の支援:障がい者や介助者による講話と討論、および簡単な実習</p> <p><3週>「視覚がいについて」実習:視覚障がい者の誘導とアイマスクによる疑似体験</p> <p><4週>「老化と高齢者介護について」実習:高齢者の疑似体験</p> <p><5週>「運動機能障がいについて」実習:車いすの操作と介助</p> <p><6週>「筋萎縮性側索硬化症(ALS)について」:講演と操作スイッチの実習</p> <p><7週>「聴覚障がいについて」実習:手話入門</p> <p>●福祉施設の見学</p> <p><8週>「福祉施設の活動と見学・実習上の注意」:新潟市福祉協議会ボランティアセンター所長</p> <p><9週>新潟市内福祉施設でのボランティア活動</p> <p><10週>同上</p> <p>●ALS患者向けの操作スイッチの設計・製作・評価:少人数の班に分け、班ごとに設計・製作、報告書の作成および口頭発表</p> <p><11週>実施計画の立案</p> <p><12週>操作スイッチの設計と製作</p> <p><13週>調査報告書の作成</p> <p><14週>調査結果の口頭発表(発表15分、質問10分/班)</p> <p><15週>同上</p>		
教科書	テキストは特にないが、週ごとに参考資料を配布する		
授業の工夫点	<p>○毎週、実習内容についてのレポートを提出する。レポートは、下記ホームページ(アクセス制限有)から提出する。</p> <p>○単位は、次の項目を総合的に評価して認定する。:1)レポートの提出状況と内容、2)操作スイッチ作成の報告書、3)口頭発表の内容</p> <p>○出席率ないしレポート提出率が80%未満のときは、評価の対象外となるため注意すること(評価0点)。</p> <p>○総合評価においては、主に下記の項目を評価の基準とする。</p> <p>・本実習への自発的な参加</p> <p>・ボランティア活動の社会的意義、各種支援機器やバリアフリー/ユニバーサルデザインの理解度</p>		
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

○ 筑波大学

授業科目名	共生キャンパスとボランティア—障害学生とともに学ぶ—		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	その他(1学期)
担当教員の専門分野	障害科学専攻	共通・専門等の別	その他
開設学部(学科)及び年次	全学 1・2年次	授業のレベル	初級・入門(総合科目)
平成20年度履修者数	計108名	授業区分	講義
単位数	1	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	障害学生の支援を含めた共生キャンパス実現のための障害に対する理解啓発と支援技術の習得		
授業内容	障害のあるなしにかかわらず、すべての学生が共に学べる共生キャンパス実現のために、障害に対する理解を深め、障害者に対する適切な支援技術を習得することを目的とする。また、障害学生・支援学生にも授業に参加してもらい、障害者支援について具体的な理解をはかりたい。		
教科書	日本医療企画の「視覚障害学生サポートガイドブック 2005」(鳥山由子監修、青松利明・青柳まゆみ・石井裕志編著)		
授業の工夫点	各障害に関する専門教員、障害学生、支援学生によるオムニバス講義の後、まとめとして受講学生からの質問に答え、討議する場を設けている。		
授業の評価方法	出席状況と筆記試験の結果から総合的に評価		
授業のサポート体制	より専門的な支援技術を習得するための障害学生支援技術の授業を別に設けている。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 長岡技術科学大学

授業科目名	ボランティア活動基礎		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	スポーツバイオメカニクス、スポーツ工学、スポーツ法学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	工学部3・4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計21名（男子学生15名 女子学生6名）	授業区分	講義
単位数	1	ボランティア体験の時間数	5時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	【 授業目的および達成目標 】 近年、特に阪神・淡路大震災以来、急迫的緊急避難状況下におけるボランティア活動の必要性・重要性が取り上げられている。しかし実際には、ボランティア活動の必要性は急迫的な状況だけに留まらない。また急迫的な状況であればあるほど、ボランティア活動に求められる知識・能力は専門かつ広汎に及ぶ。本授業では、ボランティア活動及び関連する事項全般について事例、具体例に基づき、総合的総括的に学ぶとともに、活動に必要な知識、専門性そして資格取得のためのそれらについて学び、学習者がそれら資格を取得または習得する機会・足がかりをつかむことを目標とする。		
授業内容	【 授業内容および授業方法 】 授業項目に挙げる内容について、オムニバス形式で行う。授業方法は、各担当教員より別途指示するものとする。 【 授業項目 】 1.ボランティア活動概論 2.震災時に必要なボランティア 3.災害に学ぶ（新潟中越地震、7.31水害、大雪等） 4.医療・福祉におけるボランティア 5.組織運営とボランティア 6.ボランティアと資格 7.ボランティアとNPO 8.その他 *授業項目の頭の数字は、授業回数を示すものではない。		
教科書	各教員毎別途指示する。		
授業の工夫点	学外の資格を取得できるよう授業内容をリンクさせている。		
授業の評価方法	各教員毎にレポート等で評価し、その平均で最終成績とする。詳細は授業開始時に指示等を行う。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア実践活動		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	経営情報システム工学課程主任（職指定である）	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	工学部全学年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計1名（男子学生1名 女子学生0名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	40時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	【 授業目的および達成目標 】 ボランティア活動に関する知識・技能を学び、将来のボランティア活動に役立つ能力を身につけるとともに、学生及び社会人として求められる自主性、積極性、組織性、奉仕の精神、問題発見・解決能力などの資質を養うことを目的とする。		
授業内容	【 授業内容および授業方法 】 公共団体及びボランティア団体等、責任の所在が明確な団体の主催する活動に参加する。 【 授業項目 】 学生自身が探し、実際の活動にあたっては、事前に「ボランティア活動計画書」を各課程主任等の承認を得て、経営情報システム工学課程主任に提出し、その承認を受ける。		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	ボランティア実践活動時間を証明するボランティア団体等の責任者の証明書、ボランティア活動レポートにより判断する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	（財）長岡市国際交流協会の方に依頼し、特別講義を実施している。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 上越教育大学

授業科目名	ボランティア体験		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	教育実践研究	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	学校教育学部 1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計14名（男子学生3名 女子学生11名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	原則として5～12月の間に5回以上参加 （宿泊を伴う活動には2回以上参加）
必修・選択の別	選択		
授業目的	学校・社会教育活動における子供向け主催行事に、ボランティアとして参加し、その活動補助を通して、子供理解を深め、実践的指導力を養う。		
授業内容	4月下旬：履修者ガイダンス 5月上旬：履修者打合せ会 5月～12月：各地で事前打合せを行った後、ボランティア活動 8月下旬：中間交流会 1月中旬：履修討論会		
教科書	なし		
授業の工夫点	実践力を高める機会を増やすため、19年度より1年次から履修できるようにしている。また、中間交流会・討論会を開いて履修生同士で意識を共有できる場を設けている。		
授業の評価方法	ボランティア体験記録簿の記述内容、並びに受け入れ機関の評価を総合して成績評価する。		
授業のサポート体制	活動途中の8月に中間交流会を開き、他行事に参加している学生と意見を交換したり担当教員から助言を受けたりする機会を設けている。		
学外の関係機関・団体との連携	市教委や社会教育施設主催の子供向け行事の補助員としてボランティアを受け入れていただいている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ お茶の水女子大学

授業科目名	生活世界の安全保障23NPOインターンシップ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	社会学（福祉社会学・理論社会学）	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	文教育学部、理学部、生活科学部 （1・2・3・4年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計23名（男子学生0名 女子学生23名）	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	60時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	NPOでインターンシップ（体験就業）を行う。福祉、教育、環境、国際協力、文化などのさまざまな活動に参加することにより、NPOの役割や課題を学ぶ。また、社会的活動と大学での学習・研究の関連や、社会と自身のかかわりを考える契機とする。		
授業内容	オリエンテーション（初回授業） 5月13日（火）、5月15日（木）、5月16日（金） ※とくに13日は必ず参加すること。 やむをえず欠席の場合は必ず担当教員に連絡すること。 5-12月 夏休みを中心に各NPOで実習 10月（予定）中間報告会 1月（予定）期末報告会		
教科書	随時指定		
授業の工夫点			
授業の評価方法	実習成果＝60時間以上の実習 発表＝中間報告会、期末報告会、 その他＝実習日誌・実習レポート等		
授業のサポート体制	補助員としてアソシエイト・フェロー、ティーチング・アシスタントを配置。		
学外の関係機関・団体との連携	子育て支援、子どもの悩み相談、障害児教育支援、まちづくり、劇場やイベントの運営、環境保護・環境教育、ホームレス支援、ITコンサルティング等を行っている団体での実習に学生を受入れ。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO入門		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学(福祉社会学・理論社会学)	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文教育学部、理学部、生活科学部 (1・2・3・4年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計46名(男子学生0名 女子学生46名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>近年NPO(Non-Profit Organization、民間非営利組織)に関心が集まっている。NPOとは、営利組織(企業)でも公共機関(国や自治体)でもない、民間でありながら公共的な課題を担う組織である。福祉、環境、まちづくり、国際協力など多岐にわたるその活動を紹介しながら、NPOの定義、注目される理由、現代社会における役割、組織運営の課題、歴史と今後の展望などを概説する。</p> <p>講義の終盤では、受講生自身が解決したい課題を設定し、仮想(バーチャル)NPOの事業計画を立案する。みずからがNPOを創設し運営するつもりになって、主体的に受講してください。</p>		
授業内容	<p>以下のテーマについて、適宜講義する(順不同)。</p> <p>0.話の前提:いま問題になっていること 現代の社会問題—ワーキングプア・フリーター、子育て・教育、少子高齢化、地球環境問題など—について考え、NPOとのかかわりを検討する。</p> <p>1. NPOとは何か 他の組織(企業や役所など)とのちがいを検討することにより、NPOの定義を考える。 制度(法律など)、活動実態などいろいろな側面から検討する。</p> <p>2. NPOの活動分野 ・福祉、地域環境保全、まちづくりなどローカルな課題にかかわる活動を紹介する。 ・国際協力、地球環境問題などグローバルな課題にかかわる活動を紹介する。 ・NPO法人以外の非営利組織の活動、「グローバル」と「ローカル」のかかわりを検討する。</p> <p>3. NPOと現代社会 ・内外のデータをもとに、NPOが属する非営利セクターの規模などを国際比較し、概観する。 ・非営利組織の存在理由を、社会学や経済学の視点から分析する。 ・NPOと行政、NPOと企業の協力関係のあり方を検討する。</p> <p>4. NPOのマネジメント ・NPOの組織運営の特徴や課題を、他の組織と比較し明らかにする。 ・NPOの活動を支える制度や政策のあり方を検討する。</p> <p>5. NPOの設立と運営 ・NPO設立に必要な条件、設立手順などを解説する。受講生が仮想NPOの構想を立てる。 ・仮想NPOの活動分野、目的を具体的に設定し、各自が定款(NPOの基本方針)を作ってみる。</p> <p>6. NPOと市民社会 ・受講生が仮想NPOの事業計画を発表。NPOなどの「市民社会組織」による社会問題解決の方向性を考える。</p>		
教科書	<p>準教科書: 雨森孝悦(2007)『テキストブックNPO—非営利組織の制度・活動・マネジメント』東洋経済新報社</p>		
授業の工夫点			
授業の評価方法	小論文(レポート)=講義中および期末発表=講義中(受講生数により検討)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	NPOの方をゲストスピーカーとして招いている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	社会保障論演習 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	高齢者福祉等の福祉サービスの政策科学的研究(ニーズの測定、政策の分析・評価など)と、福祉国家についての理論的・実証的な研究	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文教育学部(人間社会学科)(3・4年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計14名(男子学生0名 女子学生14名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	テーマは、福祉ミックス論(社会保障・社会福祉における政府・非営利組織・営利企業の役割)。福祉ミックス論の理論的検討、日本と諸外国における福祉ミックスの再編成をめざす制度改革の分析、NPOなど新たなサービス提供組織の実態の分析などを主な内容とし、文献講読と受講者の研究発表を中心に授業を進める。		
授業内容	1. オリエンテーション 2. 概説(1)「社会サービスの多元化と市場化」を中心に 3. 概説(2)「福祉多元化とNPO」を中心に 4. 民間福祉と公私関係の歴史 5. 国際比較(1)イギリスのボランティア組織 6. 国際比較(2)北欧、ドイツ等 7. 国際比較(3)中国の地域福祉 8. 介護サービスと保健・福祉・医療複合体 9. 営利部門(1)有料老人ホーム等 10. 営利部門(2)サービスの質の確保と規制 11～12. NPO活動の状況(2) 13. 総括討論 ただし、履修者数等によって変更もあり得る。		
教科書	用いない		
授業の工夫点			
授業の評価方法	小論文(レポート)=40%、出席=30%、発表=30%		
授業のサポート体制	週1回、オフィスアワーを設定。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	生涯学習概論		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	生涯学習論、成人教育学、社会教育学、組織学習論、教師教育論、専門職大学院論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文教育学部(人間社会学科)(1・2・3・4年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計109名(男子学生0名 女子学生109名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	教育学は従来、子どもや青少年の学校教育に関する理論に重点が置かれており、一生涯にわたる学習を意味する生涯学習は、多くの学生にとってなじみのないものになっている。この講義では、生涯学習の理念の変遷、生涯学習政策の動向と今日的な特徴、生涯学習の諸理論(特に成人の学習論)などを理解する。生涯学習の概略を理解すると同時に、自らのライフサイクルを検討し、アイデンティティ形成をはかる際に意味あるものであるという理解に至ることを目標とする。		
授業内容	1回 オリエンテーション 2回 生涯学習の理念 3～4回 生涯学習政策の動向(答申素案をもとに) 5～9回 生涯学習社会の近未来 学校と地域、NPOとボランティア、男女共同参画社会、大学開放、企業内教育など 10・11回 成人の特性を活かした学習援助論(アンドラゴジーなど) 12回 生涯学習における学習者像と学習支援 13回 まとめ 14回 授業時間内に試験		
教科書	教科書:堀薫夫・三輪建二編著『生涯学習と自己実現』放送大学教育振興会 参考文献:中央教育審議会答申素案『新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について』(2008年1月)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	期末試験=6割、出席=4割		
授業のサポート体制	TAを配置し、毎回のふり返りレポートの整理、学生の質問への回答補助を実施している。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	生涯学習特殊講義		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	生涯学習論、成人教育学、社会教育学、組織学習論、教師教育論、専門職大学院論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文教育学部(人間社会学科)(1・2・3・4年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計15名(男子学生0名 女子学生15名)	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	2時間以上6時間未満
必修・選択の別	選択		
授業目的	学校教育以外の様々な生涯学習事業やNPOでの学習プログラムの企画・立案について学ぶほか、学生自らが学習プログラムの企画・立案し、実施し、評価するプロセスを協働で体験することを目標とする。		
授業内容	1回 オリエンテーション 2～4回 おとなの学びと学習プログラム 5回 昨年度のプログラム事例の検討(キャリア教育、お茶教室) 6・7回 東京都中野区ことぶき大学大学院参加 8～10回 学習プログラムの企画・立案 11回 学習プログラムの実施の準備 12回 学習プログラムの実施1 13回 学習プログラムの実施2 14回 学習プログラムの評価 15回 学習プログラムのまとめ(冊子作り)		
教科書	マイセルほか『おとなの学びを支援する』鳳書房、2000年		
授業の工夫点			
授業の評価方法	小論文(レポート)=3割(冊子作り)、出席=5割、実習成果=2割(実習)		
授業のサポート体制	授業参観前の打合せ、授業参観後の振り返りを3回実施し、振り返りは小レポートとして提出。		
学外の関係機関・団体との連携	東京都中野区教育委員会生涯学習課と連携し、中野区ことぶき大学の授業3コマ「学びの成果を地域に活かす～若者とともに考える」に受講学生が参加している。1回の参加時間は2時間で、原則として学生は1回以上、最大で3回参加することとしている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	生涯学習演習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	生涯学習論、成人教育学、社会教育学、組織学習論、教師教育論、専門職大学院論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文教育学部(人間社会学科)(3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計19名(男子学生0名 女子学生19名)	授業区分	演習、実習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	最大で20時間を予定
必修・選択の別	選択		
授業目的	生涯学習・社会教育の実践(青少年事業・公民館事業・保健師の活動・教員の授業研究など)の実践記録を読みあい、実践の背後にあるおとなの学びの理論、実践の省察論を検討する。後期には施設・事業を訪問し、質的調査に関わりゼミ論にまとめ		
授業内容	前期: ①中央教育審議会答申素案の検討 ②成人学習論の基本文献を読む 複数の文献から、成人学習者、成人の特性などのキーワードを出しながら、論点をまとめてみる ③生涯学習・社会教育の実践記録を読む 青少年教育事業、公民館・社会教育施設での事業、保健師の学習活動、教師の授業研究活動など 後期: ①参与観察に関する基本文献を読む ②先輩のゼミ論文を読む ③生涯学習・社会教育の施設・事業を参与観察し、ゼミ論にまとめる 高齢者教育の事業、学校と地域との連携事業、学校支援ボランティア事業、地域における日本語ボランティア活動、附属における研究事業など		
教科書	授業時に指示		
授業の工夫点			
授業の評価方法	小論文(レポート)=5割(ゼミ論)、出席=3割、発表=2割		
授業のサポート体制	受講者が後期のフィールド調査の結果をゼミ論文としてまとめる際の指導を適宜(ゼミ以外の時間も含めて)行う。		
学外の関係機関・団体との連携	後期の授業では、文京区立第七中学校の学校ボランティアに学生が1名、江戸川区立二之江第二小学校の学校ボランティアに学生が1名継続的にかかわっている。それぞれ、2時間かける10回を予定している。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	成人学習論特論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	生涯学習論、成人教育学、社会教育学、組織学習論、教師教育論、専門職大学院論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	大学院人間成科学研究科人間発達科学専攻(1・2年次)	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計不明(男子学生0名 女子学生不明)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	社会人や現職者の女性が、(夜間)大学院で学ぶことの意味を、実践の理論、実践の省察、実践研究という観点から考える。前年度に引き続き、社会人女性大学院生向けのアンケート調査について項目を議論し、調査を実施し、分析する。		
授業内容	1オリエンテーション 2自己紹介と大学院での勉学についての思い 3アンケート調査項目について 4ブレ調査について 5アンケート調査の実施 6～8ショーの省察的実践の理論をめぐって(授業内および宇都宮大学、福井大学でのコラボ) 9～12アンケート調査の分析 13アンケート調査の評価 14まとめ		
教科書	ショー『省察的実践とは何か』風書房(2007)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	小論文(レポート)=2割(他大学大学院のプログラムへの参加レポートを含む)、出席=5割、実習成果=3割(調査報告書の作成)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	宇都宮大学、福井大学でのコラボ		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	比較教育特殊講義		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会開発政策	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文教育学部(人間社会科学科)(1・2・3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計31名(男子学生0名 女子学生31名)	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	本講義のテーマは「グローバル化・教育開発・地球市民ー地球社会の担い手を育てる」である。担当教員は社会開発政策、NGO/NPO論、国際理解・開発教育を専門とし、大学で教育・研究に携わっている。また、実践面でも、政府、自治体、NGO/NPO、学校等と協力して、途上国の教育支援および学校現場における国際理解・開発教育に取り組んでいる。本講義では、グローバル化が進展する中で、教育を通じてよりよい地球社会をつくる道、そしてその担い手たる地球市民を育てる道を理論と実践の両面から受講生とともに探っていききたい。		
授業内容	8月8日(金)、9日(土)、11日(月)開講予定 はじめにー本講義の概要と進め方 PART I:教育開発・国際教育協力の諸課題と政策 1.グローバルリゼーション下の貧困・格差問題と教育 2.国際教育協力の潮流 3.教育開発の理論 4.他のグローバル課題と教育開発 5.教育開発とODA・NGOによる国際協力 PART II:地球市民教育ーより良い地球社会の担い手を育てる 1.地球市民教育(開発教育・国際理解教育)の潮流 2.地球市民教育の理論 3.地球市民教育の手法 4.地球市民教育の実践 5.「総合的な学習」と地球市民教育:学校、NGO、政府、自治体の協働 終わりにーまとめと&フィードバック		
教科書	黒田一雄、横関祐見子(2005年)『国際教育開発論』有斐閣。 国際協力機構中部国際センター(2006年)『教室から地球へー開発教育・国際理解教育虎の巻』国際協力出版会。 絵所秀紀編(2007年)『人間の安全保障ー貧困削減の新しい視点』国際協力出版会。 潮木守一編(2008年)『ベトナムにおける初等教育の普遍化政策』明石書店。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	小論文(レポート)=30%発表=30%その他=講義への参加・貢献40%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際協力学		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	開発研究、アフリカ地域研究 （主にタンザニア）	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	文教育学部グローバル文化環 （1・2・3・4年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計不明（男子学生0名 女子学生不明）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	本講義では、国際協力の基本的な概念や仕組み、その背後にある開発アプローチの変遷を、国際機関、政府、NGO等の様々なアクターが担っている役割に注目しながら概説することにより、受講生が国際協力の大枠を把握することを目的とします。また、グローバル化時代において、市民による国際協力がどのような形でありえるのかを共に考えながら、受講生が国際協力への一歩を踏み出す契機となることを目的とします。		
授業内容	<p>講義を中心に授業をすすめますが、ビデオによる事例紹介やゲスト講師の講演などを交えることにより具体的なイメージを膨らまし、様々な形での国際協力への関わり方、とらえ方があることを学べるよう工夫します。</p> <p>I. オリエンテーション(4月18日): グローバル化時代の「国際協力」とは; 授業の趣旨・進め方・評価など</p> <p>II. 国際協力の枠組み、仕組み、アクター</p> <p>1. 「開発」アプローチの変遷</p> <p>2. 様々なアクター: 国際機関、政府、NPO/NGOなど</p> <p>III. セクター別開発: 農村開発、保健、医療、教育など</p> <p>IV. 現代的課題: 5月下旬に開催される「第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)」を取り上げます。</p> <p>V. 私たちにできる国際協力: 青年海外協力隊、国内でのボランティア活動、民際交流、ホワイトバンド、フェアトレード、日々の生活を見直すこと、など</p> <p>VI. 総括と質疑応答</p> <p>【備考】</p> <p>1. NGOスタッフや民間企業でNPO活動を行っている方をゲスト講師としてお招きする予定です。</p>		
教科書	授業中適宜指示します。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	小論文(レポート)=70%,出席=10%,その他=学期中の課題20%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 東京農工大学

授業科目名	NGO・NPO論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育学、科学教育	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	農学部 2年次以上	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計94名（男子学生62名 女子学生32名）	授業区分	講義
単位数	1	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	1998年の特定非営利活動促進法(NPO法)の施行後、1万法人を越える多くのNPO法人が日本の内外で活動している。この授業は、NPO法人を中心としてNGO・NPOの現状や課題を理解するとともに、教育力という視点から社会問題解決の主体としてのNPOの可能性をさぐる。		
授業内容	<p>1. プロローグ: NGO・NPOとは何か〜その歴史と法・制度(朝岡)4/14</p> <p>2. NGO・NPOの現場から(1)体験的NPO論(永石先生)4/21</p> <p>3. 自然保護とNPO(永石先生)4/28</p> <p>4. CSR(企業の社会的責任)とNPO(永石先生)5/12</p> <p>5. NGO・NPOの現場から(2)体験的NPO論(中村先生)5/19</p> <p>6. 防災NPOとまちづくり(中村先生)5/26</p> <p>7. エピローグ: 多様な協働の意味とNPOの未来(朝岡)6/2</p>		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート+出席点		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域パートナーシップ論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	林政学 自然資源管理論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	農学部 2年次以上	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計91名(男子学生59名 女子学生32名)	授業区分	講義
単位数	1	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	地域振興・地域環境保全・地域自然資源管理等において欠かせない諸主体のパートナーシップについて、その現状を把握し、あり方について考えることを目標とする。具体的な講義の内容としては、行政・NGO/NPO・コミュニティ・諸グループ・個人がパートナーシップを組み、地域の諸課題に取り組んでいる国内外の事例を紹介し、それらの課題、問題点を指摘し、地域パートナーシップの望ましいあり方を示唆する。 「NGO/NPO論」と一緒に履修することを強く希望する。		
授業内容	第1回 「地域パートナーシップ論」の授業概要(千賀) 「パートナーシップ」の概念/「地域パートナーシップ」の具体像と類型 第2回 グラウンドワークトラスト(GWT)に見る地域パートナーシップ(千賀) 英国におけるGWTの誕生経緯と制度および事例/日本への伝播と事例「NPO法人GW三島」 第3回 各種のNPOIに見る地域パートナーシップ(千賀) アサザ基金/NPO法人「えがおつなげて」/かみえちご山里ファン倶楽部 第4回 広域パートナーシップにおける各主体間の関係のあり方(1)(土屋) 米国マサチューセッツ州における流域協会・ランドトラスト・各級政府による流域管理 第5回 広域パートナーシップにおける各主体間の関係のあり方(2)(土屋) 世界遺産地域におけるパートナーシップ(知床、白神山地、屋久島) 第6回 公的機関とNPO、コミュニティとの関係のあり方(土屋) 日本のナショナルトラスト運動/赤谷プロジェクト(NACS-J)+関東森林管理局+地域 第7回 NPOの教育力に見る地域パートナーシップの可能性(朝岡) まちづくり・環境保全型NPOのスタッフと仕事/パートナーシップを育てる地域とNPO 第8回 地域パートナーシップの課題と未来〜まとめ(千賀・土屋・朝岡) 3教員+受講生によるまとめの討論		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート+出席点		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	持続可能な開発のための教育(ESD)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期集中授業
担当教員の専門分野	教育学、科学教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	農学部 2年次以上	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計33名(男子学生19名 女子学生14名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development/ESD)の重要性が、2002年の持続可能な開発に関する世界首脳会議(ヨハネスブルク・サミット)で確認され、国連・持続可能な開発のための教育の10年(DESDE/2005～2014年)が各国で取り組まれている。この授業は、ESD概念の背景と基本枠を確認したうえで、自然保護教育のあり方を中心に地域における実践の可能性とその意味について考える。		
授業内容	1. プロローグ: ESDとは何か 2. 自然保護教育の歴史と展開 3. 自然保護運動と地域の学び(1)(2) 4. 自然保護教育の到達点(1)(2) 5. 自然保護教育の展望 6. エピローグ: 持続可能な社会のために		
教科書	小川潔他編著『自然保護教育論』(筑波書房)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業ごとにテキストと当日の授業から簡単な課題を出します。集中講義部分1回+定期開講部分8回の課題で評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 一橋大学

授業科目名	まちづくり(2008夏)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	総合政策	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1～4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計95名(男子学生61名 女子学生34名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	未公表		
授業内容	本年度、本授業はJコースとSコースを設ける。Jコースは授業時間における「まちづくりワークショップ」と授業時間外の「まちづくり現場実践学習」を行う学生が選択する。Sコースは「まちづくり」授業既修者を対象として、授業時間中に実施する「まちづくり交流会」と「まちづくり現場実践学習」を行う学生が選択できるものとする。		
教科書	テキストはない。参考文献は適宜紹介する。		
授業の工夫点	未公表		
授業の評価方法	未公表		
授業のサポート体制	未公表		
学外の関係機関・団体との連携	未公表		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	まちづくり(2008冬)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	総合政策	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1～4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	未確定	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	未公表		
授業内容	本年度から本授業は初修者用Jコースと既修者用Sコースを設けているが、今学期(2008年度冬学期)はコースを統合して授業を行う。今学期は、履修学生全員が3名あるいは5名でチームを編成し、チームごとにまちづくり活動の企画、実行、評価(PLAN→DO→SEE)に取り組む。		
教科書	テキストはない。参考文献は適宜紹介する。		
授業の工夫点	未公表		
授業の評価方法	未公表		
授業のサポート体制	未公表		
学外の関係機関・団体との連携	未公表		
今後の授業の継続	未定		

○ 富山大学

授業科目名	ボランティア体験		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	分析化学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間発達科学部3年次	授業のレベル	その他(実習先による)
平成20年度履修者数	計4名(男子学生2名 女子学生2名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	1単位につき5時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティア活動を体験し、その理解を深めること。		
授業内容	自治体・NPO・各種団体が募集するボランティア活動を行い、活動日誌、報告書を提出する。		
教科書	なし		
授業の工夫点	担当者が活動内容を事前に協議し、授業として相応しいものについてのみ履修を認める。		
授業の評価方法	日誌、報告書及び受け入れ先の報告書を基に担当教員が評価。		
授業のサポート体制	学生がみつめてきたボランティア募集についても同様に対応する。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア概論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際政治学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	教育学部全学年次	授業のレベル	その他（実習先による）
平成20年度履修者数	計1名（男子学生0名 女子学生1名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	15時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	本講義では、ボランティア活動が日常化している現在社会の動向をふまえて、地球的課題からそうした活動が不可避となっていることを論じるとともに、その心構えや基本的な考え方、さらにはその社会的意義について、実際のボランティア体験を通して考える。		
授業内容	本授業は、初回のガイダンスのみ講義を行う。前学期期間中に、各自がそれぞれ自発的な活動を行い、活動に対する各種ボランティア団体からの活動実施認定書あるいはボランティア活動報告をレポートとして学期末に提出する。		
教科書	「NPO/NGOと国際協力」(西川潤、佐藤幸男 編著)		
授業の工夫点	なし		
授業の評価方法	レポートと活動内容を考慮して総合的に判断を行う。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	早稲田大学平山郁夫ボランティアセンターと連携事業協定を締結している。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティアの世界		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	スポーツ社会史、水辺野外運動、情報処理、ソフトウェア工学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	芸術文化学部2・3年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計17名（男子学生5名 女子学生12名）	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	14時間
必修・選択の別	選択必修（文化マネジメントコース） 選択（その他コース）		
授業目的	ボランティア活動に関わる様々な人と語り合い、実践を共有することで、ボランティアの楽しみ・喜び・苦悩を知り、自らのボランティア体験に歩み出すきっかけをつくる。		
授業内容	1. ボランティア活動概論1 2. ボランティア活動概論2 3. 私のボランティア論 1(ゲスト講師) 4. 私のボランティア論 2(ゲスト講師) 5. 私のボランティア論 3(ゲスト講師) 6. 私のボランティア論 4(ゲスト講師) 7. 私のボランティア論 5(ゲスト講師) 8. ボランティア視察 9. ボランティア視察 10. ボランティア視察 11. ボランティア実習 12. ボランティア実習 13. ボランティア実習 14. ボランティア実習 15. 活動発表、まとめ		
教科書	毎回の授業で配布		
授業の工夫点	ボランティア実践者を招いての講義を行っている。		
授業の評価方法	出席を重視します70%、毎回のレポート 30%		
授業のサポート体制	複数教員体制		
学外の関係機関・団体との連携	学外の団体の支援を得ている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 福井大学

授業科目名	災害ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員 学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	防災工学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	教育地域科学部・工学部1・2・3年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計101名(男子学生79名 女子学生22名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	大学・社会において身につけた専門知識等を、ボランティアに社会に提供する機会を、今後増えることがあろう。特に災害が起きた際には様々な形でかかわる可能性がある。災害という特殊な環境においても適切な心構えのもと、各人が専門性を発揮することができるよう、養成する講義である。		
授業内容	<p>〈災害に関する知識〉</p> <p>1ガイダンス 2災害のメカニズム 3過去の災害例 4災害の備えとまちづくり 5災害と社会システム(1) 6災害と社会システム(2) 7災害サイクルと疾病構造 8災害時医療活動、基本的心肺蘇生法、AED 9災害時の心理回復プロセス、災害とこころのケア 〈災害ボランティアに関する基礎知識〉</p> <p>10ボランティアとは 11組織論・国内外の制度等(NPOを含む) 12災害ボランティア活動時の基本的な心構え 13ボランティアコーディネーターの役割、ボランティアセンターの役割と機能 14要援護者への対応 15過去の活動例(海外での様子)</p>		
教科書	なし 参考書は指示する。		
授業の工夫点	災害現場での様子を、現場での体験談を交えながら、スライドで紹介をすることで、より理解を深められるような方法をとる。		
授業の評価方法	演習による。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	本学非常勤講師 松森氏(NPO法人ふくい災害ボランティアネット)		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	学校ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	教育地域科学部2年次	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計3名(男子学生1名 女子学生2名)	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	学生の計画内容による
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>1 ボランティアに関して概要、対象分野、基本的な考え方を理解する。</p> <p>2 具体的な事例を通して、ボランティア実践の基本的なあり方を学ぶ。</p> <p>3 実際にボランティア活動に参加して、ボランティアの方法、あり方を学ぶ。</p> <p>4 実際にボランティアの内容を企画し、実践し、結果を分析する。</p>		
授業内容	<p>〈ボランティア概論〉</p> <p>1 自らのボランティア体験を振り返る。2 自らのボランティア観を発表するとともに、他者のボランティア観を聞き、比較する。3 ボランティア活動の理念や歴史的な発展過程を理解する。4 ボランティア関係の法律や制度、関係機関について概論を理解する。</p> <p>〈ボランティア実践論〉</p> <p>5 「児童や障害のある人、高齢者を対象にした福祉ボランティア活動」について理解する。6 「国内外の国際的な問題や環境問題を対象にしたボランティア活動」について理解する。7 「趣味(音楽・スポーツなど)を生かしたボランティア活動」について理解する。8 身近な地域で展開されているボランティア活動の種類や内容について理解する。9 災害予防や復興支援に関するボランティア活動の種類や内容について理解する。10 ボランティア活動とNPO・NGOの概念や法的根拠、内容やちがいについて理解する。11 学校や企業で展開されているボランティア活動の内容や方法、領域について理解する。</p> <p>〈ボランティア活動の企画・開発・運営〉</p> <p>12 地域に必要なボランティア活動を企画・開発し、実施に至るまでの過程をシミュレーションできる力をつける。13 地域で求められているボランティア活動に参加し、ボランティア活動の実践力を身につける。14 体験を踏まえて、ボランティアの必要性・目的・意義などについて、自分なりの考えを第三者に伝えられる力をつける。</p>		
教科書	授業中に適宜紹介する。		
授業の工夫点	1 本やインターネットなどを用いて、ボランティア活動の概念・対象領域を調べ発表させる。2 地域のボランティア活動実践者に、自らの体験を語ってもらい、ボランティアの目的や意義について理解させる。3 個人でまたは仲間と協力して、児童を対象にしたボランティア活動を企画・実施し、実施後の評価を行う。4 ボランティアの目的や社会的な位置づけについて、学生とお互に意見交換し、自分なりのボランティア観を持たせる。		
授業の評価方法	<p>1 出席態度(50%)</p> <p>2 ボランティアの企画内容(20%)</p> <p>3 実際にボランティア活動に参加してレポートを提出する。(30%)</p>		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域ボランティア学習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	教育地域科学部2年次	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計1名（男子学生0名 女子学生1名）	授業区分	演習、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	45時間
必修・選択の別	選択		
授業目的			
授業内容	地域実践科目を既に2単位以上修得済の者で、自分の専攻分野に近い内容でボランティア計画を立案し、所属するコースの地域ボランティア学習担当教員と連絡・調整のうえ、ボランティアの実施にあたる。ボランティアを終了した学生は、速やかに実施報告書を作成し、担当教員に提出する。		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	ボランティア実施前のオリエンテーション、計画に基づくボランティア（事前学習、自習時間を含む）、ボランティア終了後に提出される実施報告書等により成績を評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

○ 静岡大学

授業科目名	NPO・ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員 学外教員(※複数の教員で実施)	授業期間	半期
担当教員の専門分野	主としてボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	共通科目	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数		ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	近年、日本でも注目されるようになったボランティア活動やNPO法人について学ぶ。		
授業内容	1 はじめに 2 NPOとボランティア活動 3 ボランティア活動の意義 4 ボランティア活動の現場から(1) 5 ボランティア活動の現場から(2) 6 ボランティア活動の現場から(3) 7 NPO活動の意義 8 NPO活動の全体像 9 NPOと企業の社会貢献 10 NPOと行政の協働 11 地域社会とNPO(1) 12 地域社会とNPO(2) 13 地域社会とNPO(3) 14 NPOとこれからの日本社会 15 まとめ		
教科書			
授業の工夫点	市民開放授業の対象となっている。		
授業の評価方法	レポート(40%)、期末試験(60%)の双方で成績を評価します。		
授業のサポート体制	オフィスアワー		
学外の関係機関・団体との連携	静岡県ボランティア協会		
今後の授業の継続			

授業科目名		ボランティア活動論	
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会教育	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	教育学部3年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計15名（男子学生6名 女子学生9名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	4・5時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動についてのイメージを上げるとともに「自立した市民」としての基礎をやしなう。		
授業内容	1 オリエンテーション 2 ボランティア活動へのイメージ 3 阪神大震災とボランティア活動(1) 4 阪神大震災とボランティア活動(2) 5 数字で見るボランティア活動(1) 6 数字で見るボランティア活動(2) 7 事例から見るボランティア活動(1) 8 事例から見るボランティア活動(2) 9 ボランティア活動の情報はどこにある？ 10 体験者が語るボランティア活動 11 どうしよう、こんなとき(1) 12 どうしよう、こんなとき(2) 13 「私」とボランティア活動(1) 14 「私」とボランティア活動(2) 15 まとめ		
教科書			
授業の工夫点	ボランティア活動につながる体験をし、振り返る。		
授業の評価方法	出席、レポート、参加状況		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		NPO概論	
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会教育	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	教育学部3年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計10名（男子学生1名 女子学生9名）	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	NPO法人での活動経験を振り返り、NPO法人活動の意義についてまとめあげる。		
授業内容	1 オリエンテーション 2 NPO法人の組織と運営 3 NPO法人の活動に見る「学び」のあり方 4 NPO法人の活動に見る「学び」の支援 5 以下、社会教育実習Ⅰの進行状況に応じて計画していく。		
教科書			
授業の工夫点	NPO法人で実際に活動しそこから学ぶ。		
授業の評価方法	出席、レポート、参加状況		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		日本語教育実習	
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	年少者日本語教育・異文化教育	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	教育学部3年	授業のレベル	その他(N/A)
平成20年度履修者数	計10名（男子学生2名 女子学生8名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	2～3時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	前期開講の日本語教授法Ⅱで得た知見を生かし、実際に学校教育現場において外国人児童生徒等に対する支援活動に従事する。この授業時間帯では、各支援学生が活動報告を行い、支援の目標・内容・方法等に関するディスカッションを全員で進めながら囲碁の活動支援活動のあり方について考えていく。		
授業内容	1 オリエンテーション 2 支援活動報告・ディスカッション・授業案作成・教材作成他(以下同様)		
教科書	『子どもといっしょに！日本語授業おもしろネタ週』凡人社		
授業の工夫点	演習形式をとり、ビデオ資料や記事、文献、教科書・教材などを材料として学生間の議論が中心となるように授業を進める。		
授業の評価方法	出席、授業や支援活動に対する参加姿勢・課題の達成度・プレゼンテーションやレポートの内容等をもとに、総合的に評価する。		
授業のサポート体制	N/A		
学外の関係機関・団体との連携	静岡市教育委員会		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	生涯スポーツ指導演習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	保健体育(生涯スポーツ)	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	教育学部4年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数		授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	10時間
必修・選択の別	必修		
授業目的	生涯スポーツの集大成として、生涯スポーツの理解と教室の立案・実習		
授業内容	1 ガイダンスと講義 2 模擬授業のための概要発表 3～8 模擬授業の実施(1)～(6) 9 指導現場における見学研修および指導補助に関する説明 10～14 指導現場における見学研修および指導補助 15 討論会およびまとめ		
教科書			
授業の工夫点	学生自らスポーツ教室を立案させる。		
授業の評価方法	社会体育スポーツの立案、演習、体験レポート		
授業のサポート体制	教員が4名でサポートする。		
学外の関係機関・団体との連携	ピュアスポーツクラブ 大井川町社会教育課		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	福祉情報システム論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	情報	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	情報学部3年	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計8名(男子学生2名 女子学生6名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	人間は一人では生きていけない。互いに助け合い、協力しあってはじめて生きていけるのであって、それ故にその仕組＝社会を形成してきたのである。社会は人間の協力を基礎としており、そのことによって人類は繁栄してきたといっても過言ではなからう。もちろん、協力の仕方にはさまざまにあるが、より基本的なものは相互扶助であり、こうした思想は歴史的に形成されてきた。本授業ではこうした相互扶助思想の形成を理解するとともに、その具体的な現れとしてボランティア活動やNPOなど非営利組織の活動を学び、社会的弱者の発生とその救済を通じて社会を維持していくさまざまな試みを見ていきたい。併せて、将来の社会をどのように創っていくかを考える。		
授業内容	1 人間と人間社会 2 ボランティアの理論と歴史 ・ボランティア思想はどのように生まれ、どのよう変わってきたか ・ボランティア活動の性格・社会的役割 3 現代社会と社会問題 ・さまざまな社会的弱者の存在 4 解決への方法 ・社会保障制度 ・福祉国家論 5 非営利＝協同の実践 ・NPO・NGO ・さまざまな非営利組織 6 新しい社会への展望		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	評価は試験によって行う。毎回小レポートを提出してもらうので、それも考慮する。出席は当然のことである。試験8割、小レポート2割。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	組織マネジメント		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	情報	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	情報学部3年	授業のレベル	
平成20年度履修者数	未定	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	現実の組織では組織を運営していくために組織メンバの人間活動として活動が行われている。この講義では、企業組織とNPO組織について実際の現場で行われているマネジメント活動について解説する。		
授業内容	1 環境変化と戦略の特色づけ 2 戦略のフレームワークの生かし方 3 経営戦略のフレームワークその1 4 事業戦略のフレームワークその2 5 ビジネスモデルの変革事例 6 事業戦略とマーケティング戦略 その1 7 事業戦略とマーケティング戦略 その2 8 マーケティング戦略のフレームワーク 9 エリア戦略の考え方 10 ソリューション営業 11 NPO原論 12 NPOマネジメント その1 13 NPOマネジメント その2 14 ケース研究 その1 15 ケース研究 その2		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポートを課し、その採点で行う。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	NPO・NGO論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	情報	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	情報学部3年	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計24名（男子学生12名 女子学生12名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	NGO・NPOによる地域における実践を紹介するとともに、国民的枠組みの内とそれを越えるNGO諸団体やその活動を紹介します。講義の中でこのような活動に必要な自由な意見交換を行うこと。		
授業内容	このコースは、3つの部分に分けます。まず、静岡を中心とした実践例を報告します。次に日本におけるNGO・NPO活動について、講義をおこないます。最後に、グラス・ルーツによるガバナンス(国家や国際関係、多国籍企業を下から統治する)を実現しつつある国民的枠組みを超える諸活動について、講義を行います。 1 イントロダクション 2 静岡市におけるNGO活動の紹介 3 静岡市におけるNGO活動の紹介 4 静岡市におけるNGO活動の紹介 5 静岡市におけるNGO活動の紹介 6 日本におけるNGO・NPO活動 7 日本におけるNGO・NPO活動 8 個人で国境を越えるNGO活動 9 地域で国境を越えるNGO活動 10 地域で国境を越えるNGO活動 11 NGO・NPOと国家との関係 I 12 NGO・NPOと国家との関係 II 13 国際秩序とNGO 14 NGO・NPOの課題		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	担当教員の講義に関するレポートを総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

○ 名古屋大学

授業科目名	国際理解と地域		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	国際理解教育論、教師教育論、教育実践論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	国際開発研究科（研究科共通科目、博士課程前期課程1・2年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計14名（男子学生3名 女子学生11名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	国際理解教育の概念、目標と内容、学習方法、実践論などについて考察する。そして、これまでの国際理解教育の実践研究について、いくつかを取り上げて分析・検討する。長年にわたって学校現場、社会教育の場で国際理解教育を推進してきた経験を交えながら、国際理解教育を理論と実践の両面から論じる。また、国際理解教育に関するスキルの内容も重視する。さらに、外部講師として地域の小中学校、高等学校の国際理解教育の授業に協力していく場合、どのような実践計画を立てるべきかを検討し、その具体的な在り方を求めてワークショップを行う。 以上のような学習活動を通して、国際理解教育に対する総合的な理解を図ると共に、実践的な力の基礎を培う。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション 2 国際化の進展と日本人の精神性 3 国際理解教育の概念と人間理解の実践 4 文化理解の実践・世界の現実理解の実践 5 コミュニケーション能力の育成 6 ユネスコの国際理解教育と「日本型国際理解教育」 7 開発教育 8 地球時代の国際理解教育 -多文化共生教育、ESD、世界遺産教育- 9 学校英語活動と異文化コミュニケーション 10 国際理解教育の実践研究の分析① 11 国際理解教育の実践研究の分析② 12 国際理解教育の実践研究の分析③ 13 ワークショップの準備 14 ワークショップ① -地域の団体と学校との連携- 15 ワークショップ② -地域の団体と学校との連携- 		
教科書	多田孝志著『学校における国際理解教育』東洋館出版社 多田孝志著『対話力を育てる』教育出版		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への出席・参加度とレポートとを総合評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	NGO論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会開発政策、NGO・NPOマネジメント、経済発展論、教育社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	国際開発研究科	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	未定 後期開講	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	This course examines the roles of NGOs/Civil Society in development and the challenges they encounter, their relationships with other stakeholder s(states, inter-governmental organisations, beneficiaries),the internal organisational challenges as well as the changing policy contexts in which NGOs operate. The professor is a very active as an executive director of Nagoya NGO Centre, a leading network NGO in Japan. As well representing Japanese NGOs, He is working with governmental organisations, such as MOFA and JICA.		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	環境行動論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	環境政策論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	環境学研究科 (社会環境学専攻博士前期課程1・2年次)	授業のレベル	その他(環境学研究科の教育目標の実現のため、環境学共通科目として1)体系理解科目、2)各分野の専門科目として、I類:講義、II類:セミナー、III類:実習等より構成されている。 「環境行動論」は、社会環境学専攻のI類科目として位置づけられている。I類科目の履修により、問題解決に必要な基礎と応用の知識と手法を身につけることを目標としている。))
平成20年度履修者数	計5名(男子学生2名 女子学生3名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	地域からグローバルなレベルまで多様な環境問題についての認知・態度・行動を明らかにし、あわせて環境保全にたいしては心理学はどのように貢献できるかを考える。		
授業内容	1. 環境問題の社会的ジレンマ 2. 環境配慮動を理解するための理論 3. 環境配慮行動を促進するためのアプローチ 4. 環境の現場におけるアクションリサーチ 5. 環境計画への市民参加と合意形成		
教科書	廣瀬幸雄(編)「環境行動の社会心理学」(北大路書房)		
授業の工夫点	授業では、環境問題の解決に心理学がどのような貢献ができるかを、環境ボランティアや境NPOによる様々な環境問題への取組事例などとともに、アクションリサーチ、フィールド実験、疑似実験、社会調査等により考察する。		
授業の評価方法	講義への出席とレポートにより成績を評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 北陸先端科学技術大学院大学

授業科目名	地域再生システム論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員 学外教員(※複数の教員で実施)	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	知識科学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学生対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計9名(男子学生8名 女子学生1名)	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	本講義においては、中央・地方行政、民間企業、NPO、地域的なコミュニティ、住民など地域再生に関わる各主体が、どのような手法を用い、土のように協働することによって、効果的な地域再生が行われうるのか、知識科学の各種手法をも用いて分析・検討を行っていく。		
授業内容	石川県をはじめ北陸各地における地域再生事例や、科学技術を用いた地域再生事例について総論講義を実施する。その後、地域再生を担う人材論について、具体的な地域再生事例を中心に講義を行い、実践論では、実際に参加する受講生に対してグループワークを実施し、講義で学んだことを踏まえて地域再生計画を策定し発表していただく。		
教科書			
授業の工夫点	地域再生の事例について、現場の関係者を交えて、地域再生の実践に参画しながら、現実の地域再生過程について、実践的な知見の取得を目指す。又、講義後にグループワークを実施し、講義で学んだことを踏まえて地域再生計画を策定する。		
授業の評価方法	課題提出		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 京都工芸繊維大学

授業科目名		人権教育特別講義	
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	工芸科学部3年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計96名(男子学生76名 女子学生20名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	この講義では、「人権・人権教育」について基本的な考え方と、現代社会の具体的な人権問題やこれにかかわるボランティア・NGOなどの活動について理解することを目的とします。「人権」は決して高邁な理想や法律のなかにあるのではなく、日常の暮らしや人びとの営みの中で発見し育んでいくものと考えます。この授業を通じて皆さんが様々な「人権問題」に関心を持つとともに、これから積極的に市民として社会とかがわっていききっかけをつかんでほしいと思います。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション:人権教育とは何か? 人権・人権教育の基本的な概念、多様なアプローチと課題、市民参加・ボランティアの役割。 2. 国際人権と国連・NGOの活動(ボランティア①) 「世界人権宣言」への歩み、国際NGO・ボランティアの役割、「シャブラニール＝市民による海外協力の会」の活動。 3. 子どもの権利と「子育て」支援(ボランティア②) 「子どもの権利条約」の思想、子どもの参加と権利保障、「ゆう杉並(杉並区児童青少年センター)」の活動。 4. 障害者と人権①:障害者理解と「障害平等研修」(ボランティア③) 「障害学」と障害の「社会モデル」について、介助ボランティアの役割と障害者理解教育の必要性。 「クリエイティブハウス・パンジー」の活動。 5. 障害者と人権②:障害者の「自立生活運動」について 地域生活と「当事者主体」の考え方、「ピア・カウンセリング」について。各地の障害者「自立生活センター」の活動紹介。 6. 障害者と人権③:精神障害者の地域生活 精神障害者の「脱施設化」と地域生活の課題。地域での共生。「浦河べてるの家」の活動。 7. ジェンダーと人権①:「男女共同参画社会」のための教育 教育と生活の中の「ジェンダー」(社会的性差)の見直し、女性のエンパワメントのための取組み、多様な家族のあり方について。 8. ジェンダーと人権②:「性の多様性教育」に向けて セクシュアル・マイノリティの権利(性自認と性的指向)、トランスジェンダー・「性同一性障害」の人権と教育、「性の多様性教育」の試み。 9. 在日外国人と人権①:在日コリアンと多文化共生のまちづくり 在日コリアンの人権と文化、学校教育・地域における「多文化教育」の取組み、「川崎市ふれあい館」の活動。 10. 在日外国人と人権②:「ニューカマー」と日本語ボランティア 日本に暮らす外国人のアイデンティティと人権保障、学校・地域での課題、「日本語ボランティア」の活動。 11. 部落問題と人権①:「部落を語る若者たち」とアイデンティティ 部落解放運動と「同和・人権教育」の歩み、新たなアイデンティティの模索、「人権NPOダッシュ」の活動。 12. 部落問題と人権②:共に生きるまちづくりに向けて 「特措法」以降の地域での共生と住民によるまちづくり、「大阪人権博物館」・「太鼓集団・怒」の活動。 13. 日本のマイノリティと人権①:アイヌ民族の歴史と文化から見た人権 アイヌ民族の歴史と文化、「民族復権」の試み、萱野茂とアイヌ語教室・「アイヌ民族博物館」の活動。 14. 日本のマイノリティと人権②:沖縄の歴史と文化から見た人権 沖縄の歴史と文化の独自性、沖縄戦・基地問題と「ウチナンチュ」アイデンティティ、平和と自立への活動。 		
教科書	指定なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	平常点(毎回の出席カード)40%、期末レポート(授業内容に関する)60%。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	特別活動論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	その他(教職科目)
開設学部(学科)及び年次	工芸科学部1年次	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計75名(男子学生55名 女子学生20名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	特別活動の意義と概要を理解し、指導の基本的な考え方と具体的な指導のあり方を考察する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学校教育と特別活動 生徒の成長、発達における教育の役割と職業としての教職の特性を考えることを通して、特別活動の意義やねらいを教育全体の営みの中で理解する。 2. 特別活動の魅力 学校教育活動において、特別活動が担ってきた働きや機能について、自らの被教育体験を振り返りながら考察する。 3. 子どもの現状と特別活動 現在の子どもの生活の実態や心の成長のありようを踏まえ、これからの学校教育のあり方や果たすべき役割について、特別活動の側面から考察する。 4. 特別活動の歴史 明治以降の教育の変遷を特別活動に焦点をあてて振り返る。特に、特別活動の教育課程上の位置づけと実体的機能について考察する。 5. 特別活動の目標と内容 学習指導要領をもとに、特別活動の目標と内容を概観する。 6. 学級活動(1) 「学級」という集団の教育的機能について考察する。 7. 学級活動(2) 「学級(集団)づくり」について、その基本的な考え方と学級集団の捉え方について考察する。 8. 学級活動(3) 「学級(集団)づくり」を行う際の、具体的な方法について考察する。 9. 生徒会活動(1) 自治活動としての「生徒会」について、自治に関する基本的な考え方を整理するとともに、自治能力を育てる指導のあり方について基本的な考え方を考察する。 10. 生徒会活動(2) 自治能力を育てるための「生徒会」の具体的な活動の進め方について、学級活動、委員会活動、本部役員会の活動の3つのレベルから考察する。 11. 学校行事(1) 「儀式的行事」「学芸的行事」「体育的行事」に焦点を当て、これらの行事の意義と具体的指導のポイントについて考察する。 12. 学校行事(2) 「宿泊行事」をとりあげ、その意義と実際の運営のあり方について考察する。 13. クラブ・部活動 クラブ・部活動の教育的意義と今日的課題について考察する。また、顧問としての指導のあり方について考察する。 14. ボランティア活動と今後の特別活動 今後の特別活動のあり方について、ボランティアを具体的な事例として取り上げ考察する。 		
教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省「中学校学習指導要領解説 特別活動編」(ぎょうせい) ・文部省「高等学校学習指導要領解説 特別活動編」(ぎょうせい) 		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席点(40%)、小レポート(10%)、期末課題レポート(50%)で評価する。課題レポート未提出者、欠席率が1/3を越えた者は単位認定の対象としない。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 大阪大学

授業科目名	国際ボランティア学		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	集中講義
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間科学部（人間科学科3・4年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計14名（男子学生8名 女子学生6名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	途上国における社会開発協力について、研究と実践の両方を視野に入れながら、将来の「実践する研究者」や「研究する実践者」の輩出に貢献することを目指す。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. はじめに 2. アフガニスタンからみた国際協力～人道支援、平和構築、開発援助 3. 途上国における「貧困」と人間開発のための国際協力のあり方 4. 国際社会の掲げる開発目標～国連ミレニアム宣言を中心としたパートナーシップ 5. 国際保健の分野における開発協力～ポリオ、マラリア 6. 国際保健の分野における開発協力～HIV/エイズなど 7. 「万人のための教育」へ向けた国際教育開発～ジヨムティエンからダカールまで 8. 女子教育 9. 健康と教育 10. 社会的「弱者」の保護 11. 社会開発と人権 12. 開発における人権の主流化 13. 「人間の安全保障」～エンパワーメントと保護の視点から 14. おわりに 		
教科書	「テキスト社会開発」佐藤寛・野上裕生編著 「生活と開発」シリーズ国際開発3巻」佐藤寛・青山温子編著		
授業の工夫点			
授業の評価方法	論点整理と議論への参加（30%）、筆記試験（50%）、出席（20%） （2日目からは、出席前に必読文献をあらかじめ読み、論点を整理しておくこと。時限ごとの必読文献の論点をA4用紙1枚に書き、授業開始時に提出すること。）		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティアの集団力学		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間科学部（人間科学科2・3・4年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計34名（男子学生19名 女子学生15名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティアに関する研究は、単なる現場の出来事の整理に終わってはならない。周到な理論的準備とそれに伴う方法論の整備が必須である。研究者としてボランティア活動の現場に立つとはどういうことか。理論的言説を吐き、現場の人々との協働的実践を織りなすとはどういう事態をさすのか。本講義では、グループ・ダイナミックスの立場から、ボランティア研究における理論と方法について述べる。受講生には基本的な文献の多読を課す。		
授業内容	I 導入：ボランティアとは？ II グループ・ダイナミックスの理論的基盤 科学の分類 メタ理論 理論・方法・実践・成果の位置づけ 基礎理論：社会学的身体論・活動理論 理論的展開：対話・記憶・動機・有用性などをキーワードにボランティア研究への示唆 III グループ・ダイナミックスの方法的基盤 量的方法と質的方法 研究における2つのモード 参与観察の流れ ボランティア研究への示唆 III グループ・ダイナミックス研究の蓄積 古典的研究：アクションリサーチ 実証的研究：認知革命の影響 グループ・ダイナミックス研究：協働的実践 IV ボランティアに関する理論的研究の展開 グループ・ダイナミックスの射程 デザイン科学へ		
教科書	「ボランティアの知」渥美公秀著 「コミュニティのグループ・ダイナミックス」杉万俊夫編著		
授業の工夫点			
授業の評価方法	文献レポート（50%）と最終レポート（50%）によって行う		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		災害ボランティア論	
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間科学部(人間科学科3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計40名(男子学生16名 女子学生24名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティア元年とまで言われた阪神・淡路大震災から13年が経過し、災害時のボランティア活動は新奇な出来事ではなくなってきた。本講義では、災害ボランティア活動の現場を災害サイクルの各ステージに位置づけて、できるだけ詳細に紹介する。ただし、それぞれの事例に理論的な解釈を施す。研究と単なる現場報告との違いを実感してもらいたい。		
授業内容	I 災害ボランティア活動への導入 災害ボランティア活動の13年: KOBEから中越へ、そして II 災害ボランティア研究への導入 これまでの蓄積 研究者として現場に立つということ グループ・ダイナミックスの基本 III 事例: 様々な協働的实践(括弧内は特に注目する事例) 0 災害サイクル 1 救急救命活動(阪神・淡路大震災) 2 緊急救援活動(阪神・淡路大震災・能登半島地震・台湾集集大地震) 3 復旧活動(中越沖地震・イラン南東部地震) 4 復興活動(新潟県中越地震・台湾集集大地震) 5 防災活動(ぼうさい探検隊・いざ!カエルキャンプ・防災ゲーム) 6 隣接領域との協働(障害学・福祉・地域教育・まちづくり・土木計画学等) 7 災害NPOのネットワーク(智恵のひろば) IV まとめ 1 減災に向けた研究と理論 2 協働的实践を発展させる枠組み		
教科書	「ボランティアの知、実践としてのボランティア研究」 渥美公秀著 「地震イツモノート」 渥美公秀監修		
授業の工夫点			
授業の評価方法	随時、Short Report を課す(50%)。最終日に試験を行う(50%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		ボランティア社会論	
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間科学部(人間科学科3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計32名(男子学生8名 女子学生24名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	福祉社会とは、人々が健やかで安定した文化的生活を保障されるばかりでなく、それを市民的な権利として、さらに自発的に積極的に高めてゆくような社会のあり方をいう。本講義は、福祉社会を成り立たせる基盤として、市民の側からの自発的な取り組みが活発に展開されるための条件について迫ることを目的としている。		
授業内容	1. 福祉とは何か 2. 社会福祉実践とは何か 3. ソーシャルワークの体系と展開過程 4. コミュニティと地域福祉 5. 地域福祉の源流 6. 社会福祉政策の歴史的展開と地域福祉 7. 地域福祉と自治 8. 地域福祉とコミュニティワーク 9. 英国コミュニティケアの動向 10. コミュニティソーシャルワークの展望 11. 地縁組織と地域福祉 12. 社会福祉協議会と地域福祉 13. NPOと地域福祉 14. 地域福祉における公私関係 15. まとめ		
教科書	特に指定しない。テーマに合わせて適宜指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席 40%、レポート60%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティアネットワーク論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	集中講義
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間科学部(人間科学科2・3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計17名(男子学生9名 女子学生8名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	EFA第5目標、MDG第3目標で取り上げられている教育におけるジェンダー平等の意味と目的を的確に理解し、その開発における意義を理論・研究、また実践の両面から明らかにする。ジェンダーの視点をもつ国際教育協力実践者、研究者の人材養成に貢献する。		
授業内容	<p>教育開発とジェンダー、EFA第5目標教育におけるジェンダー平等と女子教育に関する諸課題について講義とともにグループワーク、討議を通してより深い理解とロジカルな問題解決の方策を具体的に学ぶ。カヴァーする課題は下記の通り:</p> <p>(1) 開発とジェンダーのパラダイムシフト:『WIDからGADへ』、『援助から協力へ』</p> <p>(2) 教育と開発:EFA運動:人権主義と経済効率主義</p> <p>(3) 教育におけるジェンダー平等—</p> <p>a) Equality, equity, parity、主流化、エンパワーメント等の定義と実践的理解</p> <p>b) EFAやMDGのジェンダー平等目標とその戦略</p> <p>c) 女子・女性教育の開発への貢献</p> <p>d) ジェンダー視点の導入</p> <p>(4) 開発途上国のジェンダー平等教育政策の課題:ネパールの女子教育普及政策執行の問題点</p> <p>(5) EFA Fast Track Initiative ドナー調整、セクターワイドアプローチ</p> <p>(6) 教育におけるジェンダー平等の アセスメント、評価</p>		
教科書	UNESCO, "EFA Global Monitoring Report 2003/4: "Gender and Education for All: The Leap to Equality" Summary Report, UNESCO Publishing, Paris, 2003		
授業の工夫点			
授業の評価方法	講義での討論とグループワークへの積極的な参加、レポート、出席		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア学演習I		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間科学部(人間科学科3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計13名(男子学生5名 女子学生8名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>(1) ボランティア人間科学講座で行われている研究の基礎となる文献を英語で精読できる力をつける。</p> <p>(2) 決められた時間内で効果的にプレゼンテーションを行う技術を体得する。</p> <p>(3) 卒業研究に向け、他者の発表も聞きながら、自分の研究テーマを明確にしていく。</p>		
授業内容	<p>ボランティア人間科学講座で行われている研究の基礎となる英語文献を購読する。</p> <p>受講生はボランティア人間科学講座各研究分野から提出された「基礎文献リスト」等の中から文献を選び、精読した上で、ポイントを発表し、議論に参加する。</p> <p>発表に際しては、プレゼンテーションソフトウェアの使用を課し、限られた時間内で要点を伝えるトレーニングを行う。また授業中には、各発表に対して、活発な議論が求められる。</p>		
教科書	「基礎文献リスト(英語文献)」を配布する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	<p>最終レポートは、「基礎文献リスト」の中から、授業で採り上げることができなかった文献をさらに一つ選び、精読の上、プレゼンテーションソフトウェアを使用して要点を整理し、そのファイルを提出する。</p> <p>また出席点を重視することはもちろん、時間中に行われるプレゼンテーションおよび議論へ参加状況も評価の対象となる。(プレゼンテーション40%、最終レポート40%、出席および議論への参加20%)</p>		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア学演習II		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間科学部（人間科学科3・4年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計14名（男子学生5名 女子学生9名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	(1) 卒業研究における各自研究テーマについて、基礎的な知識を取得する。 (2) 個人の研究発表における資料の作成方法を身につける。 (3) 他者の発表を聞いて、学術的な視点から議論できる力を身につける。		
授業内容	各研究分野の指導教員のもとでゼミ形式で行い、授業内容は各指導教員ごとに計画される。 ※ 毎年5月に3回生に対して、研究テーマに関するアンケートを実施している。指導教員はこの内容を元に6月中旬頃に決定する。（留学中の学生、特別な事情のある学生については、別途対応する。）		
教科書	各指導教員により、適宜、指示する。		
授業の工夫点	-		
授業の評価方法	課題発表等、平常点による評価を行う。（課題発表50%、出席・議論への参加50%）		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア学実験実習I		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間科学部（人間科学科2・3・4年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計20名（男子学生10名 女子学生10名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	(1) ボランティア人間科学の入門コースとして、様々なボランティア活動、市民活動の実際を学ぶ。 (2) 現地調査におけるルールやマナーを身につける。 (3) 様々な分野の現地訪問を通じて、ボランティア人間科学講座における自分の研究テーマを模索する。		
授業内容	ボランティア人間科学講座では、国内や海外における現場の活動を重視し、アカデミックな理論とフィールドにおける実践を有機的に統合することにより、人びとの生活に直結した研究を目指している。 主に2回生を対象とする本授業は、ボランティア人間科学の入門編と位置づけ、各教員の研究フィールドを教員ともに訪問する。それぞれの活動分野における現状や課題を、現場の第一線で活躍する人たちから直接教えていただくという「学び」の場である。また最終回では、グループごとに各訪問内容をまとめ、プレゼンテーションを行い、議論を深める。 訪問先は年度によって異なるが、いままでの主な訪問先は以下の通りである。 ・JICA 大阪国際センター（吹田市） ・社団法人日本民間国際協力会（NICCO） ・社会福祉法人こころの家族「特別養護老人ホーム故郷の家」（神戸市） ・豊中市社会福祉協議会ボランティアセンター（豊中市） ・身体障害者養護施設ともがき（茨木市） ・人と防災未来センター（神戸市） ・大阪NPO プラザ（大阪市）		
教科書	各訪問の前に、各教員より指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	訪問後に毎回レポートの提出が課せられる(50%)。受講者は訪問先で質問を積極的に行うことが求められる(50%)。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア学実験実習II		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間科学部（人間科学科3・4年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計14名（男子学生6名 女子学生8名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	(1) 講座に所属する教員の専門分野を理解し、卒業研究における自分の研究テーマをより明確にしていく。 (2) グループワークやワークショップの手法を学ぶ。		
授業内容	(1) 前半：ボランティア人間科学実験実習Ⅰを受講した者を対象（※3年次編入生、留学中の学生、その他特別の事情がある学生についてはこの限りではない）に、ボランティア人間科学における研究対象および研究方法等について、講座所属の教員がプレゼンテーションをおこなう。 (2) 後半：受講者はグループに分かれ、助教およびティーチングアシスタントによるサポートを受けながら、調査テーマを設定し、グループワークおよびワークショップに取り組む。これらの作業を通じて、調査対象の設定、調査手法の選択、調査の実施、分析と考察、プレゼンテーションなど、基本的な研究手法を習得する。		
教科書	必要に応じて、指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席点(50%) およびワークショップ(50%) の評価による。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア学実験実習III		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間科学部（人間科学科3・4年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計12名（男子学生4名 女子学生8名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	(1) 卒業論文につながる研究テーマを確定する。 (2) 卒業論文の基礎となる「ミニ卒論」を完成させる。 (3) ポスター発表の方法を習得する。		
授業内容	本授業では、卒業論文につながる各自の研究課題を確定し、各自の研究の進め方について、指導教員から具体的な個別指導を受ける。 その成果として、学期末には文献レビュー、フィールドに関する基礎的データの収集等をもとに、卒業論文の基礎となる小論文として「ミニ卒論」を仕上げる事が求められる。 またポスター発表形式により研究成果を発表する。 ※ 研究テーマは受講者が自由に選択できる。研究テーマに関するアンケート調査（毎年5月中旬）を実施し、その内容に基づき、指導教員が決定される（6月中旬頃）。		
教科書	各自の研究テーマに応じて指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	「ミニ卒論」およびポスター発表に示された研究成果により評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名			
国際ボランティア学特講			
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間科学研究科(人間科学専攻・グローバル人間学専攻1・2年次)	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計10名(男子学生5名 女子学生5名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	途上国における社会開発協力について、研究と実践の両方を視野に入れながら、将来の「実践する研究者」や「研究する実践者」の輩出に貢献することを目指す。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> はじめに アフガニスタンからみた国際協力～人道支援、平和構築、開発援助 途上国における「貧困」と人間開発のための国際協力のあり方 国際社会の掲げる開発目標～国連ミレニアム宣言を中心としたパートナーシップ 国際保健の分野における開発協力～ポリオ、マラリア 国際保健の分野における開発協力～HIV/エイズなど 「万人のための教育」へ向けた国際教育開発～ジヨムティエンからダカールまで 女子教育 健康と教育 社会的「弱者」の保護 社会開発と人権 開発における人権の主流化 「人間の安全保障」～エンパワメントと保護の視点から おわりに 		
教科書	「テキスト社会開発」佐藤寛・野上裕生編著 「生活と開発」シリーズ国際開発3巻」佐藤寛・青山温子編著		
授業の工夫点			
授業の評価方法	論点整理と議論への参加(30%)、筆記試験(50%)、出席(20%) (2日目からは、出席前に必読文献をあらかじめ読み、論点を整理しておくこと。時限ごとの必読文献の論点をA4用紙1枚に書き、授業開始時に提出すること。)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名			
ボランティアの集団力学特講			
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間科学研究科(人間科学専攻・グローバル人間学専攻1・2年次)	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計6名(男子学生2名 女子学生4名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティアに関する研究は、単なる現場の出来事の整理に終わってはならない。周到な理論的準備とそれに伴う方法論の整備が必須である。研究者としてボランティア活動の現場に立つとはどういうことか。理論的言説を吐き、現場の人々との協働的実践を織りなすとはどういう事態をさすのか。本講義では、グループ・ダイナミクスの立場から、ボランティア研究における理論と方法について述べる。受講生には学部生と共通の基本文献に加えて内外の学術論文の読解を求める。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> I 導入：ボランティアとは？ II グループ・ダイナミクスの理論的基盤 <ul style="list-style-type: none"> 科学の分類 メタ理論 理論・方法・実践・成果の位置づけ 基礎理論：社会学的身体論・活動理論 理論的展開：対話・記憶・動機・有用性などをキーワードに ボランティア研究への示唆 III グループ・ダイナミクスの方法的基盤 <ul style="list-style-type: none"> 量的方法と質的方法 研究における2つのモード 参与観察の流れ ボランティア研究への示唆 III グループ・ダイナミクス研究の蓄積 <ul style="list-style-type: none"> 古典的研究：アクションリサーチ 実証的研究：認知革命の影響 グループ・ダイナミクス研究：協働的実践 IV ボランティアに関する理論的研究の展開 <ul style="list-style-type: none"> グループ・ダイナミクスの射程 デザイン科学へ 		
教科書	「ボランティアの知」渥美公秀著 「コミュニティのグループ・ダイナミクス」杉万俊夫編著		
授業の工夫点			
授業の評価方法	文献レポート(50%)と最終レポート(50%)によって評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	災害ボランティア論特講		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間科学研究科（人間科学専攻・グローバル人間学専攻1・2年次）	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計11名（男子学生7名 女子学生4名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティア元年とまで言われた阪神・淡路大震災から13年が経過し、災害時のボランティア活動は新奇な出来事ではなくなってきた。本講義では、災害ボランティア活動の現場を災害サイクルの各ステージに位置づけて、できるだけ詳細に紹介する。ただし、それぞれの事例に理論的な解釈を施す。研究と単なる現場報告との違いを実感してもらいたい。		
授業内容	I 災害ボランティア活動への導入 災害ボランティア活動の13年：KOBEから中越へ、そして II 災害ボランティア研究への導入 これまでの蓄積 研究者として現場に立つということ グループ・ダイナミックスの基本 III 事例：様々な協働的实践（括弧内は特に注目する事例） 0 災害サイクル 1 救急救命活動（阪神・淡路大震災） 2 緊急救援活動（阪神・淡路大震災・能登半島地震） 3 復旧活動（中越沖地震・イラン南東部地震） 4 復興活動（新潟県中越地震・台湾集集大地震） 5 防災活動（ぼうさい探検隊・いざ！カエルキャンプ・防災ゲーム） 6 隣接領域との協働（障害学・福祉・地域教育・まちづくり・土木計画学等） 7 災害NPOのネットワーク（智恵のひろば） IV まとめ 1 減災に向けた研究と理論 2 協働的实践を発展させる枠組み		
教科書	「ボランティアの知、実践としてのボランティア研究」 渥美公秀著 「地震イヅモノート」渥美公秀監修		
授業の工夫点			
授業の評価方法	随時、Short Report を課す(50%)。最終日に試験を行う(50%)。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア社会論特講		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間科学研究科（人間科学専攻・グローバル人間学専攻1・2年次）	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計7名（男子学生2名 女子学生5名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	福祉社会とは、人々が健やかで安定した文化的生活を保障されるばかりでなく、それを市民的な権利として、さらに自発的に積極的に高めてゆくような社会のあり方をいう。本講義は、福祉社会を成り立たせる基盤として、市民の側からの自発的な取り組みが活発に展開されるための条件について迫ることを目的としている。		
授業内容	1. 福祉とは何か 2. 社会福祉実践とは何か 3. ソーシャルワークの体系と展開過程 4. コミュニティと地域福祉 5. 地域福祉の源流 6. 社会福祉政策の歴史的展開と地域福祉 7. 地域福祉と自治 8. 地域福祉とコミュニティワーク 9. 英国コミュニティケアの動向 10. コミュニティソーシャルワークの展望 11. 地縁組織と地域福祉 12. 社会福祉協議会と地域福祉 13. NPOと地域福祉 14. 地域福祉における公私関係 15. まとめ		
教科書	特に指定しない。テーマに合わせて適宜指示する。		
授業の工夫点	-		
授業の評価方法	出席 40%、レポート60%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 大阪教育大学

授業科目名	いい汗かこうぜ！ ボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学生	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計30名（男子学生10名 女子学生20名）	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	15時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	サービスラーニングからボランティア学習活動への主体的参加		
授業内容	<p>第1回ボランティアとは何か？</p> <p>第2回SL・ボランティア活動の社会的意義</p> <p>第3回SL・ボランティア活動のめざすもの</p> <p>第4回SL実習にあたっての心構え・留意点</p> <p>第5回活動記録の書き方</p> <p>第6回SL実習の実際とその意義1</p> <p>第7回SL実習の実際とその意義2</p> <p>第8～23回SL実習・ボランティア活動</p> <p>第24回SL実習・ボランティア活動</p> <p>第25回グループふりかえり討議1—SL実習で学んだこと</p> <p>第26回グループふりかえり討議2—SL実習で学んだこと</p> <p>第27回グループふりかえり討議3—SL実習で学んだこと</p> <p>第28回グループふりかえり討議4—SL実習で学んだこと</p> <p>第29回体験発表・講評1</p> <p>第30回体験発表・講評2</p> <p>第8～23回は日常のSL実習・ボランティア活動を充当する</p> <p>○本講は、(1)前期の講義(2)SL実習・ボランティア活動(3)後期の活動後のふりかえり・発表の三部構成とする。</p>		
教科書	なし		
授業の工夫点	事前授業によりサービスラーニングについて学び、実際のボランティア活動に参加後、発表と討論を行う。		
授業の評価方法	SL実習・ボランティア記録(60%)および、総括レポートの作成(40%)によって総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	児童福祉施設等		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 奈良女子大学

授業科目名	キャリアデザイン・ゼミナールB(6) (まちづくりの現場で地域調査力をつける)		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学共通、全学年	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計1名（男子学生0名 女子学生1名）	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<ol style="list-style-type: none"> 1. 将来の「ごせ事典」づくりに向けて、調査の聞き取りや資料収集をおこない、それを地域づくりの資源として利用する手法をともに考える。 2. 御所のNPOの活動に協力する。 3. 奈良県北部以外の地域を知る。 4. 自分の関心・持ち味を社会貢献に活かす。 		
授業内容	<p>授業は後期不定期として実施</p> <p>【演習の流れ】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 対象地域の歴史と文化を学ぶ 3. 現地の予備調査、地元NPOとの会合 4. フィールド調査(柿調査と生活や歴史の聞き取り)計画策定 5. 報告書(HP)作成 6. 活動報告会 <p>【フィールド調査】</p> <p>地域資源になりうる調査項目は多岐に渡る。受け入れ地域の街づくりNPOと協議しながら、御所の人たちが必要とする調査内容を考え、調査を実施していきたい。</p>		
教科書	指定しない		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業態度・授業への参加度、40% 受講者の発表(プレゼン) 30%、レポート 30%		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	キャリアデザイン・ゼミナールB(5) (安全・安心のまちづくり実践講座)		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	建築構造・材料	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学共通、全学年	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計4名 (男子学生0名 女子学生4名)	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>①大学周辺地域の生活・観光環境の現状を防犯・防災の面から把握する。 ②問題を発掘し、地域に如何に貢献していくことが出来るのかを自ら考える能力を養う。 ③環境整備活動を実施するにあたっての、自治会、自治体を初めとする地域の生活安全や生活・観光環境整備に携わる関連諸機関と連携の取り方を学ぶ。 ④問題解決のための具体的な手法を検討するために、生活・観光環境整備の技術・実務に関連する分野の現況・動向を知る。 ⑤地域の環境整備活動「安全安心のまちづくり」に必要な基礎的専門知識について、関連講義(副科目)を通じて学習し、改善活動実践能力を養成する。</p>		
授業内容	<p>授業は前期不定期として実施(90分×7.5回) 【演習の流れ】 1. ガイダンス・テーマ説明 観光者の被災を想定した防災・救援対策、並びに観光資源に対する防護・防災対策などを扱う。 2. 「生活・観光を基盤とする圏域における防災計画」に関する講習会:ゲストスピーカー 奈良県における、地震災害を想定した、被災観光客の帰宅支援、観光産業の防護対策などの取り組みに関するアクションプログラムについて理解する。 3. 被災観光者を地域としてサポートする設備・システムの可能性についての検討(ワークショップ形式で)観光者が利用する施設や立ち寄り先について、震災発生を想定した場合の耐震性能・防災対策の現況について意見交換し、被災観光者支援と観光資源防護に関する問題点を探る。 4. 「文化財、伝統建築、まちなみなどを地震や火災から守る技術」に関する講習会:ゲストスピーカー 建築物や家具・設備などの耐震対策の具体的な手法と安全評価のために検討すべき事項について学ぶ。 5. フィールド調査による観光エリアの現況評価に基づく防災チェックリストの作成と防災デザインの提案、観光エリア内の施設・インフラにおける危険想定、観光資源を災害から防護する手法の現況評価をに基づき、生活・観光環境改善のための防災デザインの提案を行う。 6. 報告書作成 7. 活動報告会(公開)</p>		
教科書	指定しない		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業態度・授業への参加度 30%、受講者の発表(プレゼン) 20%、課題報告レポート 50%		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	キャリアデザイン・ゼミナールB(12) (まちなみ再生実践講座)		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	保存修景計画、建築史、地域計画	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学共通、全学年	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計4名 (男子学生0名 女子学生4名)	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>①歴史的町並みの保存・再生のプロセスを体験する。 ②歴史的町並みの活用法について理解する。 ③歴史的町並み調査の手法を理解する。 ④歴史的市街地における歴史遺産の存在形態を理解する。 ⑤地域住民と連携しながらプロジェクトを進める。</p>		
授業内容	<p>授業は後期不定期として実施(90分×7.5回) 【演習の流れ】 1. ガイダンス 2. 対象地域のくらしと文化 ゲストスピーカー 3. フィールド調査テーマの決定(*) 4. 調査計画書作成 5. フィールド調査実施 6. 報告書作成 7. 活動報告会(公開) 【フィールド調査のテーマ】 フィールド調査のテーマは下記に例示するように多種あるが、連携機関とも合議し、何れかに絞り込み、全員で一つのテーマに取り組む予定。 (1) 歴史的遺産の分布と存在形態 (2) 歴史的町並みの景観調査 (3) 歴史的建造物の調査 (4) 住民からのヒアリング調査 (5) 歴史調査 (6) 保存・再生計画の作成</p>		
教科書	指定しない		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業態度・授業への参加度 30%、受講者の発表(プレゼン) 20%、調査報告レポート 50%		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	地域居住学		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	都市計画学など	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	生活環境学部2年次以上対象	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計41名（男子学生0名 女子学生41名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	(1) 少子化社会にふさわしいまちづくりについて理解する。 (2) 高齢化社会にふさわしいまちづくりについて理解する。 (3) 公共事業の現状と課題について理解する。 (4) 商店街の現状と課題について理解する。 (5) 環境再生の現状について理解する。 (6) 地域で暮らすことの意味について関心を持つ。		
授業内容	(1) 少子化の実態とまちづくりの課題（授業回数4回） 日本で進んでいる少子化の実態、少子化対策、諸外国の動向など。 その上で、子育てしやすいまちづくりについて説明する。 保育所・幼稚園・認定こども園・子育て支援センター・ファミリーサポートセンターなど (2) 高齢化の実態とまちづくりの課題（2回） 日本で進んでいる高齢化の実態、介護保険、諸外国の動向など。 その上で、高齢者の住みやすいまちづくり、自宅で住み続けられるまちづくりについて説明する。 各種介護施設・サービス、日常生活圏、地域包括支援センターなど。 (3) 公共事業の実態と課題（3回） 公共事業の実態を通じて、まちづくりのあり方について考える。日本の公共事業の特徴、問題など。その上で、公共事業をどのように改善すべきかを説明する。 また、公共事業をめぐる不正、談合などについても解説する。 (4) 商店街の現状と地域活性化（3回） 商店街の現状を通じて、地域のあり方について考える。 商店街の実態、商店街活性化の取り組みなど。 (5) 地域環境の現状と環境の再生（3回） 地域環境の実態を通じて、環境再生について考える。 日本及び諸外国の環境再生について。		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	小テスト・授業内レポート 50%、宿題・授業外レポート 50%		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	住環境学の技術者論理		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	オムニバス形式 （住環境学科教員10名による）	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	生活環境学部1年次以上対象	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計50名（男子学生0名 女子学生50名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	必修		
授業目的	① 住環境の各分野で倫理をめぐり、どのようなことが問題になっているかを学ぶ。 ② 住環境の技術者に求められる倫理を総合的に把握する。 ③ 住環境技術者倫理に対して、自分なりの意見をもてるようになる。 ④ 倫理という点から、卒業までにどのような学習をすべきかがわかるようになる。		
授業内容	① ガイダンス＋まちづくりをめぐって技術者に求められること ② 建築設計業務のプロセスと倫理観 ③ 国際援助と適正技術・中間技術 ④ 景観問題と設計者の倫理観 ⑤ 建築環境における子どもの事故と技術者倫理 ⑥ 建築環境における子どもの事故と技術者倫理・続編 ⑦ 光・視環境計画における技術者の役割 ⑧ 住居管理における技術者の役割 ⑨ 住宅改修における技術者の役割 ⑩ 建築技術者が備えるべき構造知識とそれを担保する技術者倫理 ⑪ 暖房、冷房環境における技術者倫理 ⑫ 技術者の意思決定・価値判断がもたらすもの ⑬ 建築史における建築技術者と倫理 ⑭ 住環境技術者にとっての倫理 ⑮ まとめ		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	宿題・授業外レポート 70%、授業態度・授業への参加度 30%		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	生活と観光		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	生活環境学部1年次以上対象	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計20名(男子学生0名 女子学生20名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	本講義の学習を通して、地域が自らの規範に基づいて観光まちづくりを行う自律的観光のあり方について理解し、観光を通して身近な生活風景、生活文化を再評価し、表現する方法を身につける。 また、奈良女子大学周辺地域を新たな観光対象の視点で捉え、観光を通じたまちづくりへと展開していく能力を身につける。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 観光立国宣言と観光まちづくり 2. 観光における「図と地」論 3. オルタナティブツーリズムと自律的観光 4. 観光まちづくりの事例 観光地はいかにつくられるか 5. 持続可能な観光地づくり(エコツーリズム) 6. 生活文化を体験する観光(グリーンツーリズム) 7. 環境文化を学ぶ観光(ヘリテージツーリズム) 8. 地域をまるごと味わう生活ぶり観光のために 9. エコミュージアムの概念 10. エコミュージアムの海外事例 11. エコミュージアムの国内事例 12. きたまちを歩く 13. きたまちを案内する 14. きたまち観光の提案 		
教科書	特に指定しない		
授業の工夫点			
授業の評価方法	小テスト・授業内レポート 20%、宿題・授業外レポート 30%、授業態度・授業への参加度 10%、受講者の発表(プレゼン) 10%、出席 30%		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

○ 和歌山大学

授業科目名	NPO人材育成論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	市民公益活動	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	教育学部、経済学部、システム工学部、観光学部全学年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計25名(男子学生11名 女子学生14名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	行政や企業では対応できない多様な分野で大きな役割を担う、市民セクターとしての「NPO・NGO」の意義と可能性を探求する。 また、行政や企業との協働事例に学びつつ、NPOにおける人材育成への課題をとともに考えたい。 その際、理論のみならず、NPO活動のフィールドワークや、NPOのリーダーのゲストスピーチなど『NPO現場からの学び』を重視する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 時代が求める「NPO」の意義と可能性 3. NPO法の成立意義と課題 4. 拡がる各分野(行政・企業・NPO)の協働 5. 和歌山NPO最前線より～NPO現場のリーダーに学ぶ～ 6. 和歌山NPO最前線より～NPO現場のリーダーに学ぶ～ 7. 和歌山NPO最前線より～NPO現場調査～(フィールドワーク) 8. フィールドワーク成果発表 9. 組織のリーダーに求められるもの 10. 組織のリーダーの資質 11. ワークショップ～NPO実践～ 12. ワークショップ～NPO実践～ 13. ワークショップ成果発表 14. 市民社会を担う人材育成の課題 15. 試験 		
教科書	『実践！NPOマネジメント』(田中尚輝著 学陽書房)		
授業の工夫点	受身の講義ではなく、NPO現場調査やワークショップの形式も取り入れる。		
授業の評価方法	毎回、出席調査の代わりに「気づきのコメント」を提出し、レポート及び定期試験で総合評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	社会体験実習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	その他(2~4年次の累積となる)
担当教員の専門分野	なし(教務委員会管轄のため)	共通・専門等の別	その他(自由選択科目)
開設学部(学科)及び年次	教育学部2・3・4年次	授業のレベル	その他(実習であり、いずれにも該当しない)
平成20年度履修者数	履修という形態をとっていない	授業区分	実習
単位数	1~4	ボランティア体験の時間数	規定はなし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>本学部では、幅広い基礎学力とより専門的な知識をもつ教員として、あるいはより専門的な教養を身につけた教養人として、魅力ある人間性を備え、自然を守り育てるやさしさや国際的視野を持って行動できる人材の育成を目指している。平成12年度から、本学部では小中高等学校等教育機関へのボランティアを通して、学校等の抱える問題をより身近に体験し、自ら社会へ直接にかかわるための教育体験制度を導入している。この制度は、学内での学習研究で得られた知識を生かし、実際の現場において学校生徒とかかわることでより実践的な知識を習得するものである。教員となるための最低限の指導研修を目指した教員免許取得のための教育実習とは異なり、教育ボランティア体験をとおして教育現場へのより深い理解を持つとともに、未来を支える子どもたちへのかかわりを通して学部生の人間性を磨くものである。</p>		
授業内容	<p>参加学生の決定:ボランティア受け入れ機関(学校等)の希望内容に応じ、教務委員会が選考・決定する。 参加人数:希望機関の受け入れ人数を考慮して決定する。 実習期間:原則として長期休暇期間、及び参加者の大学講義等と重ならない曜日時間とする。 単位認定:実習報告書および実習受入機関からの活動認定表を元に単位認定を行う。科目名は「社会体験実習」(自由選択科目・単位換算=30時間1単位、最高4単位)とする。 その他:実習参加決定者は、派遣前に事前指導を受けること。また、実習中は受入機関の規則・規範を尊重し、誠実に行動すること。</p> <p>教育ボランティア参加申し込み方法 教育ボランティアに参加を希望する学生は「教育ボランティア参加希望願」に必要事項を記入し、教育学部教務係に申し込む。</p> <p>実習にあたっての注意事項 ①教育ボランティアに関する相談は、専攻指導教員および学部教務委員または教務係に行うこと。 ②実習先が決定した場合、事前に当該校と面接の上、実情ならびにボランティアの内容を把握すること。 ③実習学生は、ボランティア実習中における不慮の事故に備えて、財団法人日本国際教育支援協会の学生教育研究災害傷害保険およびインターンシップ・介護体験活動・教育実習等賠償責任保険に加入しなければならない。</p>		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	実習報告書および実習受入機関からの活動認定表を元に単位認定を行う。科目名は「社会体験実習」(自由選択科目・単位換算=30時間1単位、最高4単位)とする。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	公立学校・教育委員会・社会福祉施設等		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域再生マネジメント		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域居住政策、建築・都市計画	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	観光学部1・2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計26名(男子学生9名 女子学生17名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>地域再生のまちづくりを支えるのは、地域コミュニティである。地域を再生し、安心して安全に暮らせるまちづくりを目指すためには、その地域コミュニティの力を活かして再生プログラムを計画・運営していくことが決定的に重要である。どうすればコミュニティの力を地域再生に発揮させることができるか?本講では、このテーマを追究していく。具体的には、まずは地域の課題を明らかにし、地域が衰退に陥った要因を追究する。そのうえで、震災復興のまちづくりや諸外国のコミュニティ活動、インナーシティの再生や居住地再生などのさまざまな事例を通じて、多様な地域再生活動におけるコミュニティの役割とその活動のマネジメント手法について議論していく。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 「地域再生」の視角ー地域衰退の現状 3. 地域開発政策の展開とその課題 4. 1990年代都市再生と地域格差の拡大 5. 所得格差と地域再生 6. イギリスの都市再生事業の展開 7. サステナブル・シティー 欧米の都市再生 8. スマートグロースとニューアーバニズム 9. 地域空間と法制度 10. 地域空間の再生とコミュニティ 11. 地域再生と住民運動 12. 震災復興プロセスにみる地域再生のあり方 その1 13. 震災復興プロセスにみる地域再生のあり方 その2 14. まとめ 15. 試験 		
教科書	指定しない。随時講義レジュメおよび資料を配布する。		
授業の工夫点	地域の課題を発見し、生活者の視点から課題解決の方策を身につける。		
授業の評価方法	学期末の試験(教室での筆記試験)[70点]、出席およびレポート提出[30点]		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域防災論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域居住政策、建築・都市計画	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	観光学部2・3・4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計14名（男子学生4名 女子学生10名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	世界各国で甚大な自然災害が発生し、大きな被害が出ている。災害列島と言われるわが国において、「防災」は地域づくりには不可欠な要素である。ただし、一口に防災といっても、災害の種類だけその対応策があり、制度や対応策について学ぶには相当の時間を要する。したがって、この講義では、特に地震・津波の災害に焦点を絞り、地域づくりに必要な災害対策の基礎知識の習得を目標とする。地震・津波被害に焦点を絞るのは、今後30年の間に高い確率で南海地震の襲来が予想されており、和歌山県では大きな被害が予想されているからである。コースの前半は都市災害の状況や国内外の地域防災対策や災害復興対策について学び、後半では、防災対策の実践を身近な地域で活かすためにはどうすればよいかを議論・検討する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. わが国の災害 3. 都市と災害 4. わが国の防災体制 5. 災害対策の基本 6. 災害復興の事例～国内編 7. 災害復興の事例～海外編 8. 防災と都市計画 9. 地域レベルの防災まちづくり 1 10. 地域レベルの防災まちづくり2 11. 観光地の防災 12. 災害文化の伝承 13. 演習：まちの点検をしてみよう 14. 演習：DIG(図上訓練)をやってみよう 15. 試験 		
教科書	指定しない。随時講義レジュメおよび資料を配布する。		
授業の工夫点	学内講義だけでなく、学外演習も予定している。		
授業の評価方法	学期末の試験[50点]、出席とレポート、演習への取り組みとその成果[50点]		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	森林レクリエーション論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	森林・林業政策	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	観光学部2・3・4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計7名（男子学生2名 女子学生5名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	我が国の森林のレクリエーション的利用は、古くは物見遊山や信仰に基づく旅行に始まり、特に戦後の経済発展の中で急速な発展を遂げた。そして、戦後の農山村社会経済の急激な変貌の中で、森林レクリエーション開発は、国民に対するレクリエーションの場の供給という側面だけでなく、農山村の地域振興策として、また、資本の新たな投資対象としても位置づけられ、積極的に展開されてきた。この授業では、このような森林レクリエーションの歴史を社会的背景と共に概観し、国内外の事例を元に、人々の健全なレクリエーションの場としての、そして、地域の自然環境や文化と調和した森林レクリエーションのあり方について		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 森林レクリエーションとは何か 2. 森林レクリエーション資源 3. 森林レクリエーション開発史(1) 4. 森林レクリエーション開発史(2) 5. 森林レクリエーション開発史(3) 6. 森林レクリエーション計画と管理(1) 7. 森林レクリエーション計画と管理(2) 8. 森林インストラクター 9. 森林環境教育 10. 森林ボランティア活動 11. 森林レクリエーションと地域振興(1) 12. 森林レクリエーションと地域振興(2) 13. 森林レクリエーションと地域振興(3) 14. これからの森林レクリエーションのあり方 15. 試験 		
教科書	特に使用しない。		
授業の工夫点	ケーススタディを通じて地域振興の意義を理解する。		
授業の評価方法	試験(70%)、各授業でのミニレポートの提出状況(30%)、全体で60%以上のポイントを獲得した学生に単位を認定する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 兵庫教育大学

授業科目名	社会ボランティア体験学習Ⅰ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	保健体育	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	学校教育学部1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計18名（男子学生7名 女子学生11名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動を通じて学生の主体的な社会参加を促すとともに、豊かな人間性と社会性の育成を目指すものである。		
授業内容	1. 講義 ①オリエンテーションー本授業のねらいー ②現代社会とボランティア ③ボランティアのためのスキルトレーニング(その1) ④ボランティアのためのスキルトレーニング(その2) ⑤学校におけるボランティア教育(その1) ⑥学校におけるボランティア教育(その2) 2. ボランティア活動 30時間		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	活動の総括としてのレポート作成、年度末の報告会で発表を行う。報告会と発表の内容から成績評価を行う。		
授業のサポート体制	担当教員と不登校支援ボランティア活動室が情報提供を行っている。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 鳥取大学

授業科目名	NPO・NGO論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	地域学部地域政策学科2年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計61名（男子学生41名 女子学生20名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	必修		
授業目的	NPO・NGOが重要な役割を期待されている現代の地域社会のあり方について考える。個々人の生き方が大切にされるとともに、地域社会全体の生活の質が向上することを旨とする政策上の取り組みについて検討する。		
授業内容	1 はじめに 2 NPO・NGOとは？ 3 まちづくりNPO(その1) 4 まちづくりNPO(その2) 5 コミュニティ・ビジネス(その1) 6 コミュニティ・ビジネス(その2) 7 ボランティア・セクター(その1) 8 ボランティア・セクター(その2) 9 海外支援NGO(その1) 10 海外支援NGO(その2) 11 海外支援NGO(その3) 12 コミュニティ政策(その1) 13 コミュニティ政策(その2) 14 コミュニティ政策(その3) 15 まとめ		
教科書	テキストについては、授業時に適宜、資料配付 参考図書としては、鳥越皓之編『環境ボランティア・NPOの社会学』（新曜社）、鳥越皓之他『現代社会とボランティア』（ミネルヴァ書房）、佐藤慶幸『NPOと市民社会』（有斐閣）、山岡義典他編『NPO基礎講座』『NPO実践講座』（ぎょうせい）etc.（その他、授業時に紹介する）		
授業の工夫点			
授業の評価方法	期末レポート提出、また、授業期間中に適宜、レポートの提出を求める。 (1)授業の内容を理解しているか、(2)自分なりの問題関心を抱いているか、を評価基準とする。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	学外の関係団体の者をゲストスピーカーとして招聘し、講義をしてもらう。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域計画論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域計画学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	地域学部地域政策学科1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計57名（男子学生29名 女子学生28名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	必修		
授業目的	まちづくり、都市中心部の活性化、環境負荷が少なく暮らしやすい都市地域、あるいは、むらおこし、恵まれた自然を生かした、人口は少なくとも元気な農村地域、そして両者の関係を考え、これからの地域をつくってゆくために必要な、もっとも基本的な考え方や課題について理解する。		
授業内容	1 序論 2 地域の視点と構成要素 3 地域の概念 4 社会と地域 5 転換期にある地域計画(1) 6 転換期にある地域計画(2) 7 都市のイメージ 8 都市化と都市圏の形成 9 都市の諸問題 10 まちづくりの展開 11 これからのまちづくり 12 農村地域と地域政策 13 農村地域の生活 14 農村地域の経済 15 むらおこしの展開		
教科書	適時資料を配付または参考文献を提示する。		
授業の工夫点	講義中心であるが、授業中にミニレポートや作業課題の作成を求める。		
授業の評価方法	ミニレポートなどの平常点と学期末レポートによって評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域学入門		
担当教員（学内又は学外）	学内教員（複数）	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	地域学部地域政策学科1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計215名（男子学生103名 女子学生112名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	必修		
授業目的	地域学を修得するための第一歩。地域における様々な取組の事例を通して「地域への働きかけ」を具体的に学ぶが、同時に、鳥取を事例としつつ抽象的なレベルでの地域理解も目指す。		
授業内容	1 第1部 地域を見る視点 2 地域で生きる 3 第2部 鳥取について：景観変遷から読む鳥取の風土と暮らし 4 地域と道－上方への道－ 5 鳥取の社会経済 6 鳥取の地域性 7 第3部 ケーススタディ：地域コミュニティと住民参加、NPO 8 智頭町の挑戦 9 地域と教育 10 過疎化と限界集落 11 国際化と地域づくり 12 人と地域づくり1 13 人と地域づくり2 14 まとめ 15 予備		
教科書	個別に指示する。		
授業の工夫点	3部構成で、地域学部の教員と外部講師によるオムニバス形式		
授業の評価方法	平常点とレポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	学外の関係団体の者をゲストスピーカーとして招聘し、講義をしてもらう。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域学総説		
担当教員(学内又は学外)	学内教員(複数)	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	地域学部地域政策学科3年次	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計215名(男子学生108名 女子学生107名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	必修		
授業目的	地域学の理論的把握		
授業内容	1 授業計画の紹介 地域の課題・鳥取県の特徴と課題 2 地域の課題:地域づくりの諸課題 3 学生の地域活動報告1 4 学生の地域活動報告2 5 ディスカッション 6 特別授業:地域資源を使った地域文化再生の取組み 7 特別授業:地域活性化の事例(ビデオ) 8 2006年度「地域学総説」の到達点 9 分析枠組みとしての地域 10 地域の関係性と重層性 11 地域と健康 12 地域と教育 13 ディスカッション 14 まとめ 15 予備		
教科書			
授業の工夫点	講義とパネルディスカッション、学生による報告を含む。		
授業の評価方法	平常点とレポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	学外の関連団体の者をゲストスピーカーとして招聘し、講義をしてもらう。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域組織論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	地域学部地域政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計7名(男子学生3名 女子学生4名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	「ボランティアな生き方」をめぐって		
授業内容	1 はじめにー講義の狙いと進め方 2 ボランティアのとらえ方、ボランティアの定義をめぐって 3 ボランティア・セクター、公共性の再検討 4 越境する多重的多元的媒介者 5 ボランティアな生き方(その1) 6 ボランティアな生き方(その2) 7 ボランティアな生き方(その3) 8 ゲストを迎えて(その1) 9 ゲストを迎えて(その2) 10 ゲストを迎えて(その3) 11 ゲストを迎えて(その4) 12 村あるき(むらづくり) 13 まちあるき(まちづくり) 14 ものづくり 15 まとめ		
教科書	適宜、参考文献の紹介や資料の配付をおこなう。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	講義での発言、毎回のレポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	学外の関連団体の者をゲストスピーカーとして招聘し、講義をしてもらう。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	むらおこし論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域計画学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	地域学部地域政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計6名(男子学生1名 女子学生5名)	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	「むらおこし」、つまり農山村の「地域づくり」の着眼点や考え方を、具体的な事例を通して学びます。各地の農山村で行われてきた地域づくりを概観した上で、論理的な戦略立案のための考え方、現場での状況整理の方法を学んでいきます。		
授業内容	1 イントロダクション 2 むらおこし概論 3 さまざまな「むらおこし」(1) 4 さまざまな「むらおこし」(2) 5 むらおこしの戦略立案 6 地域資源の発見・分析方法(1) 7 地域資源の発見・分析方法(2) 8～13 実習(1)～実習(6) 14 まとめ 15 レポート		
教科書	テキストは使用せず、授業時に資料配布や参考書の紹介を行います。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業内の課題作業やレポートにより、総合的に評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	早期体験・ボランティア		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	健康政策医学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	医学部医学科	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計76名(男子学生54名 女子学生22名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	32時間
必修・選択の別	必修		
授業目的	病院ボランティア、地域のボランティアに参加し、人間としての「心のゆらぎ」を感じ社会とのコミュニケーションを経験しボランティア精神を学ぶ。		
授業内容	ボランティアについて知る。 ボランティアに参加する。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	毎回10点満点で評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	地域医療現場 福祉協議会		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	初期体験・ボランティア		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	臨床心理学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	医学部保健学科	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計123名(男子学生21名 女子学生102名)	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	必修		
授業目的	医療活動の現場で与えられた役割(仕事)を積極的に体験させることにより、看護、検査領域の教育を受けるモチベーションを高め、使命感を養うと共に、医療人として最も必要な対人関係(医療人、患者及び家族)を学ばせる。		
授業内容	1. ボランティアの概念 2. ボランティアに必要な考え方 3. 医療施設の種類とスタッフ 4. 医療と社会 5. 臨床検査の役割 6. 学生保護		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	1. 出席 2. 実習施設の責任者の評価 3. レポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	地域医療現場		
今後の授業の継続	今年度のみ(今年度で終了の予定)		

授業科目名	ボランティア I		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	食環境経済分析学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	農学部（生物資源環境学科2・3・4年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計0名（男子学生0名 女子学生0名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	45時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動を通じて、社会貢献の重要性を体感するとともに、持続力やコミュニケーション力を涵養する。		
授業内容	受講者と指導教員等とで話をして授業内容を決める。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	ボランティア実施後に自ら作成・提出する報告書と、ボランティア受け入れ先の報告書で評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	ボランティア II		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	食環境経済分析学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	農学部（生物資源環境学科2・3・4年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計0名（男子学生0名 女子学生0名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	45時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動を通じて、社会貢献の重要性を体感するとともに、持続力やコミュニケーション力を涵養する。		
授業内容	受講者と指導教員等とで話をして授業内容を決める。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	ボランティア実施後に自ら作成・提出する報告書と、ボランティア受け入れ先の報告書で評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	ボランティア III		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	食環境経済分析学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	農学部（生物資源環境学科2・3・4年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計0名（男子学生0名 女子学生0名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	45時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動を通じて、社会貢献の重要性を体感するとともに、持続力やコミュニケーション力を涵養する。		
授業内容	受講者と指導教員等とで話をして授業内容を決める。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	ボランティア実施後に自ら作成・提出する報告書と、ボランティア受け入れ先の報告書で評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	ボランティア IV		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	食環境経済分析学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	農学部（生物資源環境学科2・3・4年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計0名（男子学生0名 女子学生0名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	45時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動を通じて、社会貢献の重要性を体感するとともに、持続力やコミュニケーション力を涵養する。		
授業内容	受講者と指導教員等とで話をして授業内容を決める。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	ボランティア実施後に自ら作成・提出する報告書と、ボランティア受け入れ先の報告書で評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

○ 島根大学

授業科目名	学習ボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	初等教育開発専攻	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計58名（男子学生27名 女子学生31名）	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	24時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	学習ボランティアは、自ら学んだ成果を今度は他の人々の学習活動のために活用（支援、指導等）するものであり、今日、人々の生涯学習を支えると同時に、本人の生きがいにつながるボランティア活動の分野のひとつとして注目されている。この授業は、学習ボランティアの基礎的理論と実際について学習し、学習ボランティア活動の実践的課題を発見することを目的として行います。		
授業内容	この授業の主な内容（視点）は次のとおりです。 1 オリエンテーション（2時間） 2 講義：生涯学習とボランティア（2時間） 3 実習（体験）：学習ボランティアの実際 ・島根県立青少年の家における活動体験（12時間） ・松江市立図書館における活動体験（12時間。事前指導2時間を含む） 4 まとめ（2時間）		
教科書	福留強他「学習ボランティア活動 生涯学習テキスト」実務教育出版 岡本包治編著「これからの指導者・ボランティア 現代生涯学習全集」ぎょうせい		
授業の工夫点	この授業は、講義と実際の活動体験の組み合わせにより進めます。 講義においては学習ボランティアについての基礎的理論の学習を、活動体験では社会教育施設における実際の活動（主として土・日曜日）を行います。 なお、活動体験は、おおむね24時間を予定しています。		
授業の評価方法	講義への出席状況、提出した「ボランティア日誌」および「まとめ」を総合的に考慮して行います。単位認定のためには、8割以上の出席を条件とします。		
授業のサポート体制	オフィスアワーを水曜日15:30から17:00。ただし、事前に連絡してください。		
学外の関係機関・団体との連携	・島根県立青少年の家における活動体験（12時間） ・松江市立図書館における活動体験（12時間）		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	福祉ボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	人間生活環境教育専攻（家政教育コース）	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計18名（男子学生10名 女子学生8名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	30時間（15コマ）
必修・選択の別	選択		
授業目的	この授業では、知的障害者福祉施設でのボランティア実習を通して、社会福祉への理解を体験的に習得します。		
授業内容	・知的障害者更正施設「持田寮」で実習 ・質疑応答・レポート作成		
教科書	必要な資料は適宜配布		
授業の工夫点	福祉施設の利用者の援助を、施設のスケジュールに合わせてながら進めていく。		
授業の評価方法	単位の認定基準は 次の通りとします。 1 出席点20点 2 欠席は一回につき5点を減点します。 3 レポート80点		
授業のサポート体制	水曜日の9・10限とします。		
学外の関係機関・団体との連携	知的障害者更正施設「持田寮」		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 岡山大学

授業科目名	ボランティアの世界		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	アメリカ研究/教育開発	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計10名（男子学生9名 女子学生1名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	3時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動を題材に、自主的な調査研究と発表の技術を習得することが目的である。		
授業内容	1導入 2阪神・淡路大震災 3文献学習(1)ボランティア元年 4文献学習(2)危機管理の焦点 5文献学習(3)「心のケア」の本質 6文献学習(4)救援の思想 7(仮題)震災と岡大ボランティア 8(仮題)被災地の学生ボランティア 9(仮題)被災地の市民ボランティア 10～2はまとめて期中1回の休日に現地見学として行う(人と防災未来センターなど) 13学生による発表(1) 14学生による発表(2) 15総括		
教科書			
授業の工夫点	ボランティアの歴史、思想について学ぶとともに、阪神・淡路大震災被災地の公共機関、民間団体との関係を通じて活動への理解を深める。		
授業の評価方法	評点=(出席率+発表成績)/2×修正係数		
授業のサポート体制	学外非常勤講師3回分の確保		
学外の関係機関・団体との連携	神戸大学の学生ボランティア団体と連携して現地見学・体験を行うなど		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティアの世界		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	アメリカ研究/教育開発	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	未確定	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	3時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動を題材に、自主的な調査研究と発表の技術を習得することが目的である。		
授業内容	1導入 2阪神・淡路大震災 3文献学習(1)ボランティア元年 4文献学習(2)危機管理の焦点 5文献学習(3)「心のケア」の本質 6文献学習(4)救援の思想 7(仮題)震災と岡大ボランティア 8(仮題)被災地の学生ボランティア 9(仮題)被災地の市民ボランティア 10～2はまとめて期中1回の休日に現地見学として行う(人と防災未来センターなど) 13学生による発表(1) 14学生による発表(2) 15総括		
教科書			
授業の工夫点	ボランティアの歴史、思想について学ぶとともに、阪神・淡路大震災被災地の公共機関、民間団体との関係を通じて活動への理解を深める。		
授業の評価方法	評点=(出席率+発表成績)/2×修正係数		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	神戸大学の学生ボランティア団体と連携して現地見学・体験を行うなど		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際協力とボランティア		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際保健学・国際看護学・HIV/AIDS	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	教養教育科目・主題科目(健やかに生きる)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計約280名(男子学生約140名 女子学生約140名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	国際社会で今、現実に行き起きている問題を多く取り上げ、国際協力やその現場で活動するボランティアについて考えていきます。貧困、難民、災害、感染症、ジェンダーなどの課題に対して、私たちの生活や、生きることへの影響を中心に分析していきたい。この講義を通して、自分たちが当たり前のように生きている「今」をもう一度見つめなおし、「いのち」とは、「生きる」とは何かを自分自身に問うこと。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 今世界では何が起きているのか 2. MDGsと国際協力 3. 国際協力の課題と国際機関・NGOの理解 4. なぜジェンダーの視点が必要なのか 5. 国際協力の具体的な事例検討:アジアでのプロジェクト 6. 日本のODAとJICA 7. ボランティア活動の具体的な事例検討 8. メディア報道 9. 援助することボランティアとは何か 10. 平等と公正を考える 11. HIV/AIDSとスティグマ 12. 自然災害における援助活動と復興支援 13. 紛争と難民支援 14. 今、ここにいる私たちにできること 15. 講義まとめ 		
教科書	講義ごとに資料を配布する。		
授業の工夫点	講義と学生自らが考える時間を交互に入れるよう工夫している。学生個人が5名程度の他学部の学生と出会い、意見交換する時間をつくる。紛争地の状況や外国でのプロジェクト活動などは映像を用い、また教員自身の現場での活動写真なども多く利用したパワーポイント教材を作成している。無償でJICAやNGO関係者による生の活動報告や、JICA青年海外協力隊などの報告と説明、NHKアナウンサーの報道とメディアリテラシーの講演などを取り入れ、幅広い知識と人材の生の声を直接学生に届けるようにしている。今年度は、昨年度の講義で学生からリクエストの多かった、課題レポートの提出をより充実した内容として提出してもらえるよう工夫した。		
授業の評価方法	毎回の講義への出席の確認としてのシャトルカードへの学生同士の意見交換のまとめの記載(最終日提出)を50%。5回分のレポートの提出(50%)により判断。判断基準は、レポート作成規定に従っていること、他の文献・資料などを読み引用ができていて、独自の考察や批判が展開されていることとした。		
授業のサポート体制	保健学研究科においては、国際交流推進ワーキンググループが、2005年から活動しており、国際協力への講義や活動を学生にすすめて行くため、部局をあげての応援がある。この講義だけではなく、学生のためになると考えられるすべての国際協力やボランティアに関して協力的である。		
学外の関係機関・団体との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・岡山県内のNGO/NPOとの良好な関係があるため、無償であっても関係者が講演に来てくださる。 ・岡山国際センターのイベントや地方自治体(新見市など)が行っている国際救援活動要請講座などへの参加を学生に積極的に勧め、実際に毎年受講者がいる。 ・オイスカ四国研修センター(財)などの海外研修生の受入れを行っている市民団体とも、年に数回の国際交流をおこなっており学生と外国人研修生をつなぐことが可能となっている。 		
今後の授業の継続	今後も継続(昨年度からスタートしたばかりだが、昨年度は340名近くが受講した。国際的な講義、あるいはボランティアに関する講義への学生の関心は非常に高いと実感している。ボランティアに関しては、日本国内あるいは海外において、すでに高校時代に多様な経験をしている学生が多く、大学に入学後もそのような活動を続けたいという意欲が強いことが分かる。そのため、このような講義を継続したいと微力ではあるが考えている。)		

授業科目名	留学生支援ボランティア実習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	留学生教育	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	教養教育	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計7名(男子学生0名 女子学生7名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	60時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	留学生相談指導担当者からのアドバイスのもと、留学生支援活動に参加し、異文化理解を深め、国際感覚を養う。		
授業内容	次に示す支援活動に年間正味60時間以上参加すること。1)定例ミーティング、2)ボランティア養成講座、3)受入支援、4)キャンパスツアー、5)チュートリアルサービス、6)日本語教室、7)日本語サロン、8)各種留学生交流イベント、9)その他の支援活動。月例活動報告書を提出し、活動状況に関して、留学生相談指導担当者の点検を受ける。		
教科書	Q&Aボランティアハンドブック(岡益巳編著)		
授業の工夫点	留学生支援ボランティア・WAWAの登録スタッフのみを受講対象者とし、支援活動全般に関して常時把握し、指導する。		
授業の評価方法	支援活動参加時間数と内容に基づき、「認定」または「不認定」と判定する。		
授業のサポート体制	留学生支援ボランティア・WAWAの顧問として、常時支援活動を指導している。		
学外の関係機関・団体との連携	学外の支援団体である留学生支援ネットワーク・ピーチと連携し、留学生支援を実施している。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	学生支援ボランティア実習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	臨床心理学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部全年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計12名(男子学生1名 女子学生11名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	週2時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	学生支援活動(ピアサポートの実践)を通して、自己理解や他者理解を深める。		
授業内容	毎週1回、2～3時間、下記の活動に従事する。 1. 学生相談室を訪れる来談者に対する支援活動 2. 障害のある学生の支援 3. 「学生相談室だより」の作成などの学生相談室に関連した活動 4. その他、学生支援全般に関する活動		
教科書	なし		
授業の工夫点	与えられた活動だけではなく、学生自身が自分達で活動のアイデアを出し、実行していく事を支援していきます。		
授業の評価方法	毎週決められた時間に学生支援活動を行った者で、期末に活動報告書を提出することによって単位を認定する。		
授業のサポート体制	学生相談室のカウンセラーが活動と一緒に参加し、指導・サポートを行っている。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 広島大学

授業科目名	ボランティア社会学		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会文明	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	総合科学部2～3年生	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計82名(男子学生42名 女子学生40名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	自然科学研究や人文、社会科学的研究の基礎に立った非営利活動や非政府活動の成長が見られる。このような活動を広く理解して活躍できる基礎力を養う。		
授業内容	第1回 はじめに：社会を構成する組織の理解 第2回 第3回 ボランティア活動から非営利活動へのひろがり 第4回 第5回 NPO(非営利組織)とは何か？ 第6回 NPO(非営利組織)のマネジメント？ 第7回 NPO(非営利組織)の社会制度？ 第8回 第9回 NGO(非政府組織)とは何か？：NGOと国家 第10回 NGO(非営利組織)と開発教育 第11回 第12回 企業の社会貢献とは？ 第13回 21世紀におけるNPOと共同体の可能性 第14回 第15回		
教科書	なし		
授業の工夫点	なし		
授業の評価方法	試験、作文		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	その他(隔年開講)		

授業科目名	現代社会とボランティア活動		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	オムニバス形式なので、様々な分野の教員が担当。(文化人類学、教育学、心理学、歴史学、宗教学、法学など)	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	総合科学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計19名（男子学生7名 女子学生12名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	近年の急速な少子高齢化やグローバル化、高度情報化の波は、「個々の多様性をつつみこむ人に優しい社会」の創生を求めている。障害の有無や身体特性、年齢や言語・文化の違いに関わらず、情報やサービス、製品や環境の利便性を誰もが享受できる豊かな共生社会の実現が望まれるが、現実には、さまざまな格差、不平等、バリア、偏見が存在する。そのギャップを埋めるのに大きな役割を果たしているもの一つにボランティア活動がある。この授業では、教育、情報、環境、製造、医療、保健福祉、行政、法制度、国際協力等、さまざまな分野におけるボランティア活動や社会的な支援の実態を知り、ボランティア活動の意義と課題を明らかにする。受講生はそれを通して、今後のあり方について考えてもらいたい。		
授業内容	第1回 現代社会とボランティア活動:基本概念 第2回 高齢者福祉と支援 第3回 地域の環境をめぐる住民と市民ボランティア 第4回 支援活動とキリスト教 第5回 学校教育と支援 第6回 海外のボランティア活動 第7回 アフガニスタン医療支援 第8回 大震災とボランティア 第9回 ボランティア活動の意義とバーンアウト 第10回 支援と人権 第11回 日本の中の外国人 第12回 食と安全 第13回 医療と支援 第14回 まとめ 第15回 期末試験		
教科書	各教員の配布資料		
授業の工夫点	授業では、講義にとどまらず、視聴覚教材を活用し、実践家を外部講師として招いて、活動の様子が伝わるようにしている。ディスカッションやディベートを取り入れ、学生の参加を促している。		
授業の評価方法	以下の事柄で、総合評価。 (1) 出席。(25%程度) (2) 外部講師(第7回、第11回、第12回、第13回)の講義については、レポートをWebCTで提出。(25%程度) (3) 期末試験。(50%程度)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	地域のボランティア団体や、NPO法人から第一線で活躍している方々を外部講師として招いて、講演をしてもらっている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	障害者支援ボランティア概論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	特別支援教育、医学、工学、文化人類学、物理学、教育工学、アクセシビリティ	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	教養教育	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計64名（男子学生19名 女子学生45名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	身体障害者の特性とその支援方法について、各方面の専門家による講義をオムニバス形式で行います。(保健管理センター、アクセシビリティセンター、教育学研究科、総合科学研究科、工学研究科の講師を予定しています)障害者の支援活動を行う上で必要となる教養をバランスよく身につけることを目的とします。		
授業内容	第1回 ボランティアとNPO活動 第2回 身体機能の基礎と障害 第3回 身体障害者と心理的支援 第4回 視覚障害者とその支援方法1 第5回 視覚障害者とその支援方法2 第6回 聴覚障害者とその支援方法1 第7回 聴覚障害者とその支援方法2 第8回 学習障害者とその支援方法 第9回 肢体不自由者とその支援方法1 第10回 肢体不自由者とその支援方法2 第11回 講義保障と情報支援の方法 第12回 障害とテクノロジー:最新の支援技術 第13回 支援技術と拡大・代替コミュニケーション 第14回 高等教育のユニバーサルデザイン化とサポート体制づくり 第15回 筆記試験		
教科書	なし オンラインアクセシビリティ講座の受講を推奨		
授業の工夫点	特別支援教育、福祉工学、医学、カウンセリング、教育支援に精通した教員によるオムニバス形式の講義。		
授業の評価方法	受講態度・出席状況(60%程度)、筆記試験(40%程度)から総合的に判断します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	障害学生支援ボランティア実習A		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	医学、物理学、教育学、アクセシビリティ	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	教養教育	授業のレベル	初級・入門、中級・応用
平成20年度履修者数	計54名(男子学生15名 女子学生39名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	15時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	障害のある学生のニーズは、その障害の内容や程度に応じて多種多様です。この実習では、ノートテイクやビデオ字幕作成、バリアフリーマップ作成、点訳といった、具体的な修学支援活動の実践を通して、支援のニーズやその支援方法を学び技術を習得します。		
授業内容	<p>授業計画 第1回ガイダンス 第2回-第14回 支援活動、実技指導、講習会等 第15回 実習報告会</p> <p>障害学生の修学に関する支援活動を半期を通じて行います。支援のニーズに応じて1)ノートテイク、2)ノート作成 3)音声字幕の編集作業、4)教材用ビデオの文字おこし・字幕挿入、5)図書館での補助・介助、6)バリアフリーマップ作成 等から活動内容を選択して行います。具体的な支援活動に入る前に、実習ガイダンスを行いますので、必ず出席してください。また適宜、手話や要約筆記等、実技講習会を実施しますので積極的に参加をお願いします。(講習会は実習の一環として開催します。)</p> <p>各自の空きコマを利用して支援活動を行います。 一コマ分の活動毎に活動記録表の記入を行います。 実習報告会においてレポートの提出を課します。 支援のニーズに応じて実施します。15回分の講義に相当する支援活動に対して単位認定を行います。支援活動の内容には講習会への参加等も含まれます。</p>		
教科書	なし オンラインアクセシビリティ講座の受講を推奨		
授業の工夫点	空きコマ登録、活動記録の記入はオンラインで行っています。支援の実践は、担当教員のコーディネートに従って行います。アクセシビリティ支援のニーズと受講生の経験に応じたコーディネートが行われるため、無理せず柔軟に支援活動に取り組むことができます。		
授業の評価方法	受講態度(10%程度)、活動内容(70%程度)、レポート(20%程度)から総合的に評価します。		
授業のサポート体制	TA4名		
学外の関係機関・団体との連携	手話通訳士の先生、地域の要約筆記サークルの先生を招いて、講習会を実施。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	障害学生支援ボランティア実習B		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	医学、物理学、教育学、アクセシビリティ	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	教養教育	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計54名(男子学生12名 女子学生42名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	15時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	障害のある学生のニーズは、その障害の内容や程度に応じて多種多様です。この実習では、ノートテイクやビデオ字幕作成、バリアフリーマップ作成、点訳といった、具体的な修学支援活動の実践を通して、支援のニーズやその支援方法を学び技術を習得します。		
授業内容	<p>授業計画 第1回ガイダンス 第2回-第14回 支援活動、実技指導、講習会等 第15回 実習報告会</p> <p>障害学生の修学に関する支援活動を半期を通じて行います。支援のニーズに応じて1)ノートテイク、2)ノート作成 3)音声字幕の編集作業、4)教材用ビデオの文字おこし・字幕挿入、5)図書館での補助・介助、6)バリアフリーマップ作成 等から活動内容を選択して行います。具体的な支援活動に入る前に、実習ガイダンスを行いますので、必ず出席してください。また適宜、手話や要約筆記等、実技講習会を実施しますので積極的に参加をお願いします。(講習会は実習の一環として開催します。)</p> <p>各自の空きコマを利用して支援活動を行います。 一コマ分の活動毎に活動記録表の記入を行います。 実習報告会においてレポートの提出を課します。 支援のニーズに応じて実施します。15回分の講義に相当する支援活動に対して単位認定を行います。支援活動の内容には講習会への参加等も含まれます。</p>		
教科書	なし オンラインアクセシビリティ講座の受講を推奨		
授業の工夫点	空きコマ登録、活動記録の記入はオンラインで行っています。支援の実践は、担当教員のコーディネートに従って行います。アクセシビリティ支援のニーズと受講生の経験に応じたコーディネートが行われるため、無理せず柔軟に支援活動に取り組むことができます。		
授業の評価方法	受講態度(10%程度)、活動内容(70%程度)、レポート(20%程度)から総合的に評価します。		
授業のサポート体制	TA4名		
学外の関係機関・団体との連携	手話通訳士の先生、地域の要約筆記サークルの先生を招いて、講習会を実施。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 山口大学

授業科目名			
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部1、2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計34名（男子学生19名 女子学生15名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	20時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアや自主活動に関する基本的意義や内容を理解する。 ・コミュニケーション能力（特に社会人との）を向上させる。 ・経験したことを体系的に捉え、自分の力と変える。 ・自分の経験や思いを人にわかりやすく伝える。 		
授業内容	本講義は、座学と体験で構成されています。前半の座学では、ボランティア活動や自主活動に関する知識を学ぶとともに、そうした活動に参加するときの心構えやマナーについて紹介します。後半は、前半で学んだ知識を活かして、実際のボランティア活動、自主活動を体験し、自身の五感でもってボランティア活動、自主活動を学んでもらいます。最後の1つ前と最後の週は、体験報告会を行います。ここでは、自身の活動経験やボランティア感、自主活動感を講義内で発表することで自らの経験を明確な形として作りあげるとともに、本講義を履修している学生による様々な情報を共有することで自身の知識や感性を発展させます。		
教科書	なし		
授業の工夫点	産学→体験（随時相談受付）→プレゼンテーション		
授業の評価方法	毎回のレポートと体験報告会での報告に関する内容を評価の対象とします。		
授業のサポート体制	特色ある大学支援プログラム予算の利用、自主活動ルームとの連携		
学外の関係機関・団体との連携	学外ボランティア団体に学生の受入依頼		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名			
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	経済学部、理学部、農学部（3年次以上） 人文学部、教育学部（2年次以上）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計4名（男子学生4名 女子学生0名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	13時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	地域での自主活動を通して、地域のあり方を考える。そして、自分自身を見つめ直す。		
授業内容	最初の講義で、自己紹介と問題意識を発表してもらいます。（受講者が多い場合は、初回出席者を優先します。）授業では、地域の概要を踏まえた上で、地域の実態を調査します。フィールドは山口県阿武郡阿武町惣郷集落。集落の地域資源を発掘し「集落お宝マップ」を作成します。調査の成果は、地元の方々および日本の地域おこしを学びにきているアジアやアフリカの研修員の前で発表してもらいます。最後に、地域実習の振り返りを行い、レポートにまとめ、発表してもらいます。		
教科書	なし		
授業の工夫点	地域との連携（地域と共に考え、地域住民と共に歩き、その地域資源を発見する。プレゼンテーションを通して、そのアイデアを公表、地域づくりの一助となる。これらの一連の活動）		
授業の評価方法	考える力、立案、実行能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力		
授業のサポート体制	公用車の利用、講師謝金の支払		
学外の関係機関・団体との連携	阿武町役場、惣郷集落、尾無集落、大刈集落、独立行政法人国際協力機構、国際開発学会「日本の地域振興と国際協力」研究会		
今後の授業の継続	今年度のみ		

○ 九州大学

授業科目名		教育学ボランティア演習(前期)	
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育法制、教育方法学、教育哲学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	教育学部(3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計3(聴講5)名(男子学生0(聴講2)名 女子学生3(聴講3)名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	基本的には1回半日×10回程度。ただし、教員が認めれば学生の希望により10回以上活動を行うこともある。
必修・選択の別	選択		
授業目的	本講義は、九州大学と福岡市の協定による、「学校サポーター」派遣制度と連携し行うものである。学校現場において、さまざまなボランティア活動を行い、同時にそこから「教育」「学び」について体験的に学習する。特に、それらのフィールドの職業活動の特質を把握し、主体的な学習を通して職業的な能力形成をおこなうことの課題を把握し、またそうした職業に向けての現状の教育制度の在り方、中長期的な改革課題を検討することを究極的な狙いとする。		
授業内容	それぞれ週1回の派遣(半日)と、学内での連絡会(毎週火曜日の昼休み)を行う。特に、担当教員と緊密に連絡をとりながら、学校やその他の教育機関において、ボランティア活動を実施し、その後演習において、その活動内容の報告検討を行う。		
教科書	特に指定せず、授業中に資料を配布する。		
授業の工夫点	報告文の提出と毎週の報告会の開催により、単に体験をして終わるのではなく、現在の学校における様々な問題に気づき、意見を出し合い、解決に向けて議論を行うなど、教育学的な視点を養うことができるようにしたいと考えている。		
授業の評価方法	レポートを課す。毎週の報告会への参加度、受け入れ先の助言者(メンター)の評価、TA・RAの意見などを踏まえながら、総合的に評価を行う。		
授業のサポート体制	ボランティア活動経験者の大学院生をTAとして配置。 情報の共有を円滑に行うための授業用メーリングリストの設置、授業用電子掲示板の設置。など。		
学外の関係機関・団体との連携	福岡市教育委員会が行う事業「学生サポーター制度」と連携し、この制度を通じて市内の小中学校に学生を受け入れてもらっている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		教育学ボランティア演習(後期)	
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育法制、教育方法学、教育哲学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	教育学部(2・3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計3(聴講8)名(男子学生0(聴講3)名 女子学生3(聴講5)名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	基本的には1回半日×10回程度。ただし、教員が認めれば学生の希望により10回以上活動を行うこともある。
必修・選択の別	選択		
授業目的	本講義は、九州大学と福岡市の協定による、「学校サポーター」派遣制度と連携し行うものである。学校現場において、さまざまなボランティア活動を行い、同時にそこから「教育」「学び」について体験的に学習する。特に、それらのフィールドの職業活動の特質を把握し、主体的な学習を通して職業的な能力形成をおこなうことの課題を把握し、またそうした職業に向けての現状の教育制度の在り方、中長期的な改革課題を検討することを究極的な狙いとする。		
授業内容	それぞれ週1回の派遣(半日)と、学内での連絡会(毎週火曜日の昼休み)を行う。特に、担当教員と緊密に連絡をとりながら、学校やその他の教育機関において、ボランティア活動を実施し、その後演習において、その活動内容の報告検討を行う。		
教科書	特に指定せず、授業中に資料を配布する。		
授業の工夫点	報告文の提出と毎週の報告会の開催により、単に体験をして終わるのではなく、現在の学校における様々な問題に気づき、意見を出し合い、解決に向けて議論を行うなど、教育学的な視点を養うことができるようにしたいと考えている。		
授業の評価方法	レポートを課す。毎週の報告会への参加度、受け入れ先の助言者(メンター)の評価、TA・RAの意見などを踏まえながら、総合的に評価を行う。		
授業のサポート体制	ボランティア活動経験者の大学院生をTAとして配置。 情報の共有を円滑に行うための授業用メーリングリストの設置、授業用電子掲示板の設置。など。		
学外の関係機関・団体との連携	福岡市教育委員会が行う事業「学生サポーター制度」と連携し、この制度を通じて市内の小中学校に学生を受け入れてもらっている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 福岡教育大学

授業科目名	ボランティア実践入門		
担当教員（学内又は学外）	学内教員 学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	福祉社会教育	共通・専門等の別	その他(教養)
開設学部(学科)及び年次	教育学部1年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計42名（男子学生6名 女子学生36名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	授業の目的は 1. ボランティアに関する基礎・基本事項の理解 2. ボランティアに関する技能の習得 3. ボランティア実習を通しての実践力の向上		
授業内容	1. オリエンテーション及びボランティア理解・実践力診断 2. ボランティアの意義と役割、歴史、活動の紹介 3. ボランティアにおけるコミュニケーション・ワークショップ 4. 援助する前に考えよう、「される側」の心理 5. 「青年海外協力隊員より直接聞く」ボランティアの実際 6. 九州大学の学生によるNPO法人がなぜ持続するのか 7. ボランティアのアイデア・企画・運営・広報 8. シェアリング 9. ボランティア実習に関する研究 10-14. 実習 15. 総括		
教科書	無し		
授業の工夫点			
授業の評価方法	小テスト、レポート、実習態度・実践力、出席(欠席は3回まで)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	心理教育支援演習A		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育心理学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	教育学部3年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計0名（男子学生0名 女子学生0名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	学習支援の実習や記録作成等の自習を、週あたり180分程度
必修・選択の別	選択		
授業目的	学習や社会性に問題傾向を持つ児童・生徒理解を深めるとともに、心理教育支援技法について学ぶ。		
授業内容	担当している児童・生徒の問題傾向の類似性によって班分けし、毎週(計15回)、輪番制でその子供の現状と現在の介入方針を発表する。そして、現状の再解釈やその他の介入技法について話し合い、心理教育支援技法を習得する。		
教科書	特に指定しない。随時必要なものを指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	学習支援ボランティアの活動記録、討論への貢献度、個別支援計画に関するレポートによって評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	心理教育支援実習B		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育心理学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	教育学部2年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計1名（男子学生1名 女子学生0名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	学習支援の実習や記録作成等の自習を、週あたり180分程度
必修・選択の別	選択		
授業目的	小中学校において継続的な学習支援を行いながら、心理教育支援技法についての理解を深める。		
授業内容	【目標】 学習や社会性に問題傾向を持つ児童・生徒理解を深めるとともに、最新の心理教育技法について学ぶ。 【概要・計画】 担当している児童・生徒の問題傾向の類似性によって班分けし、毎週(計15回)、輪番制でその子供の現状と現在の介入方針を発表する。そして、現状の再解釈やその他の介入技法について話し合い、心理教育支援技法を習得する。		
教科書	特に指定しない。随時必要なものを指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	学習支援ボランティアの活動記録、討論への貢献度、個別支援計画に関するレポートによって評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 佐賀大学

授業科目名	健康福祉スポーツ ボランティア活動		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	文化教育学部1年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計10名（男子学生3名 女子学生7名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	15時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアを行う上での心構えを学ぶ。		
授業内容	学生自身が健康福祉に関するボランティアを見つけ、それに取り組む。ボランティア前に事前演習を行い、少なくとも15時間以上のボランティア演習を実践する。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 長崎大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域教育	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	教育学部1年次対象	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計256名（男子学生79名 女子学生177名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	必修		
授業目的	ボランティア活動をする授業ではなく、認識を深める授業		
授業内容	ボランティアの歴史、形態、方法、実態、精神および実践論についての基礎的知識		
教科書	なし		
授業の工夫点	講義ではあるが、手話、点字、会合等の演習的内容		
授業の評価方法	大学共通の項目によるマークシートによる評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	長崎県社会福祉協議会		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 熊本大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	教育学部（2年次対象）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計38名（男子学生15名 女子学生23名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	4時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティア活動・市民活動の現状と課題を講義し、具体的な活動に即したワークショップを通じてその共有化をはかるもの。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 少子・高齢化の推移 2. 「日本型ボランティア」 3. 阪神・淡路大震災の「衝撃」 4. 市民活動とNPO 5. 転換点に立つボランティア 6. 市民活動が息づく社会をめざして（ワークショップ） 		
教科書	なし		
授業の工夫点	「講義」扱いではあるが、双方向的な展開に努め、最終段階ではワークショップを導入するなど、受講者の意欲を引き出す工夫を行った。		
授業の評価方法	中間及び最終実践レポートによる。レポートは、ボランティア団体、市民活動団体の活動に参画して、その課題を明らかにするもの。		
授業のサポート体制	実践を行う際の団体や行政などの紹介。		
学外の関係機関・団体との連携	NPOくまもと		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 鹿児島大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計120名（男子学生75名 女子学生45名）	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択		
授業目的	人間教育の一環として、ボランティアの精神、現代社会におけるボランティアの意義、地域社会におけるボランティア、国際社会におけるボランティア等について講義した後、ボランティア活動を体験させる。		
授業内容	1回：ボランティア論の授業概要 2回：ボランティアの精神ならびに歴史 3回：現代社会におけるボランティアの意義 4回：ボランティア活動の問題点と事例 5回：ボランティア・NPOと新しい公共 6回：地域社会におけるボランティア（1） 7回：地域社会におけるボランティア（2） 8回：国際社会におけるボランティア 9回：自然保護におけるボランティア 10回：ボランティアと活動の現状 11回：ボランティア体験 12回：ボランティア体験 13回：ボランティア体験 14回：ボランティア体験 15回：総括講義、討論、レポート		
教科書			
授業の工夫点	授業では、講義、体験実習をし、討論を行いボランティアの意義を学習する。		
授業の評価方法	受講態度・討論・レポートとに評価する。		
授業のサポート体制	鹿児島県社会福祉協議会ボランティアセンター及び関係機関から講師派遣の協力を得ている。		
学外の関係機関・団体との連携	鹿児島県総務部市町村課共生・協働推進室他、関係機関へボランティア体験施設の協力を得ている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動に学ぶ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	コミュニティ心理学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計30名（男子学生20名 女子学生10名）	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択		
授業目的	障害児・者や難病患者へのボランティア活動を通して健康とは、人間とは、生死などについて学ぶ。土曜日や日曜日や長期休暇に行われることが多くなる。		
授業内容	1回：オリエンテーション 2～4回：自閉症児へのボランティア活動 5～7回：大人の自閉症（施設訪問）へのボランティア活動 8～10回：障害児・者を持つ親やきょうだいへの面接 11～13回：難病（筋ジス）青年へのボランティア活動 14～15回：まとめ・報告会		
教科書			
授業の工夫点	障害児・者、難病患者への接し方を身につける。		
授業の評価方法	実習などへの取り組み、意欲と態度などにより評価。		
授業のサポート体制	外部機関との連携を得ている。		
学外の関係機関・団体との連携	関係施設の協力を得ている。		
今後の授業の継続	今後も継続		